第 63 回日米学生会議　日本側報告書

# The 63rd Japan-America Student Conference

## 知ることから創ることへ
## ～対話と挑戦から共に描く未来～

## Question, Engage, Build:
## Collaborative Effort to Make a Difference

青山学院大学にて

エポック立命 21 にて

日中学生会議参加者と

# 第 63 回 日米学生会議 日本側報告書

# 目次


**序　章　日米学生会議概要** …… 3

**第 1 章　第 63 回日米学生会議概要** …… 7

第 63 回日米学生会議概要 …… 8

日本側参加者名簿 …… 10

米国側参加者名簿 …… 11

内閣総理大臣からのメッセージ …… 12

メディアへの掲載 …… 13

Conference Song …… 14

**第 2 章　事前活動** …… 15

**第 3 章　本会議・サイト活動** …… 21

新潟サイト …… 22

京都 / 滋賀サイト …… 26

沖縄サイト …… 30

東京サイト …… 35

**第 4 章　分科会活動** …… 39

安全保障と日米 …… 40

科学・技術の発展と倫理の再考 …… 46

グローバル化と世界システム …… 52

変わりゆく社会とメディア …… 57

文化と環境問題 ～解決への第一歩～ …… 62

歴史認識問題と国際関係 …… 67

差別から考える平等 …… 74

震災復興 …… 80

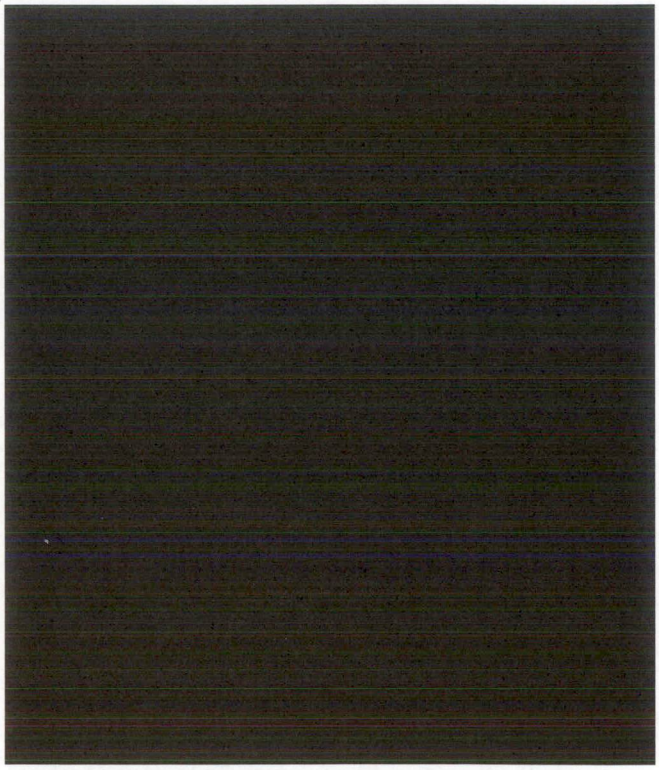
**第 5 章　参加者の声** …… 83

**第 6 章　第 64 回日米学生会議概要** …… 103

**第 7 章　日米学生会議にご協力いただいた方々** …… 107

# 序章

## 日米学生会議概要



# 第63回日米学生会議実行委員長挨拶

第63回日米学生会議実行委員長
竹内　智洋

およそ1ヵ月に亘る本会議を終え、日米学生会議は今年も新たに71人の未来のリーダーを社会に送り出した。春合宿で初めて日本側参加者が一堂に会した日から、それぞれの学生は第63回日米学生会議に参加する者としての責任を胸に日々を全うし、志の高い仲間と時に支え合い、時に刺激し合いながら成長することができた。4つの特徴的な開催地を周りながら多くの知識を得、そこで感じた率直な意見を仲間にぶつけることで、多様な問題に向き合い、参加者同士の絆を強めた。3月の東日本大震災を受け、一度は開催すら危ぶまれた会議であったが、今年の会議の開催は例年に増して、学生一人ひとりに将来国を創造する者としての自覚を植え付けるきっかけとなり、今後長期的な目標となる復興に向け大きな一歩を踏み出すことができただろう。

日本人留学生数の減少をはじめ、若者の内向き志向が問題視される中、第63回日米学生会議は「知ることから創ることへ~対話と挑戦から共に描く未来~」という理念を掲げ企画された。未来を背負う一人の学生として、一方的に知識を得るだけではなく、会議の全過程を通し感じたことを、将来どのように活かすことができるかに焦点を当てた。参加者は会議を通し、歴史認識の違いから生じる国家間の亀裂、沖縄の米軍基地が提起する国家安全保障上の課題、科学・技術の発展とそれに伴う倫理問題など多岐にわたる分科会に所属し、トピックに関する情報収集を行うと共にそれにより導かれる問題解決の糸口を探るべく建設的な議論を重ねた。

さらに参加者は長期間の共同生活を通してあらゆる挑戦を強いられ、それらを乗り越えることで確実に成長を遂げたように思う。過去に経験したことのない言語の壁に直面し、どのように自らの意見を伝えればよいのか分からずもがいていた学生たちも、日々試行錯誤を繰り返すことで仲間と打ち解け、分科会の議論を作り上げていった。乗り越える壁は高ければ高いほど、越える価値がある。参加者は単に与えられた課題をこなすだけではなく、支え合いながら挑戦を繰り返し、互いの絆も深めることができた。

3月11日の東日本大震災後、多くの方々からなぜ復興が第一の課題である今、学生会議を開催するのかと尋ねられた。確かに、第63回日米学生会議の運営費を被災地に寄付することもできただろう。しかし、日米学生会議は未来に不安がある時にこそ開催されるべきだと私は思う。震災からの復興や福島第一原子力発電所の事故が世界中で注目されている今だからこそ、将来の日米を支える学生が集まり、親交を深め、思いを共有することに意味があるのだ。自然災害がいかに危険であるか、原子力発電所にはどのような課題があるのか、さらに危機的状況において日米が協力することがいかに重要であるかを議論することこそ長い日本の復興を達成する上で必要なステップではないだろうか。

最後になりましたが、多くの困難に直面した年に第63回日米学生会議が無事開催できましたのは、ひとえに多くの方々のご理解ご協力の賜物であったと深く感謝申し上げます。第63回会議開催に際してご賛助賜りました財団、企業の方々、事前勉強会からご協力くださった講師の方々、常に温かく見守ってくださり時に優しく時に厳しくご指導くださった先輩方、実行委員会と共に第63回会議開催のために奮闘してくださった財団法人国際教育振興会及びInternational Student Conferences, Inc.の皆様、またこの他あらゆる形で私たちの会議をご支援くださった皆様に心より御礼申し上げます。

## 日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会(日本国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭に立って準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名(うち22名は大学教授およびその夫人でオブザーバー)の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以降1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、1947年に再開し、第8回日米学生会議を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国からの学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議開催であり、1953年の第14回会議まで日本国内で開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側参加者が参加するにとどまった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に、第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形で会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数の理事を務めていた財団法人国際教育振興会が日本側主催者としての責任を取ることで会議が再開されることが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などであった。この年は円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した年でもあった。1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継

続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC,Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

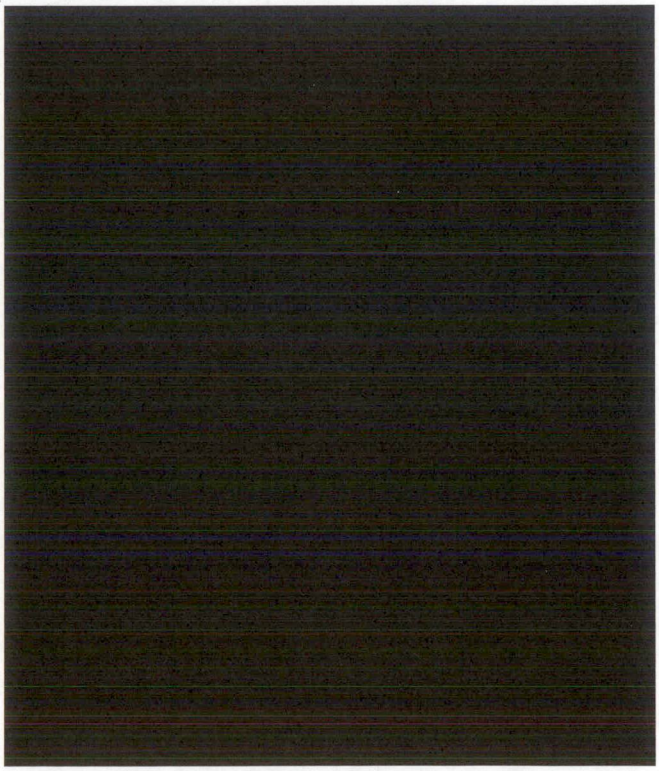
その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC,Inc.の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態をとる中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側主催団体であるJASC, Inc.はISC (International Student Conferences), Inc.と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

## 本文中の略語について

| | |
|---|---|
| JASC（ジャスク） | ：日米学生会議 (Japan-America Student Conference) の略 |
| JASCer（ジャスカー） | ：日米学生会議参加者 |
| ISC | ：米国側主催団体である International Student Conferences ,Inc. の略 |
| EC | ：実行委員会 (Executive Committee)、または実行委員の略 |
| AEC | ：米国側実行委員会 (American Executive Committee) の略 |
| JEC | ：日本側実行委員会 (Japanese Executive Committee) の略 |
| デリ、デリゲート | ：実行委員に対して日米学生会議一般参加者 (Delegate) |
| ジャパデリ | ：日本側参加者 |
| アメデリ | ：米国側参加者 |
| アラムナイ | ：日米学生会議の過去の参加者 |
| サイト | ：本会議開催地 |
| サイトスタッフ | ：各サイトで実行委員の運営補助をする参加者のグループ |
| RT | ：分科会 (Round Table) の略、参加者はいずれかの分科会に必ず所属する |
| リフレクション | ：参加者が会議の感想や反省点を話し合う場 (Reflection) |

# 第 1 章

## 第 63 回
## 日米学生会議概要



# 第 63 回日米学生会議概要

## 「知ることから創ることへ　～対話と挑戦から共に描く未来～」

## - Question, Engage, Build: Collaborative Effort to Make a Difference -

日本では近年、若者が「受身」になってきている現状が危惧されている。日本人の海外留学生の数は、10 年前のわずか 3 分の 2 に減り、若い世代の興味が外から内へと推移していることが明らかである。しかし、日本と他国の相互依存関係はますます深まり、言語、文化、生活習慣などが異なる社会で、確固たる自分を持ち、グローバルに活躍できる人材が求められている。こうした中、我々学生が担っていくべき役割とは何なのであろうか。日米学生会議は日米両国から志の高い学生を集め、1 ヵ月という時間をかけて自らの役割を模索し、その実現に向けて第一歩を踏み出すことを目指した会議である。

第二次世界大戦終結から 66 年、日米の役割は安全保障問題や経済問題など多方面で世界における重要性を増している。自衛隊と米軍との連携の強化はアジア諸国からも大きな注目を集め、また TPP や FTA の締結により日本が市場開放を図り、他国との経済連携を推進することが期待されている。しかし、沖縄の米軍基地移設問題や、自由貿易化の流れの中でいかに国内産業を強化し、日本経済を再生するかなど課題も多い。

そのような中開催される第 63 回日米学生会議では、歴史から学べる点をどのように未来に活かすのかということに重点を置く。過去を振り返り反省することも大切だが、最大の課題はその反省をどのように今日の問題に活かし、新たな未来を創っていくのかである。参加者は本会議の事前活動を通し知識を深め、背負う肩書きがない学生同士、心をさらけ出して議論をする。価値観の対立や言葉の壁に挑戦しながら、自分自身の考えを整理し、我々を取り巻く多様な問題に対する解決策を学生の視点で協議することができる。また、本会議を終えても引き続き海を越えた仲間とどのように変革を起こし、未来を切り開くのか追求していく。

議論の中での対立を乗り越え、自分の意見を「自分たち」の意見へと再構築できたとき、また、仲間を思いやることを通して自分を見つめ直すとき、参加者は自らの成長を実感することができる。短期間では解決できない問題が混在する今日、我々学生が両国の一翼を担い、切磋琢磨しながら将来を見据えた腹蔵ない対話をする意義は大きいと確信している。この会議を通し、参加者一人ひとりが様々な衝撃を受け、好奇心と向上心を持って常に挑戦し続ける者となることを期待している。

【主催】
財団法人国際教育振興会
【企画・運営】
第 63 回日米学生会議実行委員会
【会議開催期間】
2011 年 7 月 28 日～ 2011 年 8 月 21 日
【事業開催期間】
2011 年 4 月 1 日～ 2012 年 3 月 31 日
【開催地】
各開催地での滞在期間は約 1 週間となり、それぞれのサイトテーマの下で運営される。これにより、初めてとなる多くの体験の中で混乱しがちな参加者に、持つべき問題意識の指針を示すと共に、より「学び」の姿勢を取りやすくすることを目的としている。第 63 回日米学生会議は以下の 4 都市で開催された。

第 1 開催地《新潟》
第 2 開催地《京都 / 滋賀》
第 3 開催地《沖縄》
第 4 開催地《東京》

## 本会議におけるプログラム

≪分科会≫

本会議において活動の中心となる分科会は 7 つ設けられており、日米双方 5 名ずつの学生 ( 実行委員各 1 名を含む ) が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。本年度は東日本大震災を受け、例年の 7 つの分科会に加え、特設分科会として震災復興分科会が設けられ、両国の実行委員長それぞれ 1 名と各分科会の代表者 8 名、計 10 名が震災復興に特化した議論を行った。第 63 回会議における分科会は以下の通りである。

(1) Comprehensive Security
　安全保障と日米
(2) Ethics of Technology and Its Impact on Human Life
　科学・技術の発展と倫理の再考
(3) Continuity and Change in a Globalizing World
　グローバル化と世界システム
(4) Media in Shaping Social Preconceptions
　変わりゆく社会とメディア
(5) Cultures and the Environment:
Micro Approaches towards a Global Issue
　文化と環境問題 ～解決への第一歩～
(6) Interpretations of History in International Relations
　歴史認識問題と国際関係
(7) Minorities in Modern Society: Achieving Equality in a Diverse World
　差別から考える平等
(8) Disaster Response
　震災復興

≪フィールドトリップ≫

分科会の議題に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO 及び研究所などへの訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、多様かつ現実的な視点を得て議論を活性化するための重要な活動となる。

≪フォーラム≫

各開催地のテーマにそって随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または現地学生を交えたパネルディスカッションなどを通して参加者のみでのディスカッションとは異なる視点から知識を得る。

≪スペシャルトピック≫

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、分科会とは異なる視点からの議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

≪リフレクション≫

参加者が一同に集い、1 ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことで、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

≪ファイナルフォーラム≫

分科会の活動報告を行い、第 63 回日米学生会議の成果として現代社会が抱える諸問題に対する学生なりの視点を社会に発信する。

# 第 63 回日米学生会議 日本側参加者

| 日本側実行委員 | 大学 | 学部・専攻 | 学年 | 分科会 |
|---|---|---|---|---|
| 竹内 智洋 * | 慶應義塾大学 | 法学部法律学科 | 3 年 | 震災 |
| 奥谷 聡子 | 慶應義塾大学 | 法学部政治学科 | 3 年 | 安全保障 |
| 中澤 耕己 | 東京工業大学 | 生命理工学部生命工学科 | 4 年 | 科学 |
| 栗原 隆太郎 | 慶應義塾大学 | 法学部法律学科 | 3 年 | グローバル |
| 有川 慧 | 国際基督教大学 | 教養学部アーツ・サイエンス学科 | 3 年 | メディア |
| 山田 晃永 | 東京大学 | 文学部言語文化学科 | 4 年 | 環境 |
| 尾崎 裕哉 | 慶應義塾大学 | 環境情報学部環境情報学科 | 3 年 | 歴史 |
| 井上 聡美 | 筑波大学 | 社会国際学群社会学類 | 3 年 | 平等 |

* 日本側実行委員長

| 日本側参加者 | 大学 | 学部・専攻 | 学年 | 分科会 |
|---|---|---|---|---|
| 阿部 彩織 | 東京医科歯科大学 | 医学部医学科 | 2 年 | 環境 |
| 五十嵐 淳 | 早稲田大学 | 政治経済学部国際政治経済学科 | 3 年 | 歴史 |
| 石川 惠 | 琉球大学 | 理学部海洋自然科 | 4 年 | 平等 |
| 石川 陽平 | 東京慈恵会医科大学 | 医学部医学科 | 5 年 | 環境 |
| 伊藤 あゆみ | 慶應義塾大学 | 総合政策学部総合政策学科 | 3 年 | 科学 |
| 伊藤 実梨 | 慶應義塾大学 | 法学部政治学科 | 2 年 | 安全保障 |
| 上江洲 仁子 | 慶応義塾大学 | 総合政策学部総合政策学科 | 2 年 | 歴史 |
| 小田 康弘 | 東京大学 | 医学部医学科 | 3 年 | 科学 |
| 川邊 拓也 | 立命館大学 | 法学部法学科 | 3 年 | 平等 |
| 河村 統治郎 | 青山学院大学 | 経済学部現代経済デザイン学科 | 4 年 | メディア |
| 北林 未菜 | 早稲田大学 | 国際教養学部国際教養学科 | 1 年 | グローバル |
| 小池 あずさ | 広島市立大学 | 国際学部国際学科 | 3 年 | 安全保障 |
| 小林 歩 | 東京大学 | 経済学部経済学科 | 4 年 | グローバル |
| 櫻井 千浪 | 東京医科歯科大学 | 医学部医学科 | 2 年 | 科学 |
| 佐々木 いくえ | 東北福祉大学 | 健康科学部保健看護学科 | 3 年 | 平等 |
| 佐藤 安里紗 | 早稲田大学 | 国際教養学部国際教養学科 | 2 年 | グローバル |
| 塩原 梓 | 東京大学 | 薬学部 | 3 年 | グローバル |
| 杉岡 昌太 | 大阪府立大学 | 人間社会学部人間科学学科 | 3 年 | 歴史 |
| 杉山 和 | 武蔵野美術大学 | 造形学部デザイン情報学科 | 2 年 | 環境 |
| 多鹿 ちなみ | 立命館大学 | 文学部 | 3 年 | メディア |
| 舘林 真一 | 東海大学 | 政治経済学部経済学科 | 4 年 | 科学 |
| 棚田 壮太 | 横浜市立大学 | 国際総合科学部国際総合科学科 | 4 年 | 安全保障 |
| 冨沢 瑠美 | 一橋大学 | 経済学部経済学科 | 3 年 | メディア |
| 中川 渉 | 京都大学 | 経済学部経済学科 | 3 年 | 安全保障 |
| 宮内 雄飛 | 立命館大学 | 理工学部環境システム工学科 | 2 年 | 環境 |
| 八木澤 龍大 | 明治大学 | 文学部文学科 | 4 年 | メディア |
| 山下 祐里奈 | 国際基督教大学 | 教養学部アーツ・サイエンス学科 | 4 年 | 歴史 |
| 吉本 理沙 | 名古屋大学 | 医学部医学科 | 1 年 | 平等 |

分科会の略称：震災＝震災復興、安全保障＝安全保障と日米、科学＝科学・技術の発展と倫理の再考、グローバル＝グローバル化と世界システム、メディア＝変わりゆく社会とメディア、環境＝文化と環境問題～解決への第一歩～、歴史＝歴史認識問題と国際関係、平等＝差別から考える平等

# 第 63 回日米学生会議 米国側参加者

| 米国側実行委員 | 大学 | 学部・専攻 | 学年 | 分科会 |
|---|---|---|---|---|
| Daniel Jodarski* | Univ. Wisconsin-LaCrosse | Economics | 4 年 | 震災 |
| Kunihiro Shimoji | St. John's University | Political Science | 2 年 | 安全保障 |
| Yuri Hongo | Bryn Mawr College | Psychology | 3 年 | 科学 |
| Ashley Hill | Colgate University | Japanese, Int'l Relations | 4 年 | グローバル |
| Taylor Luczak | Mississippi State University | Political Science, Asian Studies | 4 年 | メディア |
| Carly Lauffer | University of Idaho | Int'l Studies | 2 年 | 環境 |
| Christina Ryu | Smith College | East Asian Studies | 4 年 | 歴史 |
| Justin Perkins | Carleton College | Japanese | 4 年 | 平等 |

* 米国側実行委員長

| 米国側参加者 | 大学 | 学部・専攻 | 学年 | 分科会 |
|---|---|---|---|---|
| Adam Waldman | Oberlin College | East Asian Studies, History | 2 年 | 平等 |
| Alexander Evans | Villanova University | Business | 3 年 | 科学 |
| Andrew Leistensnider | Baylor University | Economics | 4 年 | 環境 |
| Collin Cowdery | Oberlin College | East Asian Studies | 5 年 | メディア |
| Courtney Kimball | College of Saint Benedict | Theology and Asian Studies | 3 年 | グローバル |
| David Thayer | University of Pennsylvania | East Asian Studies | 3 年 | 科学 |
| Danielle Wilson | Tufts University | Environmental Engineering | 3 年 | 平等 |
| Elaine Le | Univerity of Wisconsin Madison | Pre-Business | 1 年 | メディア |
| Emma Tome | University of California, Berkeley | Geography | 4 年 | グローバル |
| Hangil Moon | University of Pennsylvania | Int'l Liberal Studies | 4 年 | 安全保障 |
| Jillian Anderson | Colgate University | Japanese, Int'l Relations | 1 年 | 安全保障 |
| Jose Lamazares | Duke University | Japanese | 4 年 | 平等 |
| Katie Kohn | Harvard Graduate School | Film and Visual Studies | 修 1 年 | メディア |
| Kathryn Hayden | Harverford College | East Asian Studies | 3 年 | メディア |
| Kiah Gilbert | University of Hawaii, Manoa | Business | 4 年 | 平等 |
| Kevin Jamison | University of Redland | Global Business | 3 年 | グローバル |
| Kimberly Julien | Villanova University | Biology and Psychology | 1 年 | 安全保障 |
| Kyle Rawding | Harvard College | Engineering Science | 1 年 | 環境 |
| Michelle Bahnick | Earlham College | Biology | 4 年 | 科学 |
| Michelle Lau | University of Hawaii | Int'l Business | 4 年 | 環境 |
| Meg Peavey | Colgate University | Japanese and English | 3 年 | 環境 |
| Rachel Horton | Villanova University | Mathematics | 3 年 | メディア |
| Rebecca Paolucci | SUNY Genesco | History | 3 年 | 環境 |
| Soeun Park | Haverford College | East Asian Studies | 3 年 | 歴史 |
| Stephen Zellmer | University of Wisconsin Madison | Japanese | 1 年 | グローバル |
| Wonyong Chung | Yale University | Physics and Philosophy | 1 年 | 科学 |
| Zachary Callaghan | Cornell University | Asian Studies | 1 年 | 歴史 |

分科会の略称：震災＝震災復興、安全保障＝安全保障と日米、科学＝科学・技術の発展と倫理の再考、グローバル＝グローバル化と世界システム、メディア＝変わりゆく社会とメディア、環境＝文化と環境問題～解決への第一歩～、歴史＝歴史認識問題と国際関係、平等＝差別から考える平等

## 内閣総理大臣からのメッセージ

第 63 回日米学生会議の開催を、心からお慶び申し上げます。

日米学生会議は、1934 年の開始以来、日米の学生の企画・運営により活動を継続してきました。この会議が、今日に至るまで 77 年にわたり、両国の相互理解と友情の促進に大きく寄与してきたことを、大変喜ばしく思います。

3 月 11 日に日本は観測史上最大規模の地震と津波に見舞われ、引き続き東京電力福島第一原子力発電所において原子力事故が発生しました。この震災により、多くの方が犠牲となられ、今なお行方不明の方や避難生活を強いられている方がたくさんおられます。こうした事態に対して米国からは被災直後より迅速で多岐にわたる温かい支援をいただきました。この場をお借りして改めて深く感謝申し上げます。また、この会議のために、米国から大勢の若者が来日されたことは、復興途上にある日本にとって大きな励ましとなるものであり、日米両国の関係者による御尽力に敬意を表します。

日本は国際社会から得た支援に報いるためにも、必ず復旧・復興を成し遂げ、開かれた国づくりを進めてグローバル及び地域の諸問題にこれまで以上に積極的に取り組む決意です。そのためにも、日本は、自由、民主主義、人権の尊重などの基本的価値を共有する米国との関係を一層深化させ、安全保障、経済、文化・人材交流などの各分野で協力を強化していきます。日米間の人の交流は、両国間の相互理解を推進するものであり、更なる活性化を目差しているところです。日米学生会議が若者による歴史ある交流の場として、友好関係を深める役割を果たしてくれることを望んで止みません。

今回の日米学生会議のテーマは、「知ることから創ることへ ~ 対話と挑戦から共に描く未来 ~」であると伺っております。未来を担う皆様が、日米両国が国際社会において果たすべき役割や明るい未来に向けた施策について、活発に議論し、多くの有意義な提言をされ、日米二国間の若者の交流を更に推し進める契機となることを大いに期待しております。

平成 23 年 7 月 29 日
日本国内閣総理大臣
菅 直人

## メディアへの掲載

■テレビ
2011 年 7 月 4 日　琉球朝日放送「日米学生会議 沖縄開催で基地視察も」
2011 年 7 月 31 日　にいがたインターネットテレビ「第 63 回日米学生会議 新潟フォーラム」
2011 年 8 月 12 日　琉球朝日放送「日米学生会議 県内米軍基地の現状を見学」
2011 年 8 月 15 日　琉球朝日放送「沖国大へのヘリ墜落から 7 年 墜落事故を語り継ぐ若者たち」
2011 年 8 月 15 日　NHK ニュース「日米学生 “ ひめゆり ” の証言聞く」

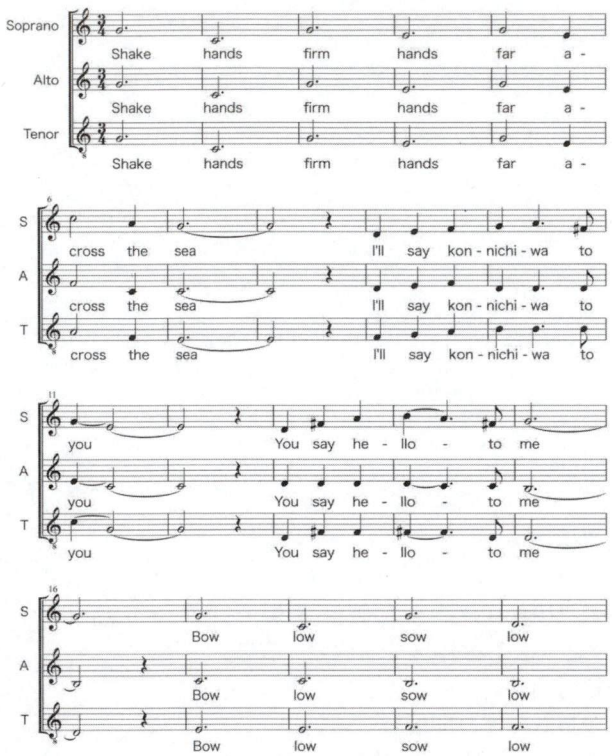
■全国紙
2011 年 1 月 24 日　朝日新聞
2011 年 2 月 3 日　読売新聞

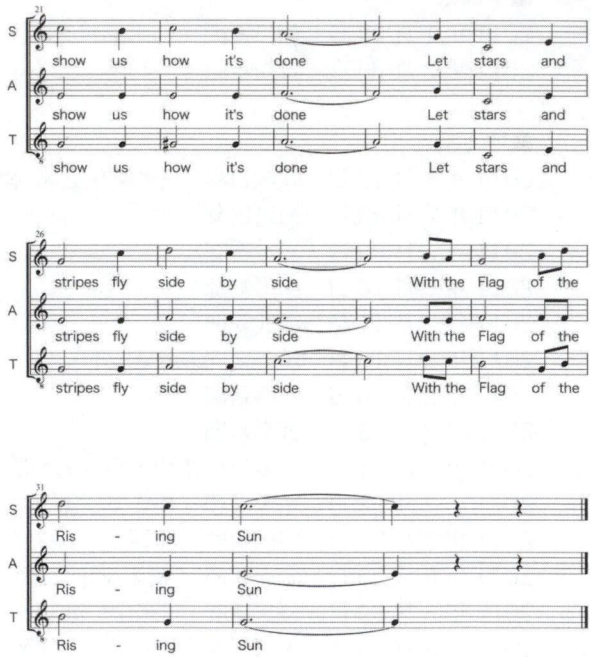
■地方紙
2011 年 1 月 12 日　新潟日報「日米学生会議 本県開催へ」
2011 年 2 月 8 日　福島民友
2011 年 2 月 9 日　愛媛新聞
2011 年 2 月 10 日　山形新聞
2011 年 2 月 11 日　河北新聞
2011 年 2 月 13 日　読売新聞 ( 東京版 )
2011 年 2 月 13 日　長崎新聞
2011 年 2 月 15 日　徳島新聞
2011 年 2 月 21 日　大阪日日新聞・日本海新聞
2011 年 2 月 22 日　新潟日報「本県など会場に『日米学生会議』」
2011 年 2 月 24 日　四国新聞・沖縄タイムス
2011 年 5 月 30 日　読売新聞「『日米学生会議』向け研修 県内からも 13 人 戦争、原爆テーマに = 広島」
2011 年 5 月 30 日　毎日新聞「日米学生会議 : ヒロシマどう伝える 中区で研修会 / 広島」
2011 年 5 月 30 日　中国新聞「日米学生会議前に核廃絶討論」
2011 年 7 月 5 日　琉球新報「来月、沖縄で日米学生会議 6 年ぶり開催」
2011 年 7 月 6 日　沖縄タイムス「日米学生会議、来月計画 沖縄開催向け寄付呼び掛け」
2011 年 8 月 10 日　彦根新聞「日米学生会議実行委員会メンバー彦根仏壇学びに井上仏壇など訪問」
2011 年 8 月 13 日　琉球新報「安保や環境 議論深める 日米学生会議が開幕」
2011 年 8 月 14 日　沖縄タイムス「日米学生、普天間見学」

■雑誌
2011 年 2 月 1 日　大學新聞「参加者募集締め切り迫る」

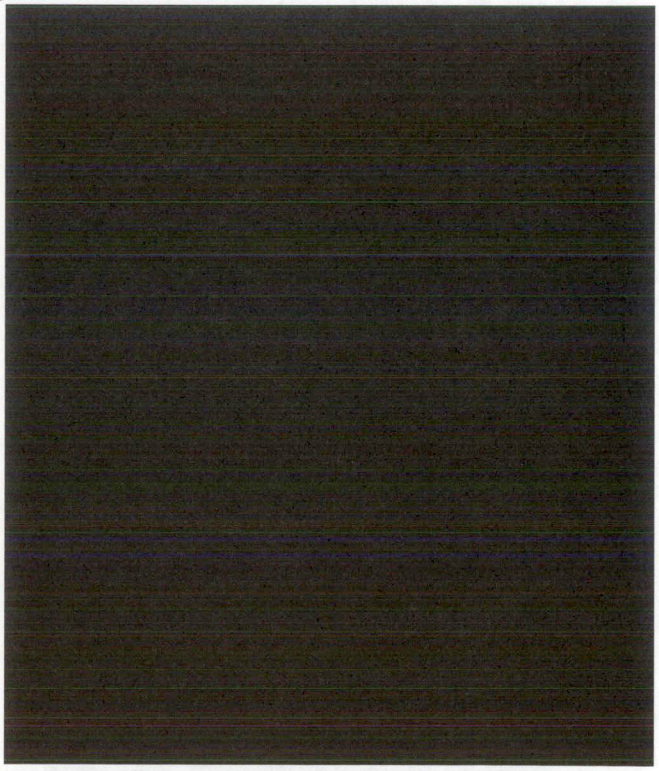
# Conference Song

作詞 Margueritte Hollingworth(Jasc 1/2)
作曲 Charles M.H.Hall(Jasc 1/2)
編曲　吉田　珠実
混成三部合唱のための編曲　玉田　元康



# 第 2 章
# 事前活動



# 第 63 回日米学生会議事前活動

## 1.　第 62 回報告会、第 63 回説明会

＜第 1 回＞
日時：2010 年 11 月 27 日 ( 土 )12:00 ～ 16:00
場所：慶應義塾大学
概要：
第 62 回日米学生会議報告会、第 63 回日米学生会議説明会に先立ち、前総務大臣 片山善博氏から基調講演として、日本の学生に向けてのメッセージと共に日米学生会議に対する激励の言葉をいただいた。その後、第 62 回日米学生会議参加者により昨年度開催された会議の各開催地での経験、分科会での議論等について報告が行われた。その後、第 63 回日米学生会議参加希望学生向けに、日米学生会議参加者によるパネルディスカッションや本年度実行委員による発表を行い、日米学生会議の魅力を広く一般にアピールした。

＜第 2 回＞
日時：2010 年 12 月 18 日 ( 土 )13:00 ～ 16:00
場所：早稲田大学
概要：
慶應義塾大学で行った第 1 回の第 62 回日米学生会議報告会と第 63 回説明会を、早稲田大学でも開催した。基調講演はなかったが、日米学生会議の魅力を伝える新たな試みとして「数字で見る JASC」という会場参加型の発表を行い、好評を博した。また、来場者との交流時間には、実行委員のみならず、過去の参加者と来場者の方々が活発に会話を交わした。

## 2.　第 63 回日米学生会議選考会

日時：第一次募集（1 月 15 日～ 2 月 28 日）
　　第二次京都選考会（3 月 12 日～ 13 日）
　　第二次東京選考会（3 月 20 日～ 23 日）
場所：同志社大学（今出川キャンパス）、
　　日米会話学院
概要：
1 月 15 日より Web ページでの一次小論文の受付を開始し、一次小論文の結果、2 次面接に進んだ応募学生に対し、グループディスカッション、個人面接、教養試験を課した。

## 3.　春合宿

日時：2011 年 5 月 1 日～ 5 月 3 日
場所：代々木オリンピックセンター
概要：
4 月の選考委員会により最終決定した 28 名の参加者と 8 名の実行委員が、春合宿にて初めて顔をあわせた。本合宿において参加者は日米学生会議の歴史を学び、外国人留学生との討論、分科会活動などの「日米学生会議の基礎」を学び、8 月の本会議に向けての最初の一歩を踏み出す機会となった。

【分科会活動】
第 4 章各分科会の活動の春合宿の活動を参照。

【ようこそ先輩】
76 年の歴史を築き上げてきた先輩方を囲み、日米学生会議の歴史を知るための交流会を開催した。第 8 回参加者の先輩から直近の第 62 回参加者まで、あらゆる世代の OBOG との対話を通じて、本年度参加者たちの 8 月の本会議に向けたモチベーションアップの向上を図った。

＜参加者の声＞

レセプションでは、初めて日米学生会議のOBの方々とお話しすることが出来た。幅広い年齢の方がいらっしゃり、日米学生会議の伝統や歴史を肌で感じた。またOBの方々のお仕事やご活動は内容、場所共に驚くほど幅広く、大学の枠を越えた日米学生会議でしか聞くことのできない、たくさんの刺激的なお話を聞くことができた貴重な機会であった。また、ほとんどの方が「日米学生会議の良い所は一ヵ月の会議で通し本気の想いをぶつけ合えるかけがえのない仲間ができることだ」とおっしゃっていたこと、「日米学生会議には全力でぶつかってみなさい」とおっしゃっていたことが印象的であった。私も本会議を含め、精一杯日米学生会議にぶつかり挑戦していきたい、と強く思った。(伊藤 実梨)

【沖縄勉強会】
講師：山口寛明氏
概要：
第62回会議の参加者であった山口氏にお越しいただき、沖縄米軍基地移設問題について学んだ。前半は山口氏による沖縄米軍基地問題と日米安全保障に関するレクチャーがあり、後半はそれらを踏まえた上で沖縄米軍基地の是非についてディベートを行った。参加者に多くの学びや気付きを与えた有意義な機会だった。

＜参加者の声＞

沖縄勉強会はとても密度の濃い２時間であり、特に昨年の参加者によるレクチャーは非常に分かりやすくまとまっていて、沖縄問題をはじめ、日米安全保障問題などの全体像を掴むことができた。

ディベートでは自分の意見に関わらず、賛成派と反対派に分かれたので、異なる観点から意見を交わすこともできた。自分のグループには沖縄出身の学生もおり、実際の騒音の被害や現地の人の声を議論に反映してくれたため、非常に参考になった。そこで感じたのは、やはり現地を実際に訪れ、現地の人々の声をもっと聞きたいということである。本会議では沖縄を訪れるので、米国基地問題などに対して現地の人と関わり議論していきたいと強く感じた。(舘林 真一)

【English Debate Workshop】
講師：綾部功 先生
概要：
英語ディベート界の第一人者である綾部先生をお招きし、ディベートの意義とルールを学んだ。論理的かつ効果的に意見を述べる方法を学んだ後に、与えられた議題について実際に討論する練習をした。

＜参加者の声＞

綾部先生の説明はとても分かりやすく、ディベートをやったことのない私でも無理なく練習できた。ワークショップの最後に行った３人グループでのディベートの実践練習は、特に役に立った。直前の先生の講義の中で取り扱った "Smoking should be banned" という論題の構成を参考にして、新しい論題について signpost、explanation、support を考え、ディベートをしたが、その時に気づいたことが１つある。それは、ディベートの思考法は論理的に分かりやすく意見を述べるときに常に必要な技術だということだ。ディベートをする時に限らず、自分の考えを論理的に相手に伝える時に、このワークショップで得たことは大変役に立つと感じた。もっと練習して、本会議で議論する際にも参考にしたいと思う。(櫻井 千浪)

【English Discussion Session】
本会議中の議論は基本的に英語で行われる。本プログラムは分科会トピック以外の内容について英語で自由に議論をすることで、英語に慣れることと英語を使った表現ために開催した。

＜参加者の声＞

English Discussion Session では、まず始めに英語で自分について語るワークショップを行っ

た。自分についての事柄でも短時間で英語で伝えきることの難しさを実感したが、日本側参加者同士笑いながら和気あいあいと楽しむことができた。

次に、英語での初のスペシャルトピックが行われた。私のグループは「テクノロジーの発展」について議論した。ここで、私が学んだことは２つある。１つめに、本当に伝える意志があれば英語は問題にならないということ。２つめに、助け合いがあってこそ良い議論ができるということである。私のグループでは原発の是非について意見が対立したが、だからこそ熱い討論ができた。そこで感じたことは、議論が白熱する時は自分の英語の上手い下手に関わらず、ただ伝えることに必死になれるということだった。そして、分からない単語があれば周りが助けてくれたからこそ気後れすることなく議論ができた。本会議でも助け合いながら熱く議論したいと感じた。(小池 あずさ)

【春合宿を終えて、本会議への意気込み】

35 人の熱い仲間と出会い、個々のモチベーションの高さに刺激を受けた。72 分の１として日米学生会議にどう貢献していくことができるかを常に追求し、これからの一瞬一瞬を本気で取り組んでいきたい。(阿部 彩織)

自分が日米学生会議にいる意義を常に考えながら関わっていきたい。自分にしかできないことを見極め、最高のパフォーマンスを発揮したい。自分が日米学生会議という歯車の１つであることを認識し、会議を盛り上げていきたい。(川邊 拓也)

英語—最初ダメだったのに、すげぇのびたね。と言わせる。RT—グローバル化すげぇな。どうやって話し合ったの!? と言わせる。JASC—63 回はヤバい。と言わせる。そして、自分が納得できる夏にする !!(小林 歩)

素晴らしい個性の溢れる日米学生会議に参加する事ができ、改めて喜びを感じている。今後、メンバーひとり一人の成長が会議を一層意義深いものにすると思うので、本会議までの３ヶ月間、しっかりと事前準備を行いたい。
(棚田 壮太)

盛り沢山な内容であっという間だったが、これが「始まりだ」という事を忘れず、本会議までの時間を大切に過ごしたい。同時に、素晴らしい仲間に感謝し、切磋琢磨して自分もしっかりと光る存在でありたいと思う。(山下 祐里奈)

## 4.　事前広島研修

日程：2011 年 5 月 28 日 (土) ～ 5 月 29 日 (日)
場所：平和記念資料館、平和記念公園、
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、原爆ドーム、
中国新聞ビル、レイノイン
概要：

本会議前に参加者有志が広島を訪れ、核兵器や戦争、平和について学ぶことを目的とした事前研修を行った。

１日目は昼に広島に到着した後、広島平和記念資料館を見学し、広島女学院の高校生と広島市立大学の学生による案内のもと、平和記念公園をグループで見学した。その後、被爆体験証言者かつ非核特使 梶本淑子氏の戦争体験談を全員でお聞きした。見学の後、日米学生会議参加者は互いの感想や問題意識を共有し、翌日の議論に備えた。２日目は広島市立大学水本和美教授と UNITAR 国連訓練調査研究所広島事務所長 アレックス・メヒア氏にご講演いただいた。その後、参加者は広島学院生徒と広島市立大学学生 13 人を交えて、グループに分かれて議論を行った。

参加者は見学や講演によりヒロシマについて理解を深め、地元学生を交えた議論を通じて平和という言葉の意味を問い直すことができた。今回の研修では、日米関係を考える上で欠かすことので

きない視点を得ることができた。

＜参加者の声＞

私は今回の広島合宿で大きく分けて２つのポイントを学んだ。

一つ目は核廃絶と平和を混同しないことである。核廃絶は平和な国家間関係を実現してからはじめて達成できるものである。唯一の核使用国である米国と唯一の被爆国である日本の同盟関係により東アジアの安全保障は保たれてきたが、それは北朝鮮の核保有や中国の衛星破壊実験などにより大きく揺らいでいる。現在の国際社会で、他国とは戦争にならないという完全な保障がない限り、この世界が核兵器を放棄することは不可能であるようにすら思える。短絡的な反核も説得力を持ちえない。

二つ目は核保有者、投下者の姿の追求である。加害者の具体的なイメージなしに被害の悲惨さだけを訴えるのでは、その悲劇が起こった原因を追究することができず、被害の印象は加害者不在の天災に近いものになってしまう。核について議論する際に、その被害の大きさのみならず開発段階の危険性や考えうる日本への脅威を意識しなければならないと感じた。(中川 渉)

被爆体験証言者 梶本淑子氏を囲んで

原爆死没者慰霊碑を前に黙祷する参加者

## 5.　防衛大学校研修

日程：2011 年 6 月 24 日 (金)
場所：防衛大学校 (横須賀)
概要：
日米学生会議では毎年、日米関係を考えるにあたり重要な「安全保障」に関する知識を深めるため、防衛大学校を訪問し、教授より特別講義を受けると同時に、同世代である防衛大学校生との対話の機会を設けている。本年度は、武田大介教官と齋藤康裕２佐による特別講義に加え、防衛大学校施設見学が行われ、その後防衛大学校学生と日米学生会議参加者が共にグループに分かれて議論を行った。

＜参加者の声＞

防衛大学校研修では、校内を見学し、講義を聴講した後、防衛大学生と議論する時間をとった。訪問前は防衛大学校に関してあまり知らなかったが、実際に訪れてみて起床から就寝まで一日の生活がすべて決まっている厳しい大学生活であると知ることができた。毎日の授業も防衛学など特殊な教科が多く、座学のみならず遠泳や 100km 歩行、銃撃などの訓練もある。しかし、私の話した学生が一番強調していたのは学生同士の思いやりの強さであった。卒業後すぐに上官となり 30 ～

50 人の部下をもつ彼らは、「どうしたら人に信頼され、良き上官となれるか」を強く意識している。ある学生の「心から相手のことを思いやらなければ、部下はついてこない」という言葉が印象的であった。先輩後輩間、同学年の間での思いやりの強さは、防衛大学校の 1 つの校風であるそうだ。時に死と隣り合わせになる軍事組織では、規則と罰則によって部下を統率するイメージが強かったが、人に信頼され立ち向かうにはどんな場合でも思いやりが重要なのだと考えた。それは、私が専門とする医療でも同じである。医師は患者の死に立ち向かうことがある。そのような中、信頼関係を築くには、軍事組織で規則ではなく思いやりを重要視したように、医師も医学の力だけでなく思いやりが重要なのだと思った。(石川 陽平)

防衛大学校生とのディスカッションの様子

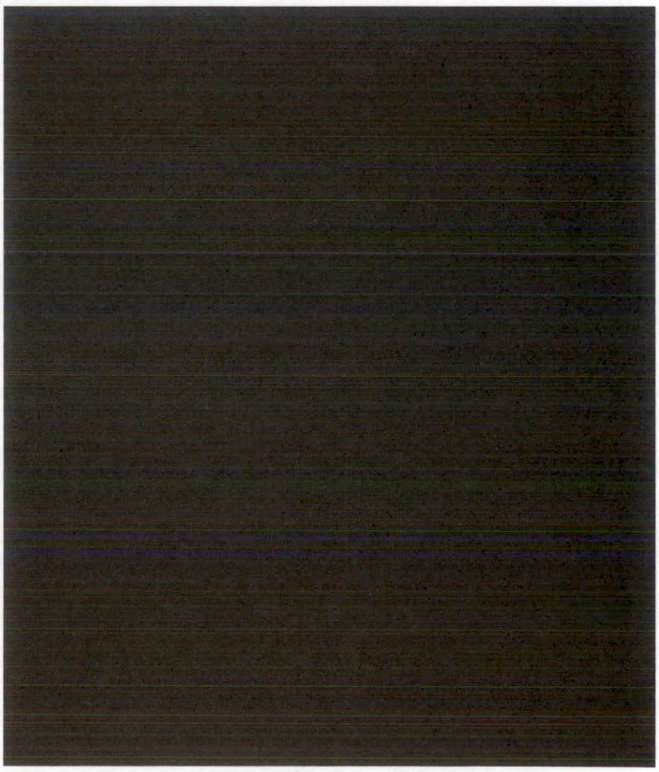
## 6.　東日本大震災・原子力発電勉強会

日程：2011 年 6 月 25 日 (土)
場所：貸教室・貸会議室 内海 (水道橋)
概要：
第 63 回日米学生会議では、参加者全員で、東日本大震災の被害とそれからの復興を考えることを目標に掲げていた。それに先立ち、東日本大震災・原子力発電勉強会を開催し、担当学生が東日本大震災の被害、また原子力発電の現状について発表を行うことで、現在の問題を共有し、自分たちに何ができるかを考えた。さらに、被災地で活動されている日米学生会議 OB で医師の高野恭平氏、宮城県石巻市を中心にボランティア派遣を行う Last One Mile Project の鈴木悠平氏をお招きし、話をうかがった。最後に、学生がどのように復興支援に携わることができるのか、グループに分かれて話し合った。本会議ではこの勉強会で得た知識を用いて、アメリカ側参加者に大震災がもたらしている影響について説明し、震災からの復興や今後のエネルギー問題ついて共に考えることができた。

## 7.　第 63 回日米学生会議 直前合宿

日時：2011 年 7 月 27 日 (水) ～ 7 月 28 日 (木)
場所：NSG 学生総合プラザ STEP
概要：
直前合宿では、1 ヵ月の本会議中のスケジュールやルールの確認、分科会活動、本会議中のプログラムの準備を行った。分科会活動では各分科会内で日本での事前活動のまとめや本会議中の目標の再確認をし、その後、他の分科会と進捗状況を共有した。また、本年度の 4 つの開催地についての情報を共有し、本会議中の各プログラムに対する事前知識を身につけた。さらにウェルカムパーティーやスキットなど、本会議中のプログラムの最終準備を行った。第 63 回日米学生会議本会議を迎えるにあたり、参加者としての責任を再確認し、本会議に備えることができた。

# 第３章
# 本会議・サイト活動



## 新潟サイト（7月28日～8月5日）

■サイトコーディネーター
井上聡美
栗原隆太郎
Carly Lauffer
Taylor Luczak

（サイトスタッフ）
北林未菜
櫻井千浪
佐々木いくえ
杉山和
棚田壮太
八木澤龍大
山下祐里奈

■サイト概要

豊かな自然と美しい景観に恵まれ、日本一の収穫量を誇る「米どころ」として日本の食卓を支えてきた新潟県。しかし近年市場開放の流れの中で、農業をはじめとする地域産業の革新が求められている。これまで、度重なる大地震に見舞われてきた新潟が、地域の特色を生かしながら復興し、新しく生まれ変わってきた過程を学び、広く地域の再生や活性化のあり方を考える。都会への人口流出と少子高齢化が進む日本で、地方都市がどのようにして新たな価値を創出し、日本の成長発展に貢献できるかを考察する。

■活動の指針と目標
- アメリカ側参加者と日本側参加者の相互理解のきっかけを作る
- 文化体験やホームステイを通して日本の文化に対する理解を深める
- 地震や自然災害とその復興のあり方を知る
- 原子力発電所とその実情を知る

■サイト日程
7月28日（木）アメリカ側参加者到着
7月29日（金）開会式、分科会活動、スキット
7月30日（土）分科会活動、北方文化博物館訪問、文化体験、バーベキュー
7月31日（日）山古志村訪問、新潟フォーラム
8月1日（月）　分科会活動
8月2日（火）　柏崎刈羽原子力発電所、エネルギーフォーラム、ながおか祭り
8月3日（水）　分科会活動、リフレクション、ホームステイ
8月4日（木）　ホームステイ
8月5日（金）　ホームステイ
※宿泊場所　NSG 学生総合プラザ STEP、菱風荘

■ 具体的な活動

・開会式

開会式は NSG 学生総合プラザにて開催された。最初に、第 63 回日米学生会議主催団体である財団法人国際教育振興会 大井孝理事長の挨拶と、「日米学生会議 in 新潟」の共催団体である新潟日米協会会長 渡辺敏彦氏から挨拶をいただいた。また、内閣総理大臣 菅 直人氏からのメッセージ、新潟県副知事 森邦雄氏、新潟市長 篠田 昭氏から祝辞をいただき、県内からも多くの方々がご来場くださった。

周囲の第 63 回日米学生会議への期待と参加者としての責任を感じた。開会式に出席する前は、この 1 ヵ月間、出会ったばかりのアメリカ側参加者と英語で会話し、両国の参加者と仲良くしていけるのだろうか、どのような議論ができるのだろうかという不安で胸がいっぱいだった。しかし、これほど歴史のある重要な会議に参加できることは非常に光栄であり、その中で自分の力を出し切り、自分の成長に必ずつなげたいと感じた。第 63 回日米学生会議が始まるのだと改めて認識し、

気を引き締めるとともに、参加者としての自覚を養うことができた。(八木澤 龍大)

開会式にて日本側実行委員長挨拶の様子

開会式後、参加者の皆様と

・スキット

日本側参加者とアメリカ側参加者に分かれて、各30分程度自国の文化を紹介する寸劇を披露した。日本側の寸劇は、日本アニメの有名な5匹のキャラクターが、会社での名刺交換や合同コンパなど日本の文化を経験するというものであった。事前に衣装を揃え、フェイスペイントを塗るなど入念に準備して、日本文化をユーモアを交えて伝えることができた。また、日本側参加者として団結する良い機会ともなった。一方、アメリカ側の寸劇は、カップルがアメリカの大規模ショッピングセンターに入り、アメリカ文化を象徴するディズニーランド、マウントラッシュモア、スターバックスなどに空間旅行をするというものであった。アメリカ側の台本中の冗談や演技のダイナミックさに感激した。参加者一人ひとりのキャラクターを把握する良い機会となった。(北林 未菜)

・北方文化博物館訪問

250年余もの歴史を持ち、新潟とアメリカの関係の象徴でもある北方文化博物館において、日本の伝統文化体験を行い、日米間の歴史と日本の文化に関する知識を深めた。北方文化博物館では、伝統的な日本の家屋とその敷地の広さに驚かされた。庭園の中を歩き、日本の夏の美しさを感じることができた。新潟産のおいしいお米でつくられたおにぎり、漬物、豚汁、とうもろこしをいただき、日本の家庭料理を味わうことができた。八代目当主伊藤 文吉氏より北方文化博物館の概要を説明していただき、戦後の日本における伝統文化の重要性とその継承の難しさを学ぶことができた。館内を見学した後、琴や詩吟を聞きながら華道吟(生け花のパフォーマンス)を鑑賞し、茶道を体験した。北方文化博物館での見学を通して、他者を尊敬することに重きを置く日本の文化の重要性を学んだ。(佐々木 いくえ)

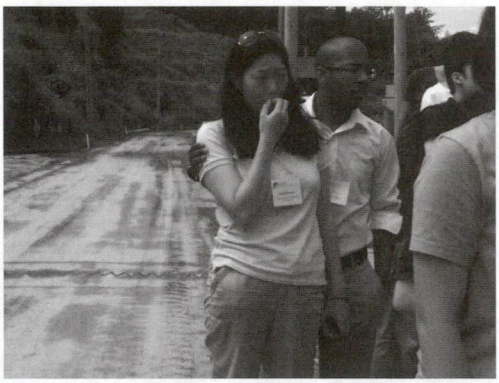
茶道体験の様子

・山古志村訪問

2004年の新潟県中越地震によって、最も大きな被害を受けたと言われている山古志村を訪問し、震災がもたらした厳しい現実とその復興過程を知ることで、東日本大震災後の復興への手がかりを考察した。山古志村に到着してすぐに、山古志村の復興に関するビデオを鑑賞した。震災により、自宅のみならず伝統のコイや闘牛を失い、精神的な支柱を喪失してしまった山古志村の人々が、山古志の文化を軸に一つのビジョンを持って復興に取り組んできたことを学んだ。その後の村

の見学では、震災時に土砂崩れで川がせき止められた際、下流の被害を最小限に抑えるべく水没した地区を訪れた。上流から流された家々がそのままの状態で残されている様子を見て、美しい自然に囲まれた村が地震によって受けた傷あとに、改めてショックを受けた。

山古志村が受けた被害とその復興の軌跡を現地で見学できたことは、東日本大震災の起こった年の日米学生会議にとって大きな意味があったと感じている。実際にその地に立ってみることで、より身近に震災に向き合うきっかけとなったと考える。(櫻井 千浪)



山古志村見学の様子

・新潟フォーラム

新潟県は、新潟県中越地震、新潟県中越沖地震という２つの大地震を経験している。その２つの地震の復興過程を通して官民学がどのように手を取り合ってきたのかを学び、東日本大震災の復興の展望を新潟県内の大学生とともに学生の視点から考えた。

冒頭では、新潟県県民生活・環境部震災復興支援課課長の水沢 泰正氏が、大震災からの復興について説明された後、日本側参加者で東北福祉大学に通う佐々木いくえが、東日本大震災における復興支援策について発表を行った。その後、元山古志村村長として実際に震災時に現場で活躍された衆議院議員の長島 忠美氏、社団法人中越防災安全推進機構理事である稲垣 文彦氏、特定非営利活動法人 JEN の濱坂都氏を迎え、「官民学から考える復興 ～日米の学生に、今できること～」というテーマのもと、闊達なパネルディスカッションが行われた。三者に共通していたのは、政府やボランティアではなく、市民自らの手によって実現する復興の必要性であった。その後、日米双方の参加者と現地大学生による復興支援に関する発表と全体での意見交換が行われ、今後日米の学生が担う役割について考えを共有した。(棚田 壮太)

新潟フォーラムにて参加者による発表の様子

・柏崎刈羽原子力発電所訪問、エネルギーフォーラム

世界最大規模の原子力発電所である柏崎刈羽原子力発電所を訪問し、講演会を通して、安全性や効率性という観点から原子力発電について考察した。まず、東京電力の職員の方より、柏崎刈羽原子力発電所における地震対策や津波対策の概要の説明を受けた。そして、発電所内の資料館を訪ね、原子力発電の仕組みを学んだあと、実際の発電施設に行き、発電施設内の原子炉格納容器やタービンなど発電設備の一部を見学した。午後には、原子力発電所の情報の透明性を確保するために柏崎市内で活動されている地域の会代表の新野 良子氏よりご講演をいただいた。

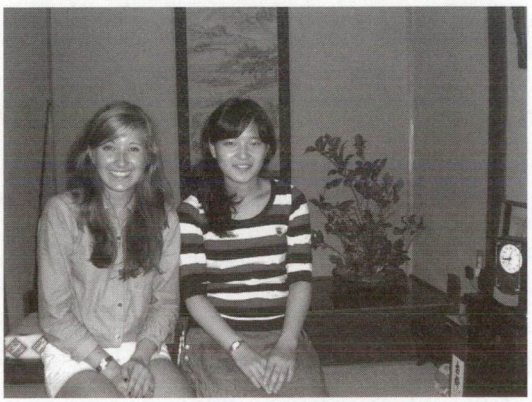
東京電力の方による説明で、柏崎刈羽原子力発電所の過去の事故についてあまり触れられていなかったのは残念だったが、自分なりに発電施設や資料館の見学から福島第一原子力発電の事態の深刻さをイメージできたと思う。また、通常は見学許可を得るのが難しい原子力発電所を見学できた

ことは貴重な経験であったと感じる。福島第一原子力発電所の事故を受けてなお、見学や説明会を受け入れてくださった東京電力の方々に感謝いたします。(杉山 和)

・ホームステイ

８月３日夕刻から８月５日早朝まで、新潟に住むご家庭でホームステイをさせていただいた。アメリカ側参加者が、日本の家庭で生活をし、文化や生活様式を体験することはもちろん日本側参加者もまた、ホストファミリーとアメリカ側参加者との橋渡し役になりつつ、日本の魅力を再発見することができた。

アメリカ側参加者とともに、新潟の温かい家庭に受け入れていただき、非常に有意義で楽しい時間を過ごした。新潟市内を一望できる展望施設や、古くから地域の人々に親しまれてきた神社、伝統的な茶室など、様々な観光スポットに連れて行っていただき、新潟について多くのことを学ぶことができた。また、地元の剣道教室にお招きいただき、日本の伝統的な武術を学びつつ、地域の方々に触れ合うことができた。なにより 10 人以上の大家族で囲む夕食の食卓は賑やかで温かく、改めて家族の大切さを実感したと同時に、都会で一人暮らしをする私は、故郷の家族がとても恋しくなった。実際に新潟に住むご家族のもとでホームステイすることで、より地域に密着した学びを実現できたとともに、人々の優しさに触れ、人間的にも豊かになれたと感じている。(山下 祐里奈)



ホームステイのご家庭にて

■サイトコーディネーター後記

当初私たちが掲げていた新潟サイトでの目標は、「『地方都市』として新潟が果たしている役割を探ること」と「参加者同士の団結を深めること」であった。しかし、３月 11 日の東日本大震災を受け、新潟サイトの主目的を「震災からの復興に向けて私たちができることを考察すること」に改め、その実現に向けて準備を重ねた。

本会議では、新潟フォーラムや山古志村訪問等を通じて、大地震を経験された方々や復興に携わっている方々からお話をうかがい、そして実際に被災地に赴いたことによって、多くの参加者が「震災からの復興」を自分の問題として捉えることができた。一方で、柏崎刈羽原子力発電所を訪問した際は、世論と参加者に反原子力発電の気運が高まっていたせいか、冷静に現状を分析することが難しく感じられた。自らの問題としてひきつけながら、俯瞰的な視野で物事を見ることの難しさを感じた。今後、参加者には新潟サイトでの経験を生かし、そのバランスを保つことに留意しながら、東日本大震災や世界の震災からの復興にいかに貢献できるかを考え、行動に移して欲しいと切に願っている。

もう一つの目的であった「参加者同士の団結を深めること」は、新潟サイトだからこそ達成することができた。都会の雑踏から離れた落ち着いた環境の中でじっくりと会話ができたこと、迫力満点の新潟総踊りや長岡花火に共に感動したこと、さらにはホームステイで「家族」の一員として生活したこと。このような新潟ならではの環境や経験が、参加者の団結を深めることに大きく寄与し、第 63 回日米学生会議が密度の濃い１ヵ月となることを約束してくれた。

本会議を終え、第 63 回日米学生会議の第１サイトとして新潟を選んで良かった、と心から感じている。非常に貴重で有意義な時間を過ごさせていただいた新潟の皆様、ならびに会議を運営するに当たってご協力いただいた全ての方々に心から感謝申し上げます。本当にどうもありがとうございました。(井上 聡美、栗原 隆太郎)

# 京都 / 滋賀サイト (8 月 5 日～ 8 月 10 日)

■サイトコーディネーター
有川慧
中澤耕己
Ashley Hill
Justin Perkins

(サイトスタッフ)
佐藤安里紗
伊藤あゆみ
川邊拓也
杉岡昌太
多鹿ちなみ
中川渉
宮内雄飛

■サイト概要
歴史的な寺社仏閣が並び、日本の伝統や文化遺産が生活の中に息づく京都。グローバル化に伴って価値観が多様化し、長い間受け継がれてきた日本文化の存在感が薄れる中、日本の社会と文化を形作っている歴史や伝統に今一度焦点を当てる。日本固有の価値とは何かを問い、再発見することから、現代の日本社会の中で今後それをどのように活かし、融合させていくかを検討する。また、美しい自然と豊かな歴史的資産を持つ滋賀では、現地への視察や人々との対話を通して、琵琶湖の保全活動や自然との共生について考える。

■活動の指針と目標
・現代に生きる伝統文化の在り方を問い直す
・湖と共に生きる人々の暮らしに触れ、環境問題を身近に感じる
・分科会の議論を活かし、東日本大震災について考察する

■サイト日程
8 月 5 日 (金) 新潟から到着、サイトオリエンテーション、分科会活動
8 月 6 日 (土) 広島ワークショップ、分科会活動
8 月 7 日 (日) 琵琶湖フィールドトリップ、分科会活動
8 月 8 日 (月) 企業訪問、分科会活動
8 月 9 日 (火) 京都中間報告会、京都観光、リフレクション
8 月 10 日 (水) 沖縄へ出発
※宿泊場所　立命館大学びわこ・くさつキャンパス　エポック立命 21

■具体的な活動
・広島ワークショップ
第 63 回日米学生会議の期間中に 8 月 6 日を迎えるにあたり、日米を代表する学生として「ヒロシマ」は必要不可欠なトピックであった。

日本側参加者の多くは 5 月下旬に行われた事前研修で広島を訪れていたが、6 日は「ヒロシマ」についてだけでなく、平和の定義や核の利用なども含めた多岐にわたる議論を展開した。

まず、立命館大学衣笠キャンパスで、広島事前研修スタッフからの研修報告が行われた。その後、日米学生会議 OB でもある三重大学の児玉克哉教授によるご講演を受け、立命館大学国際平和ミュージアムを見学し、最後に小グループに分かれて議論を行った。そこでは、戦争や原子爆弾投下の是非など、通常の学生交流プログラムでは避けられがちなトピックを真剣に語り合うことができた。

日本側参加者として、また広島ワークショップに多少関わっていた身として、アメリカの学生が想像以上に「ヒロシマ」について興味を抱き、知識を持っていたことに驚くとともに、さらに深い議論が行える可能性を感じることができた 1 日だった。(多鹿 ちなみ)

児玉先生によるレクチャーの様子

・琵琶湖フィールドトリップ

(1) 琵琶湖上での活動

琵琶湖汽船の環境船「megumi」に乗船し、琵琶湖に浮かぶ沖島に向かった。当日は天候に恵まれ、琵琶湖の景色を眺めながら琵琶湖の抱える環境問題について理解を深めた。船上では、国際湖沼環境委員会 (ILEC) 研究員の Thomas Ballatore 氏や、NPO 法人碧いびわ湖で代表を務める村上悟氏からご講演をいただくとともに、バンドン採水器を用いた簡単な水質調査を行った。Thomas Ballatore 氏には、歴史的経緯を踏まえながら琵琶湖の抱える問題をユーモア溢れる形で説明していただいた。村上悟氏には、湖と人々が共存する生活を例に挙げ、いま私たちに何ができるかを参加者各々に問いかける講演をしていただいた。講演後には、北湖でバンドン採水器を用いて深度 70m の水を採集し試飲した。真夏の日差しの下で飲む琵琶湖の水に心も体も潤った。(宮内 雄飛)

(2) 沖島での活動

沖島では、主に地引網漁体験、島内散策、漁業組合長のお話をうかがうという３つのプログラムを行った。沖島では湖岸に畑や家々が続き、木々の緑が眩しかった。浜に着くと皆交代で地引網を引き、自然と共に生きる大変さを実感し、獲れた魚を見た時には達成感でいっぱいになった。事前に聞いていたが、やはり外来種が多く琵琶湖の現実を目の当たりにした。

その後、島の中心に広がる住宅街を歩き、沖島に住んでいらっしゃる方々の生活を垣間見ることができた。歩いていると、まるで違う世界に迷い込んだかのような錯覚を受けた。都会に住んでいる自分たちがいかに便利さを追求し、沖島のような自然に密接した生活様式を忘れているかを考える良い機会だった。

最後に沖島漁業組合の漁師の方々にお話をうかがった。沖島では、若者が以前より農業だけでなく漁業にも関心を示さなくなってきているということが印象的だった。私たち若者が沖島の現状について深く知り、考えることで、世界的な環境問題への見方も変わるのではないかと思った。(佐藤 安里紗)

採水体験の様子

地引き網体験の様子

・企業訪問

長年にわたり地元の産業振興に力を入れている中小企業を訪問した。井上仏壇、松栄堂 (お香)、龍村美術織物、丸久小山園 (お茶)、淀川製作所 (電気自動車) という５つの選択肢の中から、参加者

の興味ある企業にグループに分かれて訪問した。どの企業も品質本位の老舗でありながら、時代性を意識した事業を行っており、生活に結びついた日本伝統の力強さを感じさせるものばかりであった。アメリカ側参加者はもちろんのこと、日本側参加者も自国の文化を直接的に再認識する良い機会であった。2006年に改正され、「日本の伝統と文化」を愛し、「他国を尊重する」などの文書が盛り込まれた教育基本法に見られるような、衰退する国民道徳への危惧は、「本物」を鑑賞し体験することから解消されていく。そのうえで、国際社会に生きる日本人としての自覚や誇りを養うためにも、今回の伝統文化の学習は大変有意義であったと言える。(中川 渉)

私たちは創業100年余の老舗、龍村美術織物を訪問し、伝統産業がいかに現代に活かされているかを考えさせられた。最初に訪れたのは同社工場であった。袋帯の製作行程を見学し、織糸や織機の歴史などの詳細な説明を受けた。完成した美しい織物を見て、参加者から歓声があがった。ジャガードの改良過程や厳格な品質管理など、行程の随所にこだわりが見受けられた。

工場見学の後は本社で作品を多数鑑賞した。奈良の正倉院裂や名物裂、祇園祭の前懸など様々な復元織物のほか、航空機、新幹線のシート生地も見せていただいた。織構造、染料の種類の分析から始まる緻密な作業行程や織物にまつわる逸話を教えていただき、織物の深遠さを垣間見たような気がした。

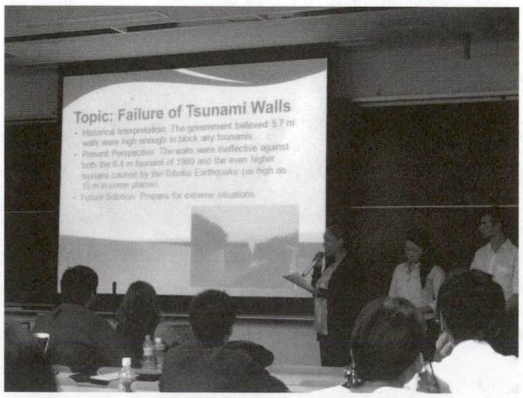
また、龍村美術織物はFENDIやクリスチャン・ディオールなどの海外ブランドとも連携している。意外にも、国際化を過度に意識することはないそうだが、各々の製品を確実に仕上げ培ってきた高い技術と自信が、何よりも強い国際競争力となっているようだった。(伊藤 あゆみ)

龍村美術織物　工場見学の様子

・京都中間報告会

会議の中盤で迎えた京都中間報告会では、各分科会がそれまでの議論の経過と今後の展望について発表した。また、3月に発生した東日本大震災とそれに付随する諸問題について、各分科会が関連の深いトピックを選び、それに対する考察を述べることで、東日本大震災に対する多角的な視座を得ることを目的とした。

各分科会の日本側参加者とアメリカ側参加者が協力し、学生として、また分科会として今回の悲惨な地震に対して学生として何ができるかを議論した結果、日本側参加者だけでは考えつかないような様々な観点が内包されていた。そして、日米学生会議が始まってから約2週間という短い期間を想像させないような、生産的かつ創造力豊かな発表が全ての分科会で見受けられた。(杉岡 昌太)




京都中間報告会の様子

・京都観光

中間報告会を終えた後に、京都観光を行った。参加者たちは、７つの候補スポット（平安神宮、金閣寺、銀閣寺、清水寺、京都国際マンガミュージアム、三十三間堂、八坂神社）から１つを選択し、関西の高校に通う生徒の案内の下、各観光地を訪問した。

京都には、日本を代表する観光名所が多数あり、歴史の持つ重みや伝統的な味わいをそれぞれが醸し出していた。アメリカ側参加者にとって、日本文化の持つ魅力を生で体験する良い機会であったと思う。同時に、日本側参加者にとっては、近年のグローバル化に伴い「自国文化離れ」が懸念されている中で、改めて自国の持つ文化の良さに触れることができた。（川邊 拓也）

銀閣寺にて

平安神宮にて

■サイトコーディネーター後記

京都 / 滋賀サイトでは、現在その土地で生活されている方々との触れ合いを大切にした活動を行うように心がけた。沖島では漁師の方をはじめとする島民の方々の生活に触れさせていただいた。また、企業訪問では、伝統工芸や歴史ある地元の産業を活かしながらも時代に合わせた事業を展開されている企業の方から、直にお話をうかがうことができた。京都観光は、現地の高校生に案内をお願いすることで、参加者と高校生の交流を促進し、これからの将来を担う同世代として、共に伝統について問い直す機会となった。

日本開催の日米学生会議では、京都を中心とした関西地方はほとんどの回で開催地となるため、今回いかにサイトの軸を定め、オリジナリティを出すことができるか苦心する部分もあった。そんな中、琵琶湖フィールドトリップでは琵琶湖汽船株式会社の川戸良幸常務取締役、滋賀県立大学の上田洋平先生に企画段階から大変お世話になり、また、現地の高校生の募集の際には京都市教育委員会の山本悦子様にご協力いただいた。宿泊施設に関しては、立命館大学国際部海外留学課の竹花安子課長補佐に窓口となっていただき、立命館大学のエポック立命 21 を提供していただいた。他にも、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室の浅原純様は、同志社大学を会場として使用する際に多大なるご協力をくださった。サイトの企画全般にアドバイスやご提案をくださった日米学生会議同窓会関西幹事の竹本秀人様、京都府をはじめとする行政への後援申請の際にお手伝いいただいた日米学生会議 OB の寳槻徹様に、この場を借りて御礼申し上げたい。

参加者から各企画とも学ぶことが多かったとの声が上がったが、私ども実行委員のみでは決して完遂しえなかったと確信している。多くの方の陰日向からのご協力があってこそ実現した企画ばかりだった。ご支援いただいた皆様に心より御礼申し上げ、サイトコーディネーター後記とさせていただきます。（有川 慧、中澤 耕己）

## 沖縄サイト（8月10日～8月15日）

■サイトコーディネーター
竹内智洋
山田晃永
Christina Ryu
Kunihiro Shimoji（下地邦拓）

（サイトスタッフ）
石川惠
小田康弘
伊藤実梨
冨沢瑠美
上江洲仁子
小林歩
阿部彩織

■サイト概要
在日米軍基地の75%が集中し、太平洋戦争で国内唯一の地上戦が行われた沖縄。このような地で、日米の学生が県民を交え、安全保障と平和について話し合い、各自が自分なりの意見を持つ意義は大きい。また、日本と中国の中継地として栄えた琉球王国の豊かな文化と差別の歴史についても学ぶ。基地と観光にとどまらず、環境や教育などへ取り組む姿から今日そして明日の沖縄を考えたい。

■活動の指針と目標
・在沖米軍基地問題と安全保障について多角的な視点を得る
・太平洋戦争（沖縄戦）についての学習を通して平和について考える
・沖縄特有の文化を体験する

■サイト日程
8月10日（水）京都から到着、サイトオリエンテーション
8月11日（木）分科会活動、名桜大学教授仲地清氏のご講演 、名護中学校交流会、名護市長稲嶺進氏のご講演
8月12日（金）辺野古見学、キャンプ・フォスター見学、宜野湾市立普天間第二小学校見学、首里城見学、分科会活動
8月13日（土）宜野湾市基地政策部新里優氏のご講演、分科会活動、沖縄フォーラム、県内の高校生・大学生との意見交換会、レセプション
8月14日（日）平和学習（糸数壕、荒崎海岸等見学）、分科会活動
8月15日（月）元ひめゆり学徒隊宮良ルリ氏のご講演、東京へ出発
※宿泊場所　山田荘、ステラリゾート

■ 具体的な活動
・名桜大学教授 仲地清氏・名護市長 稲嶺進氏 ご講演
仲地教授は沖縄の歴史、経済、治安等多様な側面に触れながら、沖縄独自の平和を強く望む文化や精神と関連付け、沖縄の基地問題の全体像を示して下さった。稲嶺市長は沖縄への負担集中、政府から自治体への交付金、基地の抑止力としての役割、市民生活の安全性など様々な視点から基地問題を見つめた上で、名護市へのさらなる基地移設に反対すると述べられた。最後に、基地に対する問題意識の風化を危惧していることを強調された。講演後、日米の学生から普天間基地移設問題の渦中にいる自治体に対して多くの質問が上がった。両講演を通し基地問題がいかに複雑かつ深刻で、解決までの道のりが険しいかを再認識した。（伊藤 実梨）

名護市長稲嶺進氏と

・名護中学校交流会

名護中学校の生徒 36 名を招待し、名桜大学で交流会を開催した。まず、自己紹介や英語のゲームを行い、親睦を深めた。次に、日米学生会議参加者の代表が、クイズを交えながら両国の大学を紹介した。最後に、事前に募ったトピックをもとに、少人数の班に分かれて意見交換を行った。最初は緊張でこわばった表情をしていた中学生も、交流会の最後には満面の笑みを浮かべて日米学生会議参加者が作ったアーチを通って退場した。(上江洲 仁子)

名護中学校交流会の様子

・辺野古見学

普天間基地の移設予定地である辺野古岬では、ヘリ基地建設阻止協議会 ( 命を守る会 ) 代表の西川征夫氏のお話をうかがった。「命を守る会」は、辺野古区が基地移設反対を議決したにもかかわらず、迅速な対応を取らない名護市に痺れを切らした地元市民によって 1997 年 8 月に発足し、キャンプ・シュワブ横の海岸で 10 年以上座り込みを続けてきた。発足当時は 80 名近く座り込みに参加していたが、現在ではその人数は半減している。以前に比べ若者が来なくなっているため、参加者の大部分が 65 歳以上となり、高齢化に悩まされている。住民の間でも基地移設に関して賛否が分かれているが、「地元住民が結束して NO と言える環境をつくること」を目的に活動してきた。静かな海岸に建つフェンスに世界中から寄せられた平和を願う旗が掲げられ、砂浜では子供達が遊んでいるのが印象的だった。普天間基地移設問題の解決の難しさを再認識させられた。( 石川 惠 )

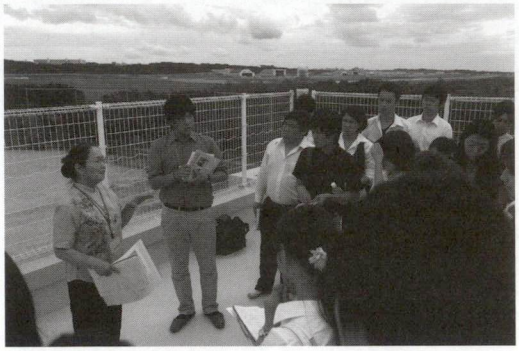
・キャンプ・フォスター見学

普天間基地の関連施設であるキャンプ・フォスターにおいて昼食会、講演会、施設見学を行った。在沖米海兵隊外交政策部次長ロバート・エルドリッヂ氏の講演では、東日本大震災における復興支援などが例に挙げられ、在日米軍が日本や地域のコミュニティに貢献しているという点が強調されていた。施設見学では、娯楽施設、病院、学校などを見ることができ、基地内が一つの街として機能している様子がうかがえた。見学後のバスの中では日米の学生間で活発に議論が交わされた。辺野古や普天間第二小学校の訪問という前後の活動と合わせて、在沖米軍基地問題を実際に肌で感じ、多様な視点から捉えることができたので、有意義な学びとなった。( 小林 歩 )

・宜野湾市立普天間第二小学校見学

校長の知念春美氏のご案内で、宜野湾市立普天間第二小学校を見学した。校舎屋上に上がってまず目にしたのは、左右に長く伸びて広がる米軍普天間飛行場の滑走路であった。多い日でどれくらいの離発着があるか説明していただき、爆音で授業や行事が中断されることがしばしばあるとうか

がった。基地がいかに教育環境、生活環境を脅かしているか身に染みて理解できた一方、児童の安全確保のためには、対症療法的ではあるが学校の敷地移転をするべきだという声も上がった。(小田 康弘)



宜野湾市立普天間第二小学校屋上にて

・宜野湾市基地政策部 新里優氏 ご講演

嘉数高台公園を訪れた日はよく晴れていて、綺麗な青空の下に海岸線、市街地、普天間基地などを一望できた。宜野湾市基地政策部基地渉外課課長の新里優氏のお話を聞くまで、この高台が沖縄戦の激戦地であったこと、北に見える海岸が米軍上陸の地であったことを忘れてしまうほど、美しく平和な佇まいであった。新里氏は沖縄の基地の現状や普天間基地移設問題についてもこの場所で説明して下さり、沖縄の過去、現在、未来を考える機会となった。(小田 康弘)

・沖縄フォーラム

沖縄フォーラムでは、沖縄の過去、現在、未来について多角的なご講演をいただいた。沖縄タイムス社会部長の屋良朝博氏は、アジア太平洋地域における米軍海兵隊の配備に関してご説明くださり、沖縄に基地を置く戦略的必要性に疑問を呈された。尚学学園副理事長の名城政一郎氏は、沖縄での同化教育の歴史とそれが「オキナワ・メンタリティ」に与えた影響、そしてこれからの沖縄の教育の在り方について取り上げられた。琉球大学教授の高良鉄美氏は、明治憲法と現行憲法を切り口として、国民が正しい情報を知らされる必要性、太平洋戦争を終結させる可能性があった３度の機会、国民が政府の行動を牽制する憲法の役割などについてお話くださった。最後に沖縄国際大学法学部教授の佐藤学氏から閉会の言葉をいただいた。佐藤氏は、日米中は経済的に相互に依存しているため長期的にはアメリカのプレゼンスと中国の安定的発展が日本にとっては必要であると述べられた。(小田 康弘)

フォーラム後のディスカッションでは、沖縄在住の高校生、大学生と共に基地問題について話し合い、率直な意見を交換した。地元の学生の考えに触れられ、大変貴重な経験であった。最後のレセプションでは、地元の方々と交流することができた。また、財団法人沖縄観光コンベンションビューローのご協力により、琉球舞踊を鑑賞した。最後に、来賓及び日米学生会議参加者全員でカチャーシーを踊った。有名な伝統芸能を単に鑑賞するだけでなく、踊り手との交流や自ら体験することを通して伝統芸能を深く堪能することができた。(冨沢 瑠美)

沖縄フォーラムにて

・平和学習

琉球大学の山内榮氏に案内していただき、平和祈念公園、糸数壕、ひめゆり平和祈念資料館、荒崎海岸を訪れた。平和祈念公園では平和の礎の傍らで沖縄戦についてのお話をうかがい、戦没者の慰霊碑に手を合わせた。糸数壕は、沖縄戦の際に南風原陸軍病院の分室として使用され、ひめゆり学徒隊の一部が看護にあたった自然洞穴である。懐中電灯の光を頼りに洞窟内を進んでいくと、暗

くひんやりとした空間が広がっていた。また、荒崎海岸は沖縄本島南端に位置し、ひめゆり学徒隊をはじめとする多くの民間人が自決や米軍の攻撃によって命を落とした場所である。広大な海に面した慰霊碑「学徒隊散華の跡」の前で、平和ガイドの方のお話をうかがいながら各自が沖縄戦当時に思いを馳せた。(阿部 彩織)

・宮良ルリ氏のご講演

ひめゆり学徒隊の一員として沖縄戦を経験された宮良ルリ氏を語り部としてお招きしお話をうかがった。日米学生会議のように、過去に敵対する関係にあった二カ国の若者が一堂に会し、話し合いの場を持つことは素晴らしく、平和な世界を創るリーダーになってほしい、とのお言葉をいただいた。次世代を担うものとしての責任、使命を感じた。(阿部 彩織)

■ サイトコーディネーター後記

第57回日米学生会議より６年ぶりの沖縄開催。実に多くの県内の皆様にご協力いただき、沖縄の諺で「一度会ったら皆兄弟」を意味する「いちゃりばちょーでー」の精神を実感した。特に、「沖縄サポート委員会」のご尽力なしには、会議を成功裏に終えることはできなかった。

不思議なご縁の結びつきで生まれたサポート委員会は、日米学生会議 OB であり石垣市保健福祉部健康福祉センター医師の城所望氏にお招きいただいた 12 月の石垣島での親睦会がきっかけで発足した。財団法人沖縄観光コンベンションビューロー元常務理事の洲鎌孝氏に沖縄開催の相談をしたところ、「是非その素晴らしい人材育成事業を成功させたい」とおっしゃっていただいた。後日、洲鎌氏の呼び掛けで、琉球大学副学長の大城肇氏、レキオファーマ株式会社代表取締役の奥キヌ子氏、株式会社トリム代表取締役の新城博氏がお集まりくださり、ご協力を約束してくださった。その後、３月に奥氏が「実行委員会を組織しよう」と元沖縄県副知事の比嘉幹郎氏に委員長に就いていただけるようお願いしてくださった。そこに、県内の日米学生会議 OB や各界の有力者が加わり、最終的には元沖縄県知事の稲嶺惠一氏を名誉会長に、合計 14 名の方々がメンバーとなってくださった。沖縄と東京とアメリカをインターネット電話で繋いで隔週でミーティングを開き、行程の決定、財務活動、宿泊施設や食事の手配とあらゆる面でご協力いただいた。

サポート委員会内では、株式会社時事通信社那覇支局長の野口安計氏が率先して事務作業を担ってくださった。名桜大学国際学群講師の大城美樹雄氏は名護でのプログラムをコーディネートしてくださり、沖縄フォーラムの運営は沖縄国際大学法学部教授の佐藤学氏が一手に引き受けてくださった。城所氏と浦添市福祉事務所保護課の平良誠氏には、日米学生会議経験者として他の方々との橋渡しをしていただいた。比嘉氏、奥氏、洲鎌氏は各方面への繋がりを駆使し、私どもの我が儘な望みを全て実現してくださった。

サポート委員会外では、沖縄尚学高等学校の皆様、特に教頭の与座宏章氏と広報部の鎮目耕平氏に、スクールバスの手配など様々な面でご尽力いただいた。名護市役所の皆様、特に企画総務部総務課秘書係長の仲里幸一郎氏には、稲嶺進市長のご講演を中心にご協力いただいた。また、稲嶺進市長は予定の時間を大幅に延長して私どもの質問に答えてくださった。名桜大学国際学群教授の仲地清氏、宜野湾市基地政策部 の新里優氏、沖縄タイムス社会部長の屋良朝博氏、尚学学園副理事長の名城政一郎氏、琉球大学教授の高良鉄美氏、元ひめゆり学徒隊の宮良ルリ氏は、旧盆中のお忙しい時にもかかわらず、快くご講演を引き受けてくださった。また、名桜大学国際学群教授の与那覇恵子氏には２度にわたり素晴らしい通訳をしていただいた。株式会社沖縄ファミリーマートには、営業部店舗支援グループの宮城吉博氏のお取り計らいで滞在中お弁当を各地に届けていただいた。南部での平和学習では、琉球大学非常勤講師の山内榮氏に終日ご案内いただいた。琉球朝日放送、琉球新報、沖縄タイムス、日本放送協会の皆様は、私どもの活動を大きく取り上げてくださった。

上記の他、ここではお名前を挙げることのできない実に多くの皆様のご声援、ご協力のもと無事に会議を終了することができました。この場を借りて御礼申し上げます。今回の企画が蒔いた種が、将来、沖縄をはじめ世界各地で花開くことを願って、筆をおかせていただきます。(下地 邦拓、竹内 智洋、山田 晃永)

# 東京サイト（8月15日～8月21日）

■サイトコーディネーター
奥谷聡子
尾崎裕哉
Yuri Hongo
Dan Jodarski

（サイトスタッフ）
五十嵐淳
石川陽平
河村統治郎
小池あずさ
塩原梓
吉本理沙
舘林真一

■サイト概要
現代的なビル街と古き良き町並みが混在し、CNNに世界一魅力的な都市として選ばれた東京。昭和の高度経済成長期を経て、今や人口1300万人にものぼる東京は、伝統文化から近年はファッション、マンガ文化などの新たな一面を持ち合わせている。他方で、国内外の諸問題に関して、国会や省庁では日本の未来を左右する決断が日々下されている。最終サイトとして分科会の議論を集大成し、政治経済の中心地である東京から発信することで、1ヵ月に亘る会議を締めくくりたい。

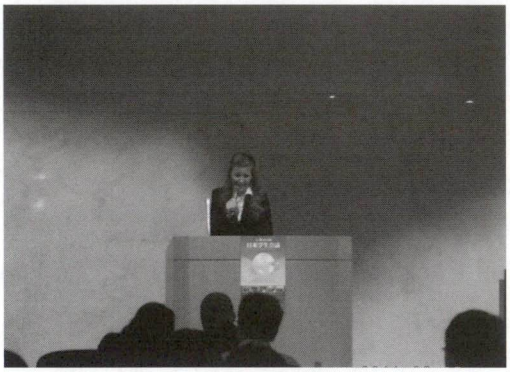
■活動の指針と目標
・日本政治と外交の関係を理解する
・1ヵ月の集大成を社会に発信する
・会議後も活動を継続していくための土台を形成する

■サイト日程
8月15日（月）　沖縄から到着
8月16日（火）　米国大使館訪問、分科会活動
8月17日（水）　分科会活動
8月18日（木）　ファイナルフォーラム、外務省主催レセプション
8月19日（金）　実行委員選挙、東京フォーラム、アラムナイレセプション
8月20日（土）　日中学生会議合同セッション、ファイナルディナー
8月21日（日）　アメリカ側参加者帰国
※宿泊場所　国立オリンピック記念青少年総合センター

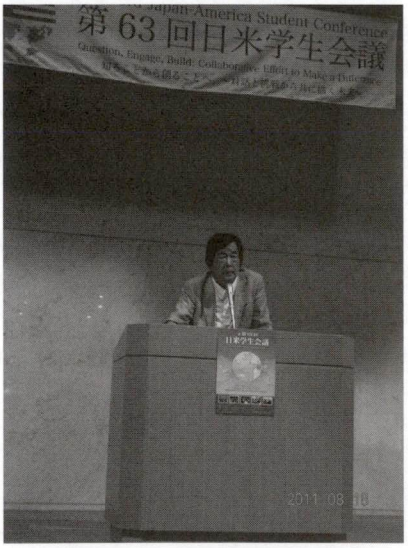
■ 具体的な活動
・米国大使館訪問
米国大使館では、講演に先立ち東日本大震災におけるアメリカからの協力に日本側参加者から色紙を渡し、感謝の意を表明した。続いて、政策、経済、広報、総領事館等の部署で活躍する4名の方々よりご講演をいただいた。まず、各部署における普段の業務内容を紹介していただき、その後は日米関係、安全保障、核問題、グローバル社会における若者の役割について、各講演者の見解をうかがった。1時間という限られた時間の中で、大使館の方々はその半分を質疑応答の時間に充ててくださり、日米両国の学生からは日米関係に関する鋭い質問が挙がり、講演者の方々もその熱意に応え、一つひとつ丁寧にお答えくださった。あっという間に過ぎた1時間だったが、訪問終了後は将来への目標も生まれたのか、生き生きとした参加者の姿が印象的であった。（舘林 真一）

・ファイナルフォーラム
東日本大震災という共通の事柄を考察した中間報告会に対し、ファイナルフォーラムの発表は、

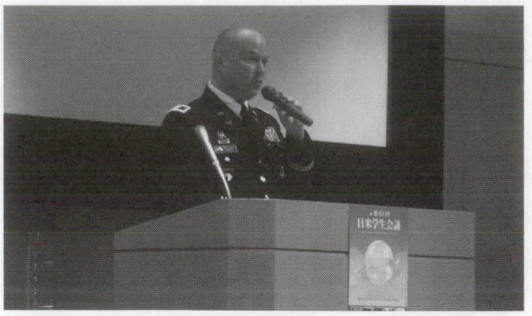
中間報告会にもとづいたものや、そこから視点を変えたものなど、分科会によって様々だった。1ヵ月の集大成ということで、発表の形式や内容を決めるべく議論に議論を重ねた。各分科会は、中間報告会からの議論の経過や、1ヵ月かけて導き出した結論を発表し、その中では参加者の英語やプレゼンテーション能力の上達が見受けられた。また、各分科会の議論の成果を他の分科会や一般の方々に共有する良い機会となった。(吉本 理沙)



アメリカ側参加者による代表スピーチの様子




田中均氏による基調講演の様子



エリック・ティリー氏によるご講演の様子

・外務省主催レセプション

外務省以外にも文部科学省や賛助団体の方々、日米学生会議同窓会会長、副会長がお越下さった。国際教育振興会賛助会会長の南原晃氏による挨拶に始まり、新宿のサンルートプラザホテルで盛大に執り行われた。レセプションでは、様々な方々のお話をうかがう機会があった。外務省の方に、どうすれば外交官になれるのかをうかがえた。「どうすれば国務省に入れるのか」というアメリカ大使館でうかがったお話と比較すると、やはり、日本では新卒一括採用の伝統が残っており、学部から外務省に入省する人が圧倒的に多い。日米学生会議が終わって、就職活動を控え、官民どちらの道を歩むか迷っている私にとって、非常に参考になる意見をいただけた。改めて関係各位に深く感謝している。(五十嵐 淳)

外務省主催レセプションの様子

・東京フォーラム

第 63 回日米学生会議最後の講演会である東京フォーラムが、青山学院大学で行われた。前日にファイナルフォーラムを終えた達成感と、日米学生会議がとうとう終わりに近づいているという寂寥感はどの参加者にも共通してあったのではないだろうか。

東京フォーラムでは、青山学院大学学長の伊藤定良氏、慶應義塾大学塾長の清家篤氏、元防衛大学校教授の孫崎享氏、青山学院大学国際政治経済学部教授の中山俊宏氏からご講演をいただいた。中国など新興国の台頭や、３月の東日本大震災に関する講演は示唆に富むものであり、日米の若者が協力し未来を構築していくにあたり、多くのヒントが示された。(小池 あずさ)

・アラムナイレセプション

青山学院大学のアイビーホールにて「アラムナイレセプション (日米学生会議 OB レセプション)」が開催された。OB の方々との関わりは、長い歴史を持つ日米学生会議の大きな魅力の１つである。事前活動時から同窓生の方々と交流する機会は何度かあったが、今回の会は２つの意味で特別な会であった。１つ目はアメリカ側参加者も交えた会であったことだ。アメリカ側参加者もこのように何年も前の参加者が一同に集っていることに驚いている様子であった。そして２つ目には、前日にファイナルフォーラムがあり、ほぼ全てのプログラムを終えた後の会であったことである。本会議前にお話しした OB の方々にこの３週間がどのようなものであったかを報告し、その時に初めて第 63 回日米学生会議もとうとう終わるのだ、ということを実感した。そして必死に駆け抜けてきたこの３週間を、日米学生会議の 77 年間の歴史の一部という文脈の中で捉え直すきっかけとなり、改めてこのような貴重な機会を得られたことに対して感謝せずにはいられなかった。(塩原 梓)

・日中学生会議合同セッション

日米学生会議史上初となる日中学生会議との交流を行った。両参加者は事前に選んだテーマをもとに、安全保障や日米中経済の行方などについて両会議から４人ずつの計８人で話し合った。世界の問題を語る上で今や欠かすことのできない中国の学生が今どのようなことを考えているかを知ることができる素晴らしい機会だったと思う。参加者たちは、各々の意見を主張し合い、相互理解を深めた。ただ残念なことに、日中学生会議の公用語は英語ではなく、予想以上に意見の交換が難しかった。全体的な印象としては、議論に臨む態度や雰囲気に関して、文化の違いを鮮明に感じたアメリカ人と比べて、中国人学生は日本人学生と非常に似ていると感じた。(河村 統治郎)

日中学生会議合同交流会の様子

・ファイナルディナー

ファイナルディナーでは、第 63 回日米学生会議を振り返る会話があちこちで聞かれ、会場は興奮に満たされた雰囲気となっていた。本会議直後に誕生日を迎える４人の学生に「ハッピー・バースデー」が歌われ、サイトスタッフによって作成されたスライドショーが流された。

最後に、本会議を振り返るムービーが流され、１年間にわたり第 63 回日米学生会議を企画・運営をしてくれた実行委員のために、皆の感謝の気持ちを込めて作成したムービーと刺繍入りのタオルがプレゼントされた。１ヵ月で築かれた思いを少しでも伝え合うため、皆が語り合い、抱き合い、泣き合った。(石川 陽平)

■サイトコーディネーター後記

最終サイトとなる東京でのイベントを企画するにあたって、東京サイトコーディネーターは「最高の経験と環境を提供すること」と「『知ることから創ることへ』という理念の実現」を強く意識していた。最終サイトを企画する者として、第63回日米学生会議を総括し、参加者一人ひとりの今後と次回会議に繋げる責任があると感じていたからだ。すなわち、日米学生会議の終わりを人生の新たなスタートにするための基盤を作る役割を私たちは担っていたのだ。

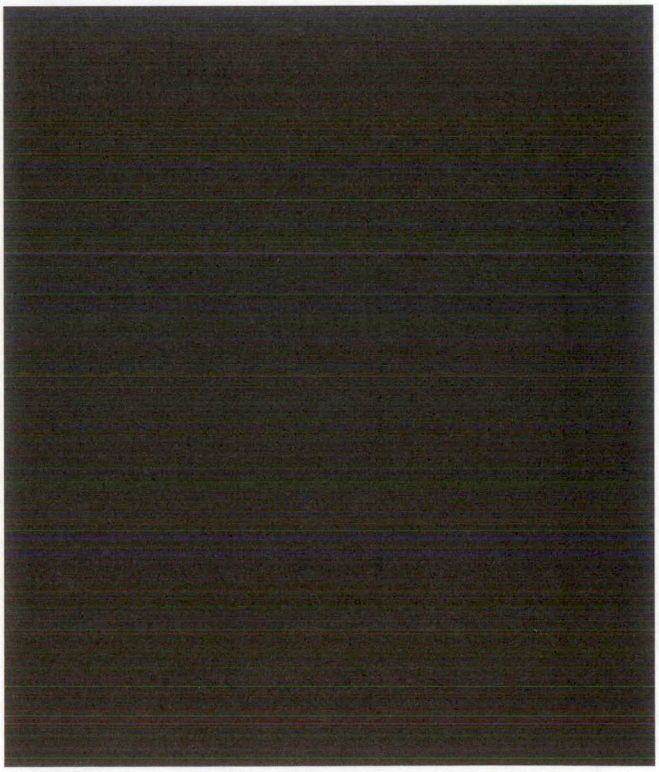
限られた日程の中でそれを実現することは容易ではなかったが、ファイナルフォーラムや東京フォーラム、レセプション、新実行委員選挙及びリフレクション、加えて日中学生会議との合同イベントなどこれまでの会議になかった企画の実現にもこぎつけた。ファイナルフォーラムでは青山学院大学の大ホールに100名を越える一般の聴衆を迎え、各分科会が1ヵ月の議論の成果をパワーポイントやパンフレットにまとめて発表した。第1回日米学生会議の開催地として縁のある青山学院大学にて63回目の会議が有終の美を飾ることができたことを大変誇らしく、また嬉しく思う。

最後に、フォーラムの会場を手配してくださった山本東生氏、お忙しいなかお越しくださいました講演者の方々、多大なるご協力をいただいた青山学院大学の皆様に御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。(尾崎 裕哉、奥谷 聡子)

ファイナルディナーの様子

ファイナルフォーラムの様子

# 第 4 章
# 分科会活動



# 安全保障と日米
## Comprehensive Security

■分科会メンバー
奥谷聡子 *
伊藤実梨
小池あずさ
棚田壮太
中川渉
Kunihiro Shimoji*
Hangil Moon
Jillian Anderson
Kimberly Julien
(* は分科会リーダー)

■分科会概要

21 世紀の世界は、核兵器をはじめとする生物化学兵器などの大量破壊兵器の拡散や民族的、宗教的な対立を根源とする地域紛争、また非国家主体による国際テロなど新たな脅威に直面している。日本周辺では北朝鮮の核開発問題や中国の軍事的台頭、海洋権益獲得への強硬姿勢など、依然として不安定要因が存在する。日米両国は共に東アジア地域の安全を確保していくために、いかに連携していくべきなのだろうか。また、アフガニスタンやイラクにおける人道復興支援、ソマリア沖の給油活動などテロ組織や紛争の温床となりやすい地域の安定化支援が新たな脅威を予防する取り組みとして認識される中、日米同盟の機能と役割の拡大が期待されている。両国はアジア太平洋地域の枠を超え、国際社会の平和構築のために、どのような協力関係を築いていくべきなのだろうか。当分科会では、「世界の中の日米同盟」として日米が取り組まねばならない課題について考え、両国協働の在り方について検討していく。

■事前活動

・春合宿

私たちは各々の考える「安全保障」とその問題点を話すことから始めた。結果、トピックは多岐にわたり、私たちは議論を進めるうえでの基礎的知識に欠落を感じた。同時に日米安全保障条約が、現在の国際社会に適合していないという共通の問題意識を確認した。そこで、特にメンバーの関心の強い「基地」「軍事」「エネルギー」「財政」の 4 つのトピックにそれぞれ特化し、各分野での日米同盟の歴史的意義とその問題の明確化から、現代における安全保障の理想の形を模索していくことを分科会の指針とした。そして、各々のテーマについてのリサーチ、2 週間に 1 度の勉強会、有識者へのフィールドトリップを行うことで、専門的かつ網羅的に知識を共有していくことを事前学習の目標とした。専攻や興味が異なる初対面の 4 人の学生が集まって、「安全保障」について話すのは容易ではなかった。ましてやアメリカ側参加者が議論に加わったらどうなってしまうのか、メンバー各人の大きな不安と期待とともに終えた春合宿であった。(中川 渉)

・定例ミーティング

メンバーそれぞれの都合を考慮し、勉強会は 2 週間に 1 度インターネット電話を用いて行なった。基本的な内容は、課題図書の輪読と各担当分野のリサーチ発表だった。共通課題図書は『国際政治』(高坂正暁著)、『日米同盟の正体』(孫崎享著)、『日米同盟再考 100 の論点』(西原正著)、『新しい安全保障の視座』(中西寛著)、『Pacific Alliance』(Kent.E.Calder 著) の 5 冊であった。たった 1 章の発表でもその後の議論は尽きず、毎回のように終了予定時刻を大幅に過ぎたところでミーティングは解散となった。アメリカ側参加者との話し合いに備えた英語力の向上も必要だったため、不定期にアメリカ側実行委員を交えた英語での雑談、安全保障に関連する専門用語の勉強なども行なった。この勉強会を通して、各地方に散らばり普段会うことのできないメンバー同士の知識と意見の交換をすると同時に、性格や人間性をも知ることができた。(中川 渉)

・防衛大学校学生との議論

防衛大学校で学生 8 名と安全保障について議論を行った。前半は憲法 9 条、後半は集団的自衛権の行使を議題とし、防衛大学校生による背景知識共有の後、議論に入った。将来自衛官として国防に携わる彼らの考えは、多くの基礎知識と実際の訓練を通して見た現実に裏付けられており、大変参考になった。特に印象的だったのは、日米同盟の維持は不可欠であるという認識と、東アジア情勢の不安定化の恐怖に直面した時、日本はどう対処していくべきかという問題意識を彼らが共有していたことだ。一般大学に通う我々にとって新鮮な視点に多く出会えた大変活発かつ貴重な議論の時間となった。(伊藤 実梨)

・元防衛大学校教授 孫崎享氏 フィールドトリップ

日時：6 月 25 日 (土)

場所：孫崎享氏ご自宅

日本の安全保障を議論する上で要となる日米同盟の理解を深めるため、輪読書として選んだ『日米同盟の正体』の著者、孫崎享氏を訪ねた。私たちが抱えていた「現在の日米関係」、「東アジア共同体の可能性」、「中東の問題」等の疑問に対し、3 時間もの時間をかけて、一つひとつわかりやすく説明してくださった。とりわけ印象的だったのは、「自分の意見に対して、明確なエビデンスと歴史的裏付けを持つことこそ重要」とおっしゃったことである。私は、これまでも、積極的に自分の意見を持とうと意識はしていたが、孫崎氏の研究への取り組み方を目の当たりにし、自分の考えの甘さを痛感させられた。(棚田 壮太)

・同志社大学 村田晃嗣先生 フィールドトリップ

日時：7 月 16 日 (土)

場所：同志社大学今出川キャンパス

アメリカ外交、安全保障政策をご専門とする村田晃嗣教授にお話をうかがい、私たちが行った発表に対するフィードバックをいただいた。それまで私たちは、日米安保の基礎知識や国際環境の変化の分析を中心に勉強を進めていた。しかし、村田氏は、そこから一歩踏み込み、日米関係だけでなく今日の国際社会の大局を捉えること、日本側参加者の視点だけでなくアメリカ側参加者が抱く関心とは何かを熟考すること、3 月 11 日の東日本大震災が日米同盟に与えた影響を議論することなど、本会議に臨むにあたって非常に有益なアドバイスをいただいた。(奥谷 聡子)

・APEC ビジネス諮問委員会日本支援協議会フィールドトリップ

日時：7 月 26 日 (火)

場所：APEC ビジネス諮問委員会日本支援協議会

環太平洋戦略的経済連携協定 (TPP) 等を通じて注目が集まっている地域経済統合への理解を深めるため、APEC のビジネス分野の代表で構成される APEC ビジネス諮問委員会 (ABAC) の日本支援協議会事務局長である上川治氏を訪ねた。日米をはじめとした国際社会の強い連携が期待される今日、米国で今年開催予定の APEC2011 が掲げる

地域経済統合に関する課題、また、日本の果たすべき役割についてご説明いただいた。さらに、国際交渉現場での駆け引きなど大変興味深いお話をうかがえた。(棚田 壮太)

・日本モンサント株式会社 フィールドトリップ
日時：7 月 26 日 (火)
場所：日本モンサント株式会社

近年の食糧価格高騰から注目が集まっている食糧安全保障問題の現状を理解するため、グローバル企業である日本モンサント株式会社の佐々木幸枝氏、内田健氏のお話をうかがった。まず初めに、世界が抱える食糧危機と、それについて考える際にキーワードとなる遺伝子組み換え (GM) 技術の現状についてうかがった。私はメディアの情報を通じ、GM 技術を懐疑的に捉えていたが、訪問を通じて、食糧危機の深刻さと GM 技術の可能性の大きさを理解することができた。間接的な情報を鵜呑みにするのではなく、自分の足を運んで直接得た情報をもとに判断することが、いかに重要かを痛感したフィールドトリップであった。(棚田 壮太)

・直前合宿

春合宿以降行ってきた週 1 回のインターネット電話を用いたミーティングと 5 度のフィールドトリップを経て、直前合宿では日本側の議論の整理やアメリカ側を迎える準備を整える作業に入った。直前合宿での議論の軸は、事前勉強を踏まえた日本側参加者の日米同盟に関する見解をまとめることと本会議での行程表作りであった。行程表を作る過程で、議論するトピックの抽出方法として「未来予想最悪・最良シナリオ」を立てることを決定したが、日米が個別にシナリオを立てるか両国共同でシナリオを立てるかで分科会メンバーの意見が真二つに割れてしまった。大きな意見の衝突を経験したのは安全保障分科会にとって初めての経験であったが、話し合いを経て最終的に互いの意見の重要性に気づき、双方が納得のできる結論に辿り着いた。今振り返ると、これは今後経験する数多くの衝突を乗り越える一つの意義深い教訓となった。(小池 あずさ)

■本会議中の活動
・第 1 サイト：新潟

5 月から始動した「安全保障と日米」の分科会も、7 月 29 日についにメンバー全員が顔を合わせ、本格始動となった。アメリカ側参加者の 1 名が急遽参加できないトラブルもあったが、ようやく迎えた記念すべき瞬間に、メンバーの顔には一様に笑顔が溢れた。新潟では、主にファイナルフォーラムに向けた方針の検討と、中間報告会で取り上げる、「安全保障と東日本大震災の関わり」が議論の焦点となった。主要テーマの選定方法として、樹形図等を利用し、あらゆる観点から包括的安全保障の分析を試みた。また、長期的視点で日米同盟を考えるため、最悪・最良を想定した二つのシナリオを作成した。当初は順風満帆と思われた分科会も、議論が進むにつれ、方向性の不一致や言語の壁にぶつかり、溝が生まれそうな緊迫した場面もあった。しかし、お互いの意見を理解、尊重しようと、できる限りの時間を分科会に費やした結果、新潟サイトを通じて安全保障分科会の信頼関係は強まっていった。(棚田 壮太)

・新潟大学農学部 木南莉莉教授フィールドトリップ
日時：8 月 3 日 (水)
場所：新潟大学

環太平洋戦略的経済連携協定 (TPP) や東日本大震災の影響を受け、将来が不安視される日本の農業と食糧安全保障を考えるため、農業政策の専門家である木南教授のお話をうかがった。「東アジアにおける食料の安全保障」と題する講義を通じ、世界が抱える食糧危機の現状と、それに対する経済統合の役割について体系的説明をいただいた。印象的だったのは、国内農家に対しマイナス要因と捉えられがちな自由貿易協定も、戦略的に取り込めば、農業再生の活路となりうるということであった。(棚田 壮太)

木南教授と

・第２サイト：京都 / 滋賀

依然として分科会の方針が定まらず、議論さえも始めることのできない状況で、多忙なスケジュールの中で数日後にひかえた分科会活動の中間報告会は、各メンバーにとって大きなプレッシャーとなっていた。それぞれの興味分野の乖離をすり合わせることは困難をきわめ、体力と時間ばかりが消費され、メンバー同士の衝突も起こった。その結果、中間報告会は今までに話し合った経過とあいまいな今後の展望を発表してしまうこととなった。しかし、この失敗が個人個人に変化の必要性を考えさせるきっかけとなった。中間報告会の翌日からメンバー同士の分科会活動外での交流が増え、議論の中でより率直な意見が発されるようになったことは、第３サイト沖縄、そしてファイナルフォーラムを見据えた各個人の献身的な姿勢に繋がった。中間報告会前夜の深刻なプレッシャーと後の京都観光での和やかさが非常に印象的なサイトであった。(中川 渉)

・京都大学法学部 中西寛教授 フィールドトリップ

日時：８月６日 (土)

場所：京都大学

中西寛氏には事前学習を含め、計２回のフィールドトリップを行なった。一度目は日本人参加者のみの事前活動の際に、学習経過と今後の計画に対するフィードバックをいただいた。「よくまとまっているが軸がない」という指摘は主体が「学生」であることの意義を深く問うものであった。二度目は本会議中に議論の経過を聞いていただき、事前にまとめた質問に答えていただいた。各分野における豊富な知識に裏打ちされた中立的な物の見方と、学生主体の議論が持つジレンマへの先生の理解、指摘は、後の分科会活動にとって大変有意義なものとなった。(中川 渉)

中西教授と

・第３サイト：沖縄

在日米軍基地が集中し、深刻化する基地問題を抱えると共に、アメリカとの戦争の歴史が鮮明に残る沖縄は、安全保障分科会にとって大変有意義なサイトとなった。沖縄では辺野古の普天間基地移設予定先、普天間基地関連施設への訪問、宜野湾市基地政策部や大学教授の沖縄問題に関する講演、現地の高校生・大学生との交流などを行った。これらは、今まで議論してきた問題を直接目で確かめ、現地の方々の生の声を聞くことができる大変貴重な経験となり、新しく得られた視点は議論をさらに深めた。在沖米軍基地は現地住民の安全を脅かす一方で、東アジアでの抑止力、日本の防衛など非常に重要な役割を担っている。また、国家政府と地方自治政府の関係という問題も絡んでおり、安全保障の複雑さかつ深刻さを肌で感じた。また、ひめゆり学徒隊の方の講演や平和祈念公園への訪問の後、日米戦争の歴史についても取り上げ、基地問題に限らず日米のデリケートな問

題に学生として向き合い議論する大変貴重な時間となった。(伊藤 実梨)

・沖縄国際大学法学部教授 佐藤学氏 フィールドトリップ
日時：８月 13 日 (土)
場所：沖縄国際大学

佐藤学氏に、沖縄サイトでの我々の大きな議題であった基地問題のお話をうかがった。佐藤氏は嘉手納基地が実際の防衛や抑止力の面で大きな役割を果たしており、普天間基地の実際の存在意義は小さく、閉鎖可能であるという視点をいただいた。これは我々の議論に無かった視点であり、とても新鮮だった。普天間基地問題が沖縄の経済、治安、そして教育に与える影響の大きさを聞き、改めて沖縄の現地の方々の考えを知る貴重な機会となった。(伊藤 実梨)

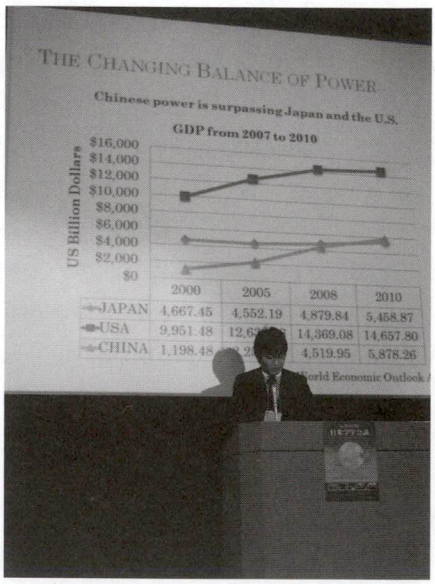
佐藤教授と

・第４サイト：東京

いよいよ東京に来てしまった。これが羽田空港に到着した私の最初の感想であった。直前合宿で決めた行程表は予定通りには進まず、東京に到着した時点では分科会で十分な議論ができていなかったことに加えて、数日後に迫るファイナルフォーラムに向けてのまとめも無論できてはいなかった。しかし、ファイナルフォーラム直前というプレッシャーと終わりに近づいた本会議で全力を出し切りたいという熱意が私たちを強く後押しし、２日という短時間で議論をまとめ、そして発表の作成まで到達することができた。十分な議論ができたかと言えば難しいが、限られた時間の中でここまでやりきることができたのは、安全保障分科会一人ひとりが自分の役割を最大限に果たし、「最高のものを作ろう」というみんなのゴールに向かって真剣に全力投球したからこそだと思う。(小池 あずさ)

・ファイナルフォーラム

迎えたファイナルフォーラム。様々な衝突を乗り越え創り上げた私たち安全保障分科会の結論を、公に発信した。17 分という短い時間で伝えなければならない難しさはあったが、今日日本の安全保障を取り巻く環境の変化や東日本大震災における日米協力、日米安全保障条約の今後の展望について発表した。今はまだ「完璧」ではないかもしれないが、この１ヵ月間の議論の中での実践的な学習を通して、私たちは新たな視野や専門知識を得ることができた。また、ファイナルフォーラムにお越しいただいた方々に少しでも安全保障に関する知識を深めていただけたら幸いである。(小池 あずさ)




ファイナルフォーラムでの発表の様子

■分科会総括

昨年、日米安全保障条約は改訂 50 周年を迎え、複雑な問題に直面する現状を踏まえ、当分科会では安全保障をテーマに議論を交わした。安全保障条約改訂後、国際情勢は大きく変化したと同時に、日米同盟も変化を遂げた。当分科会では、まず議論の焦点を東アジアに絞り、地域の国際情勢の変化と今後数十年を見据えたシナリオを分析することから始めた。しかし、グローバル化の流れの中で、自国の安全を脅かす要因は増加し、一国だけでは解決できない問題が多くなっているため、その分析は困難を伴った。伝統的安全保障以外に、幅広い概念が認識されつつある中、分科会のメンバーは夏の約 1 ヵ月をかけて議論すべき地域の課題、中でも優先的に日米両国が共に取り組むべき課題についての合意形成を図ることに奮闘した。安全保障という大きな議題に対して、私たちは自身の知識不足や学生であることの無力さという壁に直面し、時に悔しさを覚え、時に安全保障の複雑さに絶望し、またある時には議論の成果に一筋の希望の光を見出す、そんな日々の繰り返しであった。では、安全保障という難題を学生が議論する必要はないのか。それは断固として「否」である。未熟である私たちはこの 1 ヵ月間、自分自身の知識不足を補うために日夜リサーチに励み、日米の国益や同盟の意義について正面から意見をぶつけ合った。特定の利害関係に縛られない学生同士だからこそ、率直に対話し、ありのままの現状を受けとめ、前向きな議論ができたのだと感じている。これを礎に日米両国のより良い将来を切り開いていくことができるのではないだろうか。分科会では、テーマ以外の面で、価値観の違いや意見の衝突も多くあった。しかし、相互に理解し合おうと努力する参加者の姿勢や、次第に変化していくメンバーを見て、分科会リーダーとして大変嬉しく、またそんな彼らを誇りに思った。

最後になるが、フィールドトリップでお話をうかがった皆様、分科会運営にあたってご助言いただいた方々、そしてこの 1 年間共に分科会をリードしてくれたパートナーの Kuni と全ての分科会メンバーにこの場を借りて御礼申し上げたい。本当にどうもありがとうございました。(奥谷 聡子)

# 科学・技術の発展と倫理の再考
## Ethics of Technology and Its Impact on Human Life

■分科会メンバー
中澤 耕己 *
伊藤 あゆみ
小田 康弘
櫻井 千浪
舘林 真一
Yuri Hongo*
Alexander Evans
David Thayer
Michelle Bahnick
Wonyong Chung
(* は分科会リーダー )

■分科会概要

科学や技術はくらしを豊かにする一方、工業化が環境破壊や公害を招いたように人々の生活を脅かす原因にもなる。IT 化が進み科学・技術の発展が加速する今日、手に入れた新たな選択肢を受容するだけの倫理を私たちは持ちあせわせているか。

近年、再生医療の研究で iPS 細胞と並んで ES 細胞が注目されているが、ヒトになりうる受精卵を壊して作る ES 細胞は生命倫理に反するという意見もある。特にアメリカではカトリック教徒の反発も強く、ES 細胞関連の研究への公的助成の是非が政治的論争を巻き起こすほどである。脳死・臓器移植の問題では、日本で改正臓器移植法が 2010 年に施行されたが、脳死を人の死とすることへの抵抗や臓器売買の懸念など依然問題は多い。エネルギー問題についても、世界中で多くの人々が飢餓に苦しむ中、食糧となる穀物から製造されるバイオエタノールの使用は議論を要する。

本分科会では、科学・技術と倫理をめぐる諸問題について生命科学、医療、人間生活の各分野に注目し、法律的枠組みや宗教的価値観など様々な視点から幅広く考察する。

■事前活動

・春合宿

春合宿では、まず科学と倫理に関する各自の問題意識を共有し、次に今後の分科会の進め方を話し合い、それらの内容を全体に向けて発表した。

問題意識の共有を通して、各自が様々な視点や興味を持っていることが明らかになった。科学・技術と倫理が衝突する構図を抽象的に分析し、倫理の構成要素を書き出してきた者、代理出産や脳死・臓器移植などの具体的な事例について現状を分析してきた者など様々であった。各自の興味関心に基づいた新しい視点を学ぶことができ、とても刺激的だった。

5 月の分科会の進め方については、代理出産などの具体的トピックについての議論を行い、そこから複数の具体的事例にまたがるキークエスチョン ( 倫理的問題 ) を集約することにした。時間が限られているため具体的事例つまり各論に集中したほうがいいという意見や、散在する問題をもっと俯瞰的に見たいという意見があった中で、分科会の進め方について共通の認識ができた。( 櫻井千浪 )

・内閣府原子力委員会フィールドトリップ
日時：2011 年 7 月 10 日 (日)
場所：中央合同庁舎 4 号館

分科会初めてのフィールドトリップとしてお話をうかがったのは、内閣府原子力委員会委員長代理 鈴木達治郎氏である。同委員会は政府の原子力政策の基本指針となる原子力政策大綱を策定している機関である。

鈴木氏のご提案で、会は私たちの質問にお答えいただきながら、必要に応じて鈴木氏に背景知識を補足していただく形で進んだ。その結果原子力委員会の業務、見解に留まらず原子力利用の様々な側面を知ることができた。日本の原子力平和利用が始まった経緯、原子力発電所の許認可プロセス、福島第一原子力発電所事故と事故調査委員会、放射線の人体への影響、原子燃料サイクル、ストレステスト、リスクと確率論、電力の安定供給の意味などについて、私たちとのやり取りを挟みながら、説得力のあるお話をしていただいた。

お休みの日にも関わらず真摯にご対応下さった鈴木氏に改めて深く御礼申し上げたい。(小田 康弘)

鈴木氏とフィールドトリップ参加者

・生命倫理サロン
日時：2011 年 7 月 10 日 (日)
場所：日本科学未来館

社会全体に関わる生命倫理の問題を議論する場として昨年から開催されている生命倫理サロンに参加した。今回は、生殖補助医療に関する東京財団 橳島次郎氏の質問に総合研究大学院大学教授 長谷川 眞理子氏が進化生物学的視点からコメントされる形式であった。

長谷川先生曰く、人間は子どもを育てるのに沢山の人の助けが必要なため、ストレス下では妊娠しにくいように進化してきており、これが医学的には原因不明とされる不妊につながっている、と進化生物学的には考えられうるそうだ。

近年注目を集める生殖補助医療については、鳥の托卵と代理出産など、他の動物の行動と生殖補助医療との比較が紹介された。代理出産については、新しい技術であり、赤ちゃんや依頼父母に対する影響も含め、不測のリスクが大きいという指摘がなされた。

最後に、科学は欲望達成の手段とも言え、「諦めとは何か？」という疑問を持ち続けていると長谷川先生はおっしゃっていた。科学・技術の恩恵をどこまで追求し、どこで諦めるのかという問いは、この後の分科会議論の中でも一つの論点となっていった。(櫻井 千浪)

・橳島次郎先生フィールドトリップ
日時：2011 年 7 月 14 日 (木)
場所：東京財団

東京財団を訪れ、社会学博士であり科学政策に詳しい橳島次郎先生にお話をうかがった。主に生命倫理問題について、これまでの分科会内での事前学習を通じて生まれた疑問点や私たちの考えを伝え、その後は質疑応答を中心に勉強会を進めさせていただいた。当分科会で注目した生命倫理に関するトピックは、代理出産問題、iPS/ES 細胞、脳死・臓器移植、クローン問題などであり、こうした問題は日本と欧米とで考え方に大きな違いがあることを各国の例を交えながら教えていただいた。

科学・技術の倫理問題に関しては「人間の欲望をどこまで追求できるか」ということが重要なポイントになる。橳島先生は、「本会議でアメリカ側と議論する前に、今回の日米学生会議において、なぜこの分科会を選んだのかという出発点を共有

することが、当分科会においては非常に重要である」とおっしゃっていた。私たちに疑問を投げかけながら丁寧に話を進めてくださり、非常に示唆に富むフィールドトリップとなった。(舘林 真一)

櫛島先生と

・定例ミーティング

定例ミーティングでは、科学・技術と倫理という非常に大きな分野の中で、それぞれのトピックの基礎知識を共有するとともに、主な論点を見いだし議論することを目的としていた。トピックは、各メンバーの興味関心に沿って「脳死・臓器移植」「代理出産」「原子力発電」「尊厳死・安楽死」が選ばれた。議論は、【事前】背景知識や参考文献の共有→【ミーティング】キークエスチョンの共有、議論→【事後】フィードバック、を一つのサイクルとして進められた。

たった５人でも意見がかなり異なっていたので、問題を多角的に見ることができ非常に有意義だった。時には他の分科会のメンバーやJASCOBの方にも加わってもらった。ファミリーレストランで脳死・臓器移植や原子力発電について熱心に議論する私たちは明らかに浮いていたが、これも懐かしい思い出である。５回のミーティングを通して各トピックに共通する問題を明らかにすることができ、本会議への良い準備ができた。(伊藤 あゆみ)

・直前合宿

日本側参加者が新潟に集合し本会議を翌日に控えた直前合宿での分科会は、それまでとはひと味違う、期待と緊張が入り交じった議論になった。本会議中の分科会活動の見通しから始まり、続いてそれまでの総括、そして本会議中にやりたいことや考えたいことをメンバー間で共有する時間をとった。

最も時間を割いたのは直前合宿中に日本人参加者全体に対して行う分科会発表の準備である。ともすれば技術的専門知識の説明と価値観の比較で終わってしまう可能性がある発表を、どうすれば聴衆である他の分科会メンバーに聞き入ってもらえる発表にできるかを考えた。限られた準備時間の中で目標を達成する発表ができたのは、メンバー全員が率直に議論し、良いチームワークで発表作成に取り組めたからであったと思う。

発表を終えると、アメリカ側参加者に聞きたいことや伝えたいことを共有して、直前合宿での分科会活動を終えた。(小田 康弘)

■本会議中の活動

・第１・２サイト：新潟、京都 / 滋賀

アメリカ側参加者と対面して行う初めての分科会は、それまでとは異なる要素の多い新鮮な議論となった。

まずは各メンバーが本会議前に執筆、提出した事前レポートを順番に発表し、その内容について短めの議論を行った。トピックは原子力の利用、代理出産、自然エネルギー、人工知能と様々であった。

これと同時並行で、原子力の利用と代理出産のそれぞれについて賛否のチームに分かれてディベートを行った。目的は賛否両者の視点を掘り下げて考えることである。特に第１サイトの新潟では柏崎刈羽原子力発電所および新潟県防災局原子力安全対策課にフィールドトリップにうかがったため、原子力の利用について多角的に考えることができた。

最後に、第２サイトの京都で行う中間報告会の準備を行った。長時間に及ぶ議論も、メンバーのユーモアとチームワークで楽しく有意義に過ごすことができた。(小田 康弘)

・新潟県原子力安全課フィールドトリップ
日時：2011 年８月１日 (月)
場所：新潟県庁原子力安全課

新潟県庁を訪れ、防災局原子力安全対策課課長の山田治之氏、係長の伊藤幸司氏よりお話をうかがった。主な内容としては、今年３月に起きた東日本大震災と 2007 年の新潟中越沖地震を比較し、それぞれの地震による原子力発電所への影響などについてお話をいただいた。山田氏は、「今回の福島原発では地震と津波が同時に起こることを想定した対策を取っていなかった。新潟での地震の教訓を全く活かせていない。」と強調されていた。一連の原発問題を通じて、対策を強化するためにも、もっと技術者が政策決定に直接携わる組織構成やシステム作りが急務であると思った。

また、日本人の責任感に関しての「世界価値観調査」という統計をご紹介いただき、日本人は政府や公務員への信頼が低いが、日本の将来の責任は政府にあると考える傾向が強いということも教えていただいた。国民の意識を喚起し、個々が責任感を持てるような社会を作ることが必要であると感じた。(舘林 真一)

山田氏、伊藤氏と

・加藤和人先生フィールドトリップ
日時：2011 年８月６日 (土)
場所：京都大学農学生命科学研究棟

生命科学分野に詳しい京都大学准教授 加藤和人氏にお話をうかがった。主な内容はヒトゲノム研究や幹細胞研究における倫理的、法的、社会的問題と、生命科学分野研究活動における規制の問題の２点であった。中でも後者のお話は、私たちが関心を持っていた科学技術開発やその利用に関わる法的枠組み作りとも深く関連していた。先生によると、日本の生命科学分野の研究活動においては政府が大きな力を握っており、研究現場の声や市民・患者の声、文系学者の声が反映されにくい欠点がある。対して、西洋社会の研究活動では政府、文系学者、科学者、市民が相互に影響しあっていて、様々な声を取り入れつつ研究者コミュニティが主体となった研究ができる。このように社会的な枠組みの違いが各々の研究活動に大きく影響を与えている状況が明示されたことは、私たちにとって新鮮な発見であったし、今後私たちが社会と研究者の関係のあり方を考える大きなきっかけになった。(伊藤 あゆみ)

加藤先生と

・京都中間報告会

京都での中間報告会では、まず今年３月に起きた東日本大震災での原発事故に関して、本会議中に行った新潟県原子力安全課でのフィールドトリップをベースに、原子力発電の経済的利益とリスクなどを分析し、政策決定責任などについて言及した。

次に、代理出産を取り上げ、規制が十分でないことから生じる途上国での代理母の搾取問題や、生殖ビジネスの倫理的問題を考察した。近年、代理母を探すためインドへ渡る日本人夫妻が増加していることに触れ、現状に法制度がまだまだ追いついていないことを指摘した。

最後に、原発問題と代理出産という一見全く別のように見える問題に対し、「科学・技術の開発や生命の研究はどこまで許されるか」、「政策決定に世論をどのように反映させられるか」、「誰の倫理が最優先されるべきなのか」などの両者に共通するキークエスチョンを提示し、十人十色の倫理観が存在する社会の中で、どのように最適な枠組みを作っていくことができるのかを提案した。(舘林 真一)

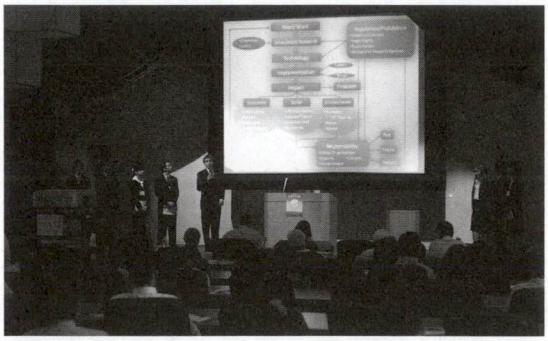
・第 3・4 サイト：沖縄、東京

会議後半の分科会活動では、「倫理」の定義づけやそれまで挙がったキークエスチョンの分類、科学・技術と倫理の全体像の把握について話し合い、加えてより多くの意見を得るため日米学生会議参加者を対象にアンケート調査を行った。またファイナルフォーラムの準備のため、議論、活動内容や各トピックの背景知識に関するパンフレットを同時並行で作成した。特に印象に残ったのは各メンバーの意見が大きく異なった倫理の定義に関する議論だ。日本語の倫理と英語の ethics など、言葉の意味や使用文脈を細かく話し合う中で、倫理は個人単位か、一定規模の集団のどちらで存在するのか、また、倫理はいかに形成されるかという問いを深く考えることができた。定義の議論に限らず、私たちはお互いの意見をよく聞き結論を出す生産的な分科会であった。だからこそ問題の解決策についてももっと議論の時間をもちたかったというのが正直な感想だが、それは今後一人ひとりが取り組んでいく課題となるだろう。(伊藤 あゆみ)

・ファイナルフォーラム

発表前日に「もっと全体像を俯瞰したい、個々の事例に共通する枠組みを分析したい」という意見が出た。私も同様に、このままでは具体的事例だけの議論になってしまうという懸念があった。発表準備とパンフレット作成に追われていたにもかかわらず、既定の方針を固持しようとする者はいなかった。全員がその新たな意見に真剣に向き合い議論し、軌道修正して当日の発表に臨んだ。

パンフレットには、代理出産など個々の事例についての説明と、それらに共通するキークエスチョンを詳細に載せた。発表では、「技術開発→生活への影響→政府などの機関による規制」という流れを図にしたものを中心に発表した。また、原子力発電を例に「技術がもたらす影響に対して誰が責任を持つか」というキークエスチョンを考えたり、他の参加者に行ったアンケート結果を分析したりして、様々な角度から発表を行った。特にスライド中の ethics の定義は一言一句にこだわって議論したことを覚えている。全体像の分析にもっと時間をかけたかったという心残りはあるが、前日に新たな案が出ても真剣に考え議論する、素晴らしいメンバーに恵まれ、心から感謝している。(櫻井 千浪)



ファイナルフォーラムでの発表の様子

■分科会総括

日米学生会議の広報の際、「理系の分科会もあるんですね」と言われることがしばしばあった。しかし、当分科会の主眼は「倫理」にある。科学・技術という新規のツールを私たちが手にするとき、私たちが持つことのできる内在的な判断基準とはいかなるものか、またそれをいかに制度に反映させるか。倫理を映す鏡として科学・技術という入口を設定した。その意味では、日米両国の分科会メンバーが自らの個性やバックグラウンドを活かしながらこの問題へ取り組んでくれたことが意義深かった。

当初から生命倫理は大きな柱になると考えていたが、本年３月に発生した東日本大震災とそれに付随する福島原子力発電所の事故を目の当たりにし、分科会議論の中で自然と原発問題にも大きな関心が集まるようになった。生命倫理と原発問題という一見異種の問題の共通項を模索していくことは容易ではなかったが、この２つの視点が分科会の議論に幅を与えたのは確かである。つまり、どんな要因が倫理観を形成するのか、制度化はなぜ難しいのかなど、横断的な課題について多角的に考え、議論に深みを持たせることができた。

一方で、議論の中で複数の事案の分析から抽出した問いへの「答え」を分科会内で定めることは非常に困難であった。結局のところ、その答えは十人十色、様々な背景によって異なってくるためである。個人の信条や価値観、文化や宗教というバックグラウンドなど、そこで考えるべき要素は多く、互いに絡み合っている。その不透明な構図を考察し、一意に解を与えることが難しい理由を明快に示したことこそ当分科会の成果であったと思う。

最後になりますが、フィールドトリップでお話をうかがった皆様、分科会運営にあたってご助言いただいた方々にこの場を借りて御礼申し上げます。（中澤 耕己）

ディベートの様子

# グローバル化と世界システム
## Continuity and Change in a Globalizing World

■分科会メンバー
栗原隆太郎 *
北林未菜
小林歩
佐藤安里紗
塩原梓
Ashley Hill*
Courtney Kimball
Kevin Jamison
Steve Zellmer
Emma Tome
(* は分科会リーダー)

■分科会概要

グローバル化が進む世界では、ヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて盛んに往来し、社会の政治的、経済的、文化的な同質化と多様化が同時に進行している。関税や保護政策といった障壁が取り除かれると同時に、自由貿易協定に代表される国際的取引の枠組みを構築することにより、投資拡大、国内経済の活性化、生産性向上等の効果が期待されている。その一方、グローバル化によって貧富の差が拡大し二極化が進むといった批判や、国内産業の衰退、固有文化の破壊に警鐘を鳴らし、反グローバル化を唱える声も多い。従来では考えられないほど多くのアクターが異なる発展段階に位置し、国際競争を展開しているこの世界では、先行きを見通すことが今まで以上に難しくなっている。しかし、だからこそ、過去そして現在の動向に考察を加え、世界システムの未来図を描こうとする挑戦は必要であり、大いに議論の価値があると考える。グローバル化がもたらす様々な問題に直面している私達が、現在生き、これから構築していかなければならない世界はいかなるものか。その答えを探るべく、この分科会では、参加者の興味分野を中心に、グローバル化がもたらす日米、そして世界への影響とその未来について考えていく。

■事前活動

・春合宿

春合宿では、主に本会議の 1 ヵ月での議論をどのように進めていくかを考えた。私たちは、事前レポートに重きをおき、各自が考える「グローバル化」の共通点を抽出し、そこからグローバル化の本質に迫ろうと考えた。「グローバル化とは何か」という問いに対する答えとして、相互依存、アメリカナイゼーション、多極化という仮説をたてた。本会議が始まるまでにこれらの仮説を検証するために、多くのフィールドトリップを行うことにした。また、私たちは春合宿の分科会の発表を唯一英語で行った分科会であった。アメリカ側参加者と議論していくことを常に意識して準備をすることができた、とても有意義な春合宿であった。(北林 未菜)

・定例ミーティング、直前合宿

春合宿を終えたあと、2 週間に 1 度のペースで本会議に向けてのミーティングを日本側参加者のみで行った。ミーティングの主な目的はグローバル化に関する既存の定義、研究に触れること、そしてその知識をいかに本会議で活用するかを考えることであった。

グローバル化についての理解を深めるために、論文や本を課題に指定し、フィールドトリップで学んだ内容を振り返り、共有した。本会議をどのように進めるかについては、"Understanding the globalizing world" という英語の分科会テーマをどう捉えるのか、どのようにアプローチしていくのか、ということに関して議論を行った。

直前合宿では、それまで日本側参加者だけで行ってきた活動をアメリカ側参加者にどのように伝えるかを考え、準備を進めた。(塩原 梓)

・防衛大学生とのディスカッション

防衛大学校研修では、分科会ごとに分かれて防衛大学校の学生と議論を行った。防衛大学校の学生が用意してくれた食料安全保障、エネルギー安全保障をテーマとした発表を聞き、それらをテーマに議論を行ったのち、自由討論の時間を設けた。

防衛大学生の安全保障に対する鋭い問題意識と深い知識に圧倒されながらも率直な意見交換ができたと感じている。自由討論では、防衛大学校での生活などの話を通じて彼らの持つ価値観について理解を深めた。(塩原 梓)

・一橋大学名誉教授 伊豫谷登士翁氏 フィールドトリップ
日時：2011年6月19日(日)
場所：一橋大学

分科会の初めてのフィールドトリップとして、一橋大学大学院の伊豫谷登士翁氏を訪ねた。徐々に決まりつつあった各自のトピック(移民、医療、食糧、格差)について最初に講義をしていただき、その後質疑応答の時間をいただいた。グローバル化の歴史から始まり、グローバル化を経済、法律、文化に細分化すると異なる側面が見えること、また今日、国民国家の揺らぎが指摘されているが、ナショナリズムとグローバル化は両立しうることなど多くの視点を得た。さらに現在進行中の事象として、経済や文化といった一つの分野では説明できない漠然とした問題が増えてきていることを教わった。これらの幅広い知識を得ることで、グローバル化という抽象的な概念から具体的な問題に対処するにはどうすればいいのかヒントを得ることができた。(佐藤 安里紗)

・東京大学大学院研究科・教育学部教授 白石さや氏 フィールドトリップ
日時：2011年7月12日(火)
場所：東京大学

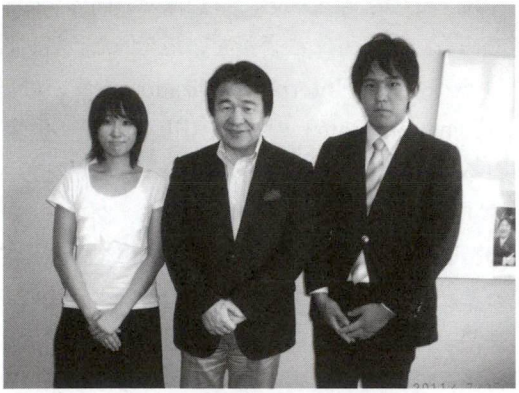
2つ目のフィールドトリップでは、東京大学の白石さや教授にお話をうかがった。伊豫谷先生のお話から、グローバル化を理解するためには、ナショナリズムについても理解を深める必要があると考え、その起源を描いた『想像の共同体』の訳者である白石先生にご講義をいただいた。当日は、グローバル化とInternationalizationの違いに始まり、「nation=state」の意味、国民国家が「想像」されるとはどういうことか、といったお話を分かりやすく説明していただいた。特に、グローバル化の影響はより身近でローカルな場にまで及んでいること、グローバル化がこの先どのような姿を見せていくかということは、予想することではなく、我々の世代が決めていくことであるという点が印象に残った。事前に本を読んでから、白石先生の講義を受けたことで、日本側参加者の間で、グローバル化の定義やナショナリズムについての共通の理解を持つことができたのは大きな成果であった。ただ、本会議中にアメリカ側参加者に学んだ内容を伝えることは思った以上に難しく、今でも心残りである。(小林 歩)

・慶應義塾大学教授 グローバルセキュリティ研究所所長 竹中平蔵氏 フィールドトリップ
日時：2011年7月25日(月)
場所：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

竹中平蔵先生に「グローバル化とは何か」というテーマでお話しいただいた。先生は、グローバル化とは「事実であり、選択では無い」ということを強調した上で、技術革新に支えられて生じる世界の「フラット化」と「スパイク化」が同時に進行する現象であると述べられた。また、グロー

バル化によりマーケット規模は冷戦前と比べ倍増し、参入のチャンスも増えたが、それは同時にライバルの数も倍増したことを意味する。このように否応なしに競争率が上がっている世界の中で、博士号取得者の数の少なさからも分かるように、競争に勝つための努力を日本人がしていないことに対して危機感を持っていらした。

先生のお話を通し、グローバル化を理解するための思考の枠組みを築くことができたと共に、具体的なレベルまでグローバル化の影響を実感できたことが大きな収穫であった。(栗原 隆太郎)



竹中平蔵氏と

■本会議中の活動

・第 1 サイト：新潟

アメリカ側参加者と初めて顔を合わせた新潟では、初めに日本側参加者から事前活動で今まで考えてきたこと、学んできたことの共有を行ったあとに、本会議をどのように進めていくかについて話し合った。

毎回の分科会の議論の進め方は参加者によって提案された。初めにメンバーが 2 人 1 組に分かれて意見を交換し、その後ペア毎に話し合った内容を分科会全体で共有してから、全体の話し合いを進めた。そして各自興味があるものについてまとめた事前レポートの内容に関して一人ずつ発表を行い、その内容に関する議論を行った。

各自の事前レポートの内容は多様で、新潟サイトではポップカルチャー、民主主義、医療、東アジア共同体、格差、移民をテーマとする発表が行われた。(塩原 梓)

・ERINA フィールドトリップ

日時：2011 年 8 月 1 日 (月)

場所：環日本海経済研究所 ERINA

環日本海経済研究所 ERINA の企画・広報部長中村俊彦氏のお話をうかがった。

ERINA は北東アジア経済圏に軸足を置き、北東アジア経済の調査研究と北東アジアでの経済交流活動を推進するための活動を行っている公益財団法人である。

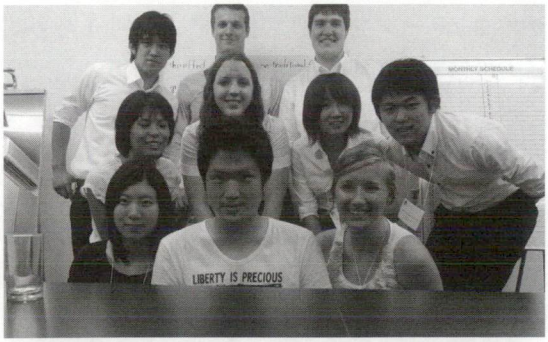
新潟という地方都市の立場から、経済発展の可能性を各国との連携に見いだしている点が興味深く、その考えの持つ可能性についてフィールドトリップ後にメンバーで意見を交換した。(塩原 梓)

・第 2 サイト：京都

京都サイトでは、各々が会議前に調べたトピックを踏まえた上で、さらに深い議論へ進むことが課題であった。同時進行で、数日後に迫った京都中間報告会に向けても話し合った。報告会のテーマに基づき、3 月に起こった東日本大震災とグローバル化がどのように関係しているか考えを出しあった。最終的に、今回の大震災で特に話題となった原発問題について取り上げることとなった。事故前の原子力エネルギー状況と、事故が世界にどのような影響を与えたかを初めに述べた上で、事故後の各国政府と非政府団体 (NGO など) の対応を比較し、グローバル化する世界の中でそれぞれの役割と今後の可能性について発表した。また、京都では「松栄堂」と「クールジャパン・プロジェクト」という会社と団体へフィールドトリップに伺い、日本文化、伝統を世界に広める上でグローバル化とどう向き合えば良いのか考えることができた。やるべきことが多く忙しかったが、とても充実したサイトであった。(佐藤 安里紗)

・クールジャパン・プロジェクト フィールドトリップ
日時：2011年8月8日(月)
場所：クールジャパン・プロジェクト 京都市内事務所

クールジャパン・プロジェクトは、京都の伝統的な文化を様々な形で世界に発信していくことを目的としたNGOである。フィールドトリップでは、グローバル化が京都観光のあり方をどう変えたか、日本の文化を効果的に世界に広めるにはどうすべきかを話し合った。例として、西陣織が新幹線の座席に、京和傘の生地がルームライトに使われていることが挙げられた。印象に残ったのは、文化の根底にある物は不変なので、変化は必ずしも悪いとは限らないとおっしゃっていたことである。(佐藤 安里紗)



クールジャパン・プロジェクト事務所にて

京都駅にて

・第3サイト：沖縄

沖縄では、グローバル化という現象において本当に重要な要素とは何か考えた。今までの議論を踏まえた上で、分科会のメンバーでグローバル化の定義付けを試みたところ、予想以上に各人の考えが異なった。そこで、沖縄ではその定義の違いに焦点を当てながら、それぞれの意見をより説得力のあるものにした。また、グローバリゼーションと関わりの深い米軍基地訪問や沖縄での活動を通して、多様なアクター間の合意形成の問題、沖縄経済の目指すべき方向性、沖縄の「ちゃんぷる文化」などの具体的なテーマについて話し合った。実際に見聞きした事例をベースに話し合うことができたので、議論がスムーズに進んだ。ある種表面的な理解に陥りがちなところもあったが、日本側参加者と同様の関心をアメリカ側参加者が示してくれたことは、純粋に嬉しかった。(小林 歩)

・名桜大学理事長 嘉数啓氏 フィールドトリップ
日時：2011年8月11日(木)
場所：名桜大学

嘉数先生からは、戦前からの沖縄の歴史や文化、基地問題と経済発展の関連について講義をしていただいた。「米軍基地を受け入れる代わりに経済的に自由な政策を実施することを国に許してもらう」という戦略は、それまで聞いたことがなかったので、大変参考になった。また、講義の後も、一緒に食事をしながら私たちの質問に丁寧に答えていただいたので、より理解を深めることができた。(小林 歩)

・第4サイト：東京

東京サイトでは、これまでの議論と並行して、ファイナルフォーラムの準備を行った。また、在日米軍の施設である横浜ノースドックに安全保障分科会と共にうかがう機会があり、今年6月より在日陸軍基地管理本部の司令官に就任したEric Tilley大佐にご挨拶をさせていただいた。Tilley大佐に日米学生会議での活動内容をご報告したことや、激励の言葉をいただいたことは貴重な経験

として私たちの心に刻まれている。ファイナルフォーラムが終わってからは、新実行委員選挙で本分科会から２名の新しい実行委員が誕生したこともあり、分科会メンバー全員で共に過ごす時間が急に減り、寂しさを感じた。（北林 未菜）

・ファイナルフォーラム

私たちは、ファイナルフォーラムのスライド作りにはあまり時間をかけず、最後まで意見を交換することに重きをおいた。他の分科会が着々と発表の準備を進める中、議論をし続けることは時に勇気を要したが、互いの意見を徹底的にぶつけることができたので、妥協せず議論し続けて良かったと思っている。

発表ではメンバー各自のグローバル化の定義を組み合わせ、議論の集大成となるグローバル化の定義を説明した。また、その定義を裏付ける例として、私たちが訪れたサイトで起きている現象を検証し発表することができ、満足のいくファイナルフォーラムとなった。（北林 未菜）

レセプションにて

安全保障分科会と

■分科会総括

「グローバル化とは何か。」

この大きく、かつ漠然とした問いに対する自分たちなりの答えを求めることが、私たちの分科会の目的であった。言い換えれば、多角的かつ俯瞰的な視野から世界で起こっている現象を捉えること、とでも言えるであろうか。

異なるバックグラウンドを持つ分科会メンバーがそれぞれの違う世界観を示し、議論を交わし、まとまっていない考えを収斂させていくことは、非常に困難であると同時に、この分科会をリードする上での醍醐味でもあった。「グローバル化」に対する参加者間の捉え方は千差万別であったが、遠慮なく自らの意見が言える環境で、その多様な考え方や感性に触れられたことは、世界システムの構造を捉えるために有益であったと感じている。多様性を持つ分科会メンバー、１ヵ月という長期に亘る議論、その土地の特色が反映された開催地先々でのフィールドトリップ。この全てが、抽象的なテーマを自らに引き寄せ理解するためには不可欠であった。

また、それと同様に重要であったのが、参加者の粘り強さだ。冒頭の問いの答えを探求する道程は非常に辛く長い道程であったと思う。しかし誰一人として投げ出すことなく、この問いをひたむきに問い続けてくれた、分科会メンバー全員に敬意を表すると共に、心から感謝を伝えたい。

この分科会での経験を通じて、参加者一人ひとりが新しい、より洗練された見方で世界を捉えることが可能になったと思う。「グローバル化」をどう定義するかにもよるが、世界が大きく変わっていることは確かで、それを理解するための枠組みを構築できたのであれば、分科会リーダーとしてこれ以上の幸せはない。

最後に、分科会活動の充実のためにご協力頂いた皆様に心からの感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきたい。本当にありがとうございました。（栗原 隆太郎）

# 変わりゆく社会とメディア
## Media in Shaping Social Preconceptions

■分科会メンバー
有川慧 *
河村統治郎
多鹿ちなみ
冨沢瑠美
八木澤龍大
Taylor Luczak*
Collin Cowdery
Kathryn Hayden
Katie Kohn
Elaine Le
(* は分科会リーダー)

■分科会概要

メディアは個人と社会を繋ぐ媒体として様々な形で我々の生活を支えてきた。メディアは報道を通じて多様な情報を国民に提供し、国民の世論形成に重要な一翼を担っている。近年起こったハイチ震災では、インターネットや携帯電話が災害時のソーシャルメディアとして使用され、現地での情報収集や募金活動など、国境を越えた援助活動に大いに貢献した。メディアは人々の思考と行動に影響を及ぼし、繰り返される情報の共有によって新たな社会的価値観を作り出す。その一方で、あらゆる情報が氾濫する現代社会において、与えられた情報を鵜呑みにすることなく、自らその情報を評価し識別するためのメディア・リテラシーの重要性が声高に叫ばれている。

当分科会では、政治報道におけるメディアの役割、マスメディアと人権問題、ソーシャルメディアによる市民の社会活動など、世界各地の様々な事例を取り扱い、メディアの功罪や社会構築のメカニズムを考察する。また、SNS やブログなどの新しいコミュニケーション手段を視野に入れることで、現代社会におけるメディアの可能性を模索したい。

■事前活動

・春合宿

初めての顔合わせである春合宿は、まず、一人ひとりの問題提起から始まった。今まで独学で学んできたメディアに関する知識や考えを共有できたことに感激した。しかし、ほぼ全員の関心が新聞やテレビなど既存のメディアに偏っており、アメリカ側参加者の興味を考慮した上で、SNS や動画サイトをはじめとする新興メディアの学習の必要性を確認した。それぞれが持つ基礎知識を共有しながら、メディアの送り手と受け手の問題を双方から考え、メディアに潜む危険性と、メディア・リテラシーの重要性について話し合った。様々な意見が出たものの、私自身も含め、一つの結論に収まってしまい、議論を衝突させることが少なかったように感じる。最後に、これから本会議に向けてどのような方向性で進めていくか計画を立てた。今振り返ると笑ってしまうほど、緊張し、ぎこちなく、お互いを探り合いながらのスタートだったと思う。(冨沢 瑠美)

・日本新聞博物館 フィールドトリップ
日時：7月10日(日)
場所：日本新聞博物館

日本新聞博物館では、日本の新聞の原点でもある「かわら版」誕生から現代に至るまでの新聞の歴史や、新聞ができるまでの工程が紹介されており、また、実際に新聞を製作することもできる。重きを置いて見ていたのは、新聞の歴史についてである。メディアとして大きな権力を持つ大衆紙が、戦前、戦時中、戦後を通してどのような役割の変化を遂げ、どのような影響力を持っていたのかは、現代のメディアを考察する上でも重要な素材である。実際、本会議中に日米の新聞が発展してきた過程を話し合う際、この知識は大いに役立った。(多鹿 ちなみ)

・政治ジャーナリスト 後藤謙次氏 フィールドトリップ
日時：7月17日(日)
場所：品川

後藤氏は率直にお話ししてくださり、一つの質問を驚くほど様々なことに繋げて答えていただいた。具体的には、現代ジャーナリズムの問題点、ウィキリークス、地震報道、今後のメディアの可能性をはじめとする多岐にわたる論点に対する後藤氏の考えをお聞きするとともに、私たちが今まで行ってきた議論、調べてきたことをお伝えした。幅広い物の見方、視点の多さに圧倒されながら、約2時間のフィールドトリップはあっという間に過ぎた。今までの活動の整理と今後の分科会としての方向性を決めるうえで、非常に実りある時間だった。(冨沢 瑠美)

・共同通信社元社長 山内豊彦氏 フィールドトリップ
日時：7月19日(火)
場所：虎ノ門 晩翠ビル

後藤謙次氏へのフィールドトリップ同様、主に現在のジャーナリズムの問題点と、山内豊彦氏の考えるジャーナリズムのあるべき姿をうかがった。山内氏は、日本は国民の民度が非常に高く、ジャーナリズムもこれにもっと対応した報道をするべきだ、とおっしゃっていた。現在、特に民放放送では報道とバラエティー番組が混同されており、無責任な情報が大量に存在する。ただ関心を買おうとするのでなく、批判的な報道を行うようにすべきである。政治が扱えない国難に関するものをきちんと収集、獲得して発信し、国民の判断材料を提供するべきだ、と述べていた。このインタビューを終えて、メディアに従事する立場の人も私たちと同様に現在のメディアの在り方を問題視していることが分かった。これに対して、日米の学生が集まるからこそ考えられる意見を発信したいと思った。(河村 統治郎)

・定例ミーティング

当分科会では、本会議に必要な基礎知識を蓄積し共有をすることを目的に、事前学習として2週間に1度の頻度で定例ミーティングを行った。加えて勉強会を3回行い、第1回は「新興メディア」、第2回は「メディアとビジネス」、第3回は「日米メディアの比較」をテーマに、各自が文献や資料を集めてスライドを作成した。勉強会では、時間を決めてプレゼンテーションを行い、その後質疑応答を行った。分科会参加者は、海外の新興メディアや日米のメディアの信頼度、日本固有の新聞社の強みなど、今まで知ることのなかった様々な知識を共有する機会を得た。これらの知識は本会議中アメリカ側参加者と議論する際にも大いに活用された。(有川 慧)

・直前合宿

直前合宿では、それまでに私たちが学んだことやメディアに関する事柄を、日本側参加者のみで議論できる最後の機会ということで、ビジネス、日米比較、メディア・リテラシー、ジャーナリズム、ニュースメディア、東北大震災の6つに分類し、整理した。また、本会議中にできる他分科会との活動も計画した。その候補には、より良い未来を作るための判断材料を提供するという点が共通す

る歴史分科会、国際的なニュースの国家間での見方の違いを論じ合えるグローバリゼーション分科会が挙がった。さらに、本会議中に原子力発電所などの施設を訪れる際、分科会メンバーがリベラルや保守などの立場に分かれて取材し、記事を作成することで、それぞれの視点を比べるという実験案も出された。私たち自身が実験台となり、その結果を議論の種にするならば、その議論は私たちだけのものである。私たちは、専門家が考えたことの後追いをするよりも、学生会議だからこそ効果的にできることを実行したいと考えた。(八木澤 龍大)

■本会議中の活動

・第 1 サイト：新潟

新潟では、分科会のメンバーが初めて一堂に会してメディアについて話し合った。まず私たちは、自分が話し合いたいと思うトピックについて事前レポートを元に紹介し合った。その結果、参加者は、ウィキリークスや、メディアと倫理、国際関連記事の言語問題、それから音楽関係などと極めて広い範囲に興味を持っていると分かった。話し合いたい内容が大変広かったため、まずは、ファイナルフォーラムに向けて 1 つのことについて話し合うのではなく、皆が共通に興味を持っていた「日本とアメリカのメディア文化の違い」や「メディアの成立の歴史」について話し合った。また、その過程で、「第 63 回日米学生会議だからこそできる議論にしたい」と意見が一致し、新潟サイトの後半はそのためにどのようなトピックについて話し合うかを検討した。(河村 統治郎)

・Article Experiment（実験）

ニュースメディアについてのディスカッションを深める上で、私たちは 2 つの問題を取り上げた。1 点目は、メディアは中立でありうるのかということ、2 点目は、記事には個人の考えや思考が反映されるのかということである。この 2 つに対して日米のメディアが取るスタンスは大きく異なる。これらの問題の是非について、私たちの知識だけで議論するのは難しいと感じた。そのため、実際に実験をしてみることでこれらのことについて考えることにした。内容としては、バックグラウンドや興味の対象が違う他の分科会の参加者に、柏崎刈羽原子力発電所へのフィールドトリップという共通の経験をもとに記事を書いてもらい、その記事の内容を比較した。実験結果は、最初に私たちが想定していたものと異なり、前者について結論付けるには不十分なデータであった。一方、後者に関しては、筆者の興味やバックグラウンドによって、実際の記事の視点が大きく異なるということが判明した。この実験により、メディアを監視する第三者の重要性を再認識することとなった。(河村 統治郎)

長岡にて

バス移動中のミーティングにて

ビュー福島潟にて

・第 2 サイト：京都 / 滋賀

京都 / 滋賀サイトは、中間報告会に向けた話し合いの中で、メディア分科会が報告会後に取り組むテーマを決定することができた重要なサイトであった。中間報告会では、メディアの概説、柏崎刈羽原子力発電所で行った実験結果の分析やフィールドトリップ、ファイナルフォーラムまでの計画について発表した。今までの議論の経過として、「Watch Dog」という情報の真偽を確かめる機関を日本に導入するプランや、「Filter Bubble」という個人がアクセスできる情報が制限される現象を紹介した。京都 / 滋賀サイトではペアを作って議論を進めようとしたが、ペアの分裂の危機や、実質的な議論の少なさによる迷走と不安が引き起こされ、この不安が次の沖縄サイトでの原動力に繋がった。(八木澤 龍大)

・京都三条ラジオカフェ訪問
日時：8 月 8 日 (月)
場所：京都三条ラジオカフェ

本会議中唯一のフィールドトリップとして、NPO 京都コミュニティ放送、通称京都三条ラジオカフェを訪問した。同局は 2001 年に市民の寄付によって設立され、影響力のあるスポンサーに依存していない。そのため、使用料さえ払えば誰もが番組を持つことができ、自由な放送を行うことが可能である。ラジオカフェ訪問後は、京都コミュニティ放送副理事長の隅井 孝雄氏からお話をうかがった。このフィールドトリップを通して、コミュニティベースの NPO メディアが新たなトレンドを作り始めていることを知ることができた。ラジオは災害時に強いメディアであり、分科会内の一つの課題であったメディアの過度な商業化に歯止めをかける策を導き出す糸口となったことは、このフィールドトリップの大きな収穫だった。事実、このアイデアはファイナルフォーラムで使用されることとなった。(多鹿 ちなみ)

隅井孝雄先生と

・第 3 サイト：沖縄

中間報告会を無事終えた安堵感とファイナルフォーラムへの焦りを抱えながら沖縄に到着した。沖縄サイトでは主に、メディアそのものに関する議論よりも、ファイナルフォーラムで何を発表するか、またそれに向けてどのように議論を進めるか話し合った。それぞれ扱いたいトピック、発表の方法などは様々で、最終サイトを前に、各々の焦りが露わになったため、全サイトの中で最も衝突が起こったのが沖縄だった。この頃から、分科会として特に意識していたことは全員が「on

the same page(共通の理解を持つこと)」を心がけることである。理解してもらうことを求めるだけでなく、積極的にお互いを理解しようと取り組むことの大切さを、分科会全体として改めて認識した。沖縄サイトでの衝突なくしては、ファイナルフォーラムであれほどの完成度を達成できなかっただろう。(多鹿 ちなみ)

・第4サイト：東京

今までの日々とは違う、何かしらの決意や心構えのようなものを一人ひとりが胸に抱き、立て続けの分科会活動がスタートした。それぞれが焦りを抱えながら、より良いものを創るために意見をぶつけ合い、賛同し合い、心の対話をした。パワーポイントのスライドを作成する担当者を決め、話し合いながら並行して発表準備を進めていった。膨大なメディア研究の観点の中から、時間をかけて選んだもの同士に関連性を見出した。それぞれに具体例をつけて、何が問題なのか、どう解決されるべきなのか、メディアに興味のない人でも関心を持てるような資料を作り、壇上での発表に全力を注いだ。ファイナルフォーラムの発表直前、隣に並ぶ仲間がどれだけ誇らしく力強かったか、その時の気持ちが今までの分科会活動の充実さを語っていた。(冨沢 瑠美)

分科会ミーティングにて

■分科会総括

近年、テレビや新聞のみならず、TwitterやFacebookなどの新興メディアが様々な場面で使用され、メディアは我々にとって非常に身近な存在となった。しかし、メディアの定義は広範囲に及び、またその身近さゆえに、メディアそのものについて改めて議論する機会は少ない。

当分科会には、世界に存在するメディアの問題に強い興味と情熱を持った学生10名が集結した。分科会参加者は、メディアによって創出されるバイアスに焦点を当てて議論を行い、メディアの中立性について問い直す機会を持った。一般的に「メディアは中立であるべき」と言われるが、本当に中立的な情報媒体などあり得るのだろうか。社会の情報を抽出し、それを発信するのは、紛れもなく我々人間である。様々なメディアを通して膨大な情報を受け取り、それを選択し取り込むのも人間である。我々人間が情報を媒介する存在である限り、結局のところ、中立な情報を提供することは不可能なのではないか。それでは、情報を発信する側、情報を受信する側、そしてこの情報社会そのものに対して、私たちにできることは一体何なのだろうか。知識量の差、言語の壁、視点の違いなど、様々な困難に直面しながらも、分科会参加者は一つひとつの意見に辛抱強く耳を傾け、多くの試みを通してこれからのメディアの在り方について考え抜いた。

社会は日々刻々と変化を遂げ、メディアの在り方も日々変遷していく。社会の変化に伴い、人々のメディア・リテラシーを向上させるためには、不断の努力が不可欠である。人々が情報を正しく判断し、合理的な意思決定を行うために、本会議の議論に留まらず、会議終了後もまた分科会参加者自らがメディアについて問い続けていく必要があるだろう。

最後に、フィールドトリップにご協力いただきました、後藤 謙次様、山内 豊彦様、町田 寿二様、松岡千 鶴様、隅井 孝雄様、そして当分科会の活動にご指導いただきました皆様に心より御礼申し上げます。(有川 慧)

# 文化と環境問題　～解決への第一歩～

## Cultures and the Environment: Micro Approaches towards a Global Issue

■分科会メンバー
山田晃永 *
阿部彩織
石川陽平
杉山和
宮内雄飛
Carly Lauffer *
Michelle Lau
Andrew Leistensnider
Rebecca Paolucci
Meg Peavey
(* は分科会リーダー)

■分科会概要

環境問題は 21 世紀の大きな課題である。国家や企業により、代替エネルギーの開発、排出権取引など、環境負荷の逓減を目指すマクロなアプローチは取られている。しかし、私たち自身の思考や生活習慣を見直すミクロなアプローチも必要であるとの視座に立ち、環境問題を個々人の行動様式に大きな影響を与える文化という切り口から考察したい。まず、日常生活における小さな積み重ねが、大きな変化をもたらす可能性について考える。エコバッグ、マイ箸は単なるファッションなのか。打ち水、畳など環境に優しい伝統文化を見直せないか。日米に限らず、世界各国の生活様式や慣習などから、個人が問題解決に貢献するヒントを得たい。次に、地球温暖化の深刻さを米国社会に訴えたアル・ゴア元米副大統領の映画『不都合な真実』のように、個人の考え方や姿勢を変えるきっかけになる映画、音楽、文学、演劇などの表象文化についても取り上げる。当分科会では、地球規模の問題に対する個人の主体的な取り組みと、他者を啓発する手段について、豊富な具体例をもとに議論し、学生として解決への一歩を踏み出したい。

■事前活動

・春合宿

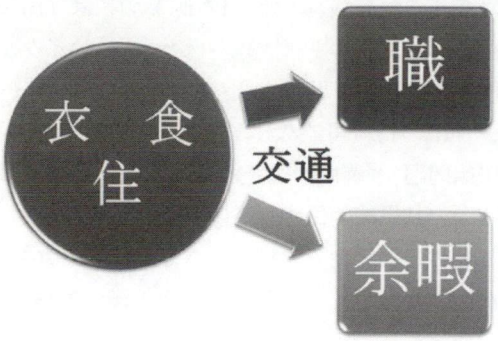
春合宿ではまず、分科会メンバーが各自思いつく環境問題やそれに対する取り組みを列挙し、以下のような既存の枠組みに分類した。

・大気汚染、水質汚濁、土壌汚染
・騒音、振動、快適性問題
・開発問題、自然保護、生態系問題
・地球温暖化、気候変動問題

次に、この分科会として扱うトピックの絞り込みを行った。分科会の目標は、環境問題という大きな問題をミクロな視点から捉え直し、解決へ向けて発信していくということだ。その目標達成のため、メンバーが挙げたものから身近な環境問題を抜き出し、既存の枠組みを参考にしながら、以下の通り新しく枠組みを作った。

1. 汚染 (大気、水質、土壌)
2. 廃棄物
3. 循環型社会
    ・地域規模での取組み
    ・エネルギー問題
4. 資源、リサイクル

さらに、「文化」は個々人の「日常生活」の集合体であると定義した。そのため、上記の 4 つのテーマから「環境」と「文化」の関係を見出すには、「日常生活」という視点から詳しく見る必要があると考えた。私たちは、「日常生活」を「衣」「食」「住」「交通」「職」「余暇」(図 1) の 6 つの項目に分けられるとし、これらを切り口に環境問題を考察することにした。この考察から「文化」と「環境問題」の相関関係を見出すことを分科会の第一の軸とした。また、第二の軸として、人間の生活に強く結びついている「文化」を用いて、人々に私たちの考えや環境問題の深刻さを発信していく手段を模索することを決めた。(阿部 彩織)




・事前レポート

「汚染」「廃棄物」「エネルギー問題」「資源、リサイクル」について、それぞれ担当を決め、春合宿以降の 3 ヵ月でレポートを書いた。日常生活における環境問題ということを意識し、春合宿で話し合った「衣」「食」「住」「交通」「職」「余暇」を切り口とした。座学に加え、各自興味に応じて講演会や見学を通して知識を得た。(山田 晃永)

【阿部彩織】

主にエネルギー問題とその解決策について扱った。エネルギー問題そのものは国家単位で考えられることの多い問題だが、その解決方法は、エネルギー政策などといったマクロなものに限らず、個々人の心がけを含む市民レベルのものに及ぶ。レポート執筆時、東京電力管内では、東日本大震災を受けて電力消費が高まる夏に向けて節電を心がける動きが広がっていた。そこで、「パソコンを省電力モードに設定し直すだけで 30% の節電になる」など、生活の中の小さな心がけの積み重ねがエネルギー消費の縮小へと繋がっている事例を集め、その共通点を探った。

さらに、「発信」の仕方のヒントを得るため、7 月にヘネス・アンド・マウリッツ (H&M) ジャパンの代表取締役社長であるクリスティン・エドマン氏のお話をうかがった。これを踏まえ、身近な文化である服飾という分野から、環境負荷軽減への取り組みを通して問題意識を発信している事例について取り上げた。

【石川陽平】

廃棄物、すなわち 3R といわれる「Reduce, Reuse, Recycle」のうち、主に「Reduce」について考察した。世界の人口は、幾何学的に増加し、それに伴い多くの資源が使われている。その結果生み出されるのは、多くの廃棄物だ。残飯や廃棄自動車などに関するデータや、実際に行なわれている対策を検証した結果、特に以下の 2 点が今後の環境問題に取り組む際のキーポイントとなると考えた。

- 有限な地球資源と人のもつ欲望を共に肯定しながらも持続可能な社会を形成することの重要性
- 物質的豊かさに「幸せ」を求めることの変革の必要性

【杉山和】

資源の節約、リサイクルについて、各国での取り組みを調べた。例えば、「衣」は衣料を回収しリサイクルまたはリユースする取り組み、「食」は残飯を液状堆肥に加工するリサイクルと賞味期限切れ間際の食品を廃棄せずに必要な人に配給するボランティア事業、「住」は古民家の建築材を新築の家を建てる際にリユースする企業の取り組み、「交通」は放置自転車のリサイクル、「職」は

フィンランドの企業が行っている古紙回収とリサイクル、「余暇」はブラウン管テレビの部品のリサイクルと結婚式で使用される蝋燭を東日本大震災後の計画停電時に照明として利用するリユースのアイデアを取り上げた。加えて、昭島市環境コミュニケーションセンターでの事前学習、芸術と環境保護の関係について言及した。

【宮内雄飛】

汚染問題について取り上げた。春合宿で定めた切り口のうち、特に「衣」に着目し、日米英での状況を考察した。従来の綿に比べ化学薬品による環境負荷を最小限に抑えたオーガニック、コットンについて述べるとともに、衣類の有効活用に取り組むイギリスの小売店や、NGO 団体での事例を紹介した。さらに、環境分科会として、未曾有の大震災が引き起こした原子力災害について議論する必要があると考え、国際平和ミュージアム名誉館長の安斎育郎氏のお話をうかがった。

・防衛大学校訪問

環境問題の解決と社会への発信方法を扱おうとしたとき、防衛大学校生にとって馴染みの薄い分野であることから議論が円滑に進むか心配していた。しかし、彼らの身の回りでも環境問題に対する取り組みや課題があると知ることができた。例えば、防衛大学校では、環境保護を心掛けるように放送、映像、ポスター等で呼びかけられており、学生は環境問題に関する情報に日常的に触れていた。また、彼らは自分たちの規律正しく無駄のない生活様式が、一般的な大学生の生活より環境に優しいと認識していた。原子力発電所事故による環境汚染について、防衛大学校生の意見を聞けたことも有意義だった。日本の自衛隊は、米軍のように原子力事故に対応する実践的な訓練を積んだ部隊を持っていないと言っていた。そのため、福島第一原子力発電所に派遣された部隊も、専門知識を持っていたわけではないそうだ。学生という立場上、先輩方のように被災地に行かない分、できる限り原子力の情報を得たいと話していた。さらに、沖縄における基地による自然破壊について、米軍と自衛隊を比較した説明が興味深かった。(杉山 和)

■本会議中の活動

・第 1 サイト：新潟

第 1 サイトの新潟は、事前勉強として全参加者が鑑賞した和歌山県太地町のイルカ漁を批判する映画「ザ・コーヴ」(アメリカ、2009 年) についての議論から始まった。伝統的な文化の尊重と環境保護の両立、アメリカ先住民のクジラ漁との比較、環境問題と人種差別の関係、などが取り上げられた。その後、各参加者が各自の事前レポートに関する発表を行い、どのようなトピックに関心があるのかを共有した。日本側参加者は、「汚染」「廃棄物」「エネルギー問題」「資源、リサイクル」を取り上げた。アメリカ側参加者からは、「ニューヨーク市の持続可能な建築物」「ダム建設とアイヌ民族問題」「環境問題と宗教の関係」「文化と環境問題の共生的関係」が挙げられた。さらに、旧山古志村や福島潟でのバードウォッチングから学んだことを通じて議論を深め、その後の分科会の方向性を話し合った。(宮内 雄飛)

菱風荘にて

・旧山古志村見学
日時：7 月 31 日 (日)
場所：新潟県長岡市 (旧山古志村)

旧山古志村では 2004 年新潟県中越地震発生後、村がどのように復興したのかを視察した。過疎に悩む豪雪地域を再建するには住民の一致団結が求められ、ニシキゴイや闘牛といった村の伝統文化がそれを可能にした。さらに、棚田という景観も村の文化の 1 つとして守られていた。震災後、山の斜面を通る道路を再建する際も、真っ直ぐで利便性の高いものに作り替えるのではなく、元々あった景観を保てるよう、あえて不便なルートを維持したそうだ。中間報告会に向けて東日本大震災からの復興を考えるうえで、山古志村からは様々なヒントを得た。(宮内 雄飛)

・第 2 サイト：京都 / 滋賀

京都中間報告会では、この分科会の考える「文化」の定義と、東日本大震災後の復興における環境問題対策のあり方について発表した。「文化」は「社会が集団として共有する考えや価値観が広く行動に移される過程」であると定義し、文化をライフスタイルそのものと位置づけた。また、新潟フォーラムでの元山古志村村長の長島忠美氏のお話から、災害復興におけるコミュニティーが果たす役割に注目した。旧山古志村では、村の伝統産業を立て直し、守り続けたいという村民の強い思いが、コミュニティーへの精神的な帰属を助けた。「山古志へ帰ろう」という共通意識が復興を大きく支えたそうだ。同様に、コミュニティー意識のもとエコタウンとして自然災害から復興を遂げた、兵庫県神戸市やカンザス州も例に挙げた。そして、東日本大震災からの復興において、これらの例をどのように応用できるか発表した。(阿部 彩織)

・沖島 見学
日時：8 月 7 日 (日)
場所：滋賀県近江八幡市沖島町

国内で唯一、淡水に浮かぶ有人島である琵琶湖の沖島を訪ねた。沖島は漁業を主な産業とする島だが、外来魚の増加や生態系の変化、水質汚染などにより、近年漁業を取り巻く状況は厳しさを増し、後継者不足などの問題も抱えている。そうした中でも、自然と共生し、50 年前から変わらぬ漁業の姿を保ちながら環境の変化へ対応していく島の人々の知恵は、文化との関係の中での環境に優しいライフスタイルを模索する私たちに様々なヒントを与えてくれた。(阿部 彩織)

・第 3 サイト：沖縄

沖縄サイトのプログラムの内容は、基地問題と日米の安全保障を扱った講義や見学がほとんどを占めていた。しかし、人の手が加わっていない森林や珊瑚礁などの亜熱帯の生態系の保護、米軍基地の存在が生態系や住民の住環境に与える影響など、環境問題と人々の生活が密接に関係していることを考えさせられる機会もたくさんあった。沖縄特有の文化に触れるなかで、伝統的な琉球文化は周辺のアジア諸国の文化の融合から形成されたことが分かった。さらに、戦後の沖縄にもたらされた米国文化の影響の大きさを感じることもできた。様々な経験を通して、伝統的文化の継承によって環境保全を実現させられると学んだ。沖縄で学んだことから、ファイナルフォーラムでの発表の手がかりが得られた。(杉山 和)

・株式会社海洋生物増殖研究センター フィールドトリップ
日時：8 月 14 日 (日)
場所：株式会社海洋生物増殖研究センター

沖縄サイトで、本会議中唯一のフィールドトリップを行った。顧客の結婚、卒業、誕生などの人生の節目を記念したウミガメの放流をビジネスとする株式会社海洋生物増殖研究センターの仲村宗起氏、砂川寛幸氏のお話をうかがった。ウミガメのお話に加え、沖縄県が掲げる長期構想である「沖縄 21 世紀ビジョン」にもとづき、糸満市に建設予定の宿泊型高齢者用医療施設に関する説明もしていただいた。慣習が文化として根付く過程、

沖縄とハワイの文化の共通点、大規模開発と環境破壊などに関して意見交換をした。(杉山 和)

・第 4 サイト：東京

東京サイトでは、ファイナルフォーラムの発表に主眼をおき議論を行なった。それまでの幅広い議論を踏まえ、日米学生会議参加者として何を発信することが最も効果的か考えた。そして、次の 2 点を主軸とすることが決まった。

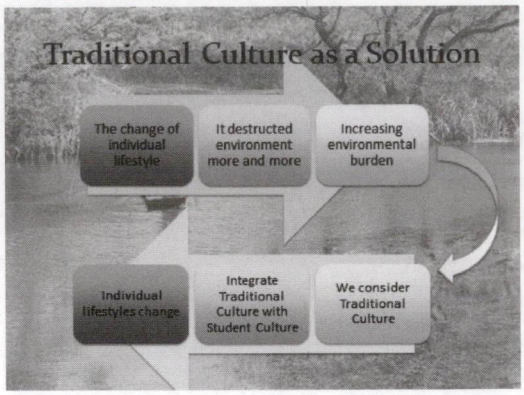
・都市部でのライフスタイルを現代社会のニーズも勘案しながら、環境に優しいものに修正していくこと

・大学生を中心とした学生に焦点を絞ること

また、本会議中に訪れた場所、特に旧山古志村や沖島などで学んだことを発表に活かすことを決めた。(石川 陽平)

・ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムのテーマは、「過去を現代に応用する ~ 伝統文化の学生生活への活用 ~」とした。「文化」を「社会が集団として共有する考えや価値観が広く行動に移される過程」、「環境」を「自然状態のままのものと人間の存在の影響を受けているものを共に含む自然の空間」と定義したうえで、学生として環境問題にどう取り組めるのかを発表した。まず、個々人のライフスタイルが環境破壊に繋がるサイクルを示し、伝統文化を取り入れることでそれを改められると説明した。(図 2) 現代の学生は、日常的に資源の無駄遣いをし、環境破壊に加担しがちである。私たちはこの原因が、学生と自然の繋がりが薄れていることにあると考えた。そこで、私たちの大学や本会議中に訪れた場所における環境に優しいライフスタイルを取り上げ、学生向けに再構成し紹介した。例えば、沖縄でワイシャツや背広の代わりとして着られている「かりゆし」、ニューヨーク州のコルゲート大学で行われている学生の残飯の重さを量る取り組みなどを取り上げた。豊富な具体例を用いることで、学生も環境問題という大きな問題の解決に貢献できると説得力をもって訴えることができた。(石川 陽平)




■分科会総括

「環境問題」というテーマは、今までの日米学生会議、そして政府レベルでの様々な国際会議でも幾度となく扱われてきた。しかし、その問題の大きさから抽象的な結論に陥ってしまったり、先進国と新興国の利害が衝突したりして、有効な解決策はなかなか生まれない。この分科会の方向性を決めた際に重視したのは、環境問題に対して学生が「個人」として何ができるかであった。そして、それを考える際の切り口として、個人の生活に大きな影響を与えている「文化」を用いれば、興味深くなるのではないかと考えた。

「環境問題」と「文化」を結び付けて論じる入門書などは存在せず、参加者に私たちリーダーの意図が伝わるか不安ではあった。しかし、事前レポート執筆時から各参加者は「文化と環境問題」というテーマを自分なりに咀嚼し、本会議の議論を通して様々な視点をもたらしてくれた。彼らの努力と熱意に感謝したい。幸い、今年の会議では国内でも伝統文化の残る場所を訪れる機会が多く、議論を深めることができた。

最後に、分科会にご協力くださった全ての方々に感謝の気持ちを表して、分科会総括とさせていただきます。多大なるご支援とご協力、本当にありがとうございました。(山田 晃永)

# 歴史認識問題と国際関係
## Interpretations of History in International Relations

■分科会メンバー
尾崎裕哉 *
五十嵐淳
上江洲仁子
杉岡昌太
山下祐里奈
Christina Ryu*
Kyle Rawding
Rachel Horton
Soeun Grace Park
Zac Callaghan
(* は分科会リーダー)

■分科会概要

靖国神社参拝や原爆切手発行問題等で見られるように歴史認識の違いが存在することは否めない。そして、時にはこのような認識の相違が国家間の争いを生んでしまう。靖国問題は極東国際軍事裁判によって裁かれたA級戦犯を合祀していることが中国や朝鮮の人々に不快感を与え、日韓・日中外交に弊害を与えている。しかし、A級戦犯を確定した極東国際軍事裁判は「勝者の裁き」とも批判され、その正当性を疑問視する声もある。アメリカ合衆国郵便公社が 1995 年に発行したキノコ雲を描いた原爆切手については当時の村山首相が不快感を表明し、日米両国の歴史認識の違いを顕在化した。

このような歴史認識の違いはどのようにして乗り越えて行くべきなのか？当分科会では「歴史とはなにか?」というE・H・カーが唱えた根本的な問に加え、異なる歴史認識が生む衝突の根源を教育、国家戦略、政治、経済、メディア等の様々な観点から模索する。対立する解釈について把握し、歴史を広い視野に立って多角的に理解することで歴史教育の在り方とその目標について日米が相互に話し合い、歴史が私達の将来を見据えるうえでいかに重要かを考えていきたい。

■事前活動

・春合宿

初対面の分科会メンバーに会うことに最初は緊張していたが、活発な議論を通じて次第にそれぞれの緊張が和らいだ。まずは歴史認識とは何かを模索することから始まった。個人レベルでの歴史認識のズレから、日中・日韓を主にした国レベルでの歴史認識の違いなど、幅広い範囲について話し合った。また、メンバー全員が外国で教育を受けた経験があったため、他国での歴史教育や、国によって「日本人」に関するイメージが異なることが歴史の認識とどのように関係があるのか、歴史が及ぼす差別的イメージの形成などについてお互いの経験から学ぶことができ、とても興味深かった。私たちがいかに歴史を認識しているかを改めて考えたことが、それぞれのアイデンティティについても改めて考えるきっかけになった。最終日の発表に向けて一致団結して取り組めたことに達成感を感じ、メンバーの絆が深まった。今思えば、ここでの議論が本会議中の分科会活動およびファイナルフォーラムにも大きな影響を与えることになった。(上江洲 仁子)

・定例ミーティング

春合宿を終え、週に２回の定例ミーティングを行うことを分科会メンバーで決めた。まず始めにE.H. カーの『歴史とはなにか』を読み、その根本的な問いを再検証した。主に第二次世界大戦の事例を用いながら、「歴史的事実」がどのようにして「歴史」として認識されるようになるかについて議論し、その過程をモデル化した。

その時代の歴史認識を形成する歴史家は、それぞれ時代によって異なる倫理道徳の価値観や宗教観のフィルターを持ってしまう。その事から、歴史として継承される過去の出来事に対して取捨選択や解釈が生まれる可能性がある。E.H. カーが「歴史とは現在と過去との対話である」と言ったように、同じ歴史的事実を取り上げて、それの歴史が教訓となる場合もあれば、政治的に都合のいいように歴史が解釈されてしまう恐れがある。そして、外交の現場では歴史の解釈と主張が異なることから、対立関係が生まれてしまう場合がある。解決策として、対話を通して認識を統一すれば良いという指摘があるが、言語や価値観の壁を乗り越えるのは極めて難しいという議論もあった。本会議でアメリカ側参加者と議論するための基礎を築くことができた。(五十嵐 淳)

・「未来に伝える歴史」小論文

参加者各自が歴史についてもっと詳しくなるため、歴史認識問題をさらに身近に感じるため、そして、伝わるプレゼンテーションを練習するために各自が歴史家となって選んだ歴史上の出来事や歴史認識問題を２ページ以内にまとめた小論文を書いた。限られた字数の中で「何を他の参加者に伝えるか」を意識してもらうことで、取捨選択を意図的に経験させた。その後は、それぞれが書いた小論文をお互いで読み、取捨選択にどのような傾向が見られるか等について話し合った。以下に各自が書いた小論文のテーマを記す。　(尾崎 裕哉)

五十嵐—「各国の終戦記念日の違いからみる歴史認識」
上江洲—「沖縄米軍基地問題」
尾崎—「在日朝鮮人の歴史」
杉岡—「黒人差別と公民権運動」
山下—「靖国神社参拝問題」

・防衛大学校研修

そもそも歴史認識の違いは何故問題視されるべきなのかについて考え、深く議論できた機会であり、歴史認識についてさらに議論をする余地があることを思い知らされた。これまでの分科会では歴史が現在に与えている影響や、震災が今後歴史としてどのように語られていくべきなのか、について議論することは多かったものの、歴史認識問題に関してメンバーで共通する認識を持つまでに至ってなかった。本研修では、南京大虐殺や東京裁判などの具体例を挙げながら話すことができたと同時に、歴史がこれまでどのように教えられてきたか、日本人とは何かについてそれぞれの意見を交わした。防衛大学校の学生と話したことは参加者たちにとっても素晴らしい刺激になり、今後の議論に大きく影響を与えた。(尾崎 裕哉)

防衛大学校生と

・「歴史認識問題」プレゼンテーション

防衛大学校での研修を経て、より歴史認識問題の事例について詳しくなる必要があると感じたことから、各自が歴史認識に関わると感じた出来事を取り上げて、分科会メンバー内で改めてプレゼ

ンテーションを行った。取り上げた歴史上の出来事から何を学ぶことが出来て、それは歴史認識問題に関係するか否か、今後どのように議論を進めるかを話し合った。以下が、発表のテーマである。(尾崎 裕哉)

五十嵐—「北方領土問題」
上江洲—「普天間基地移設問題」
杉岡—「黒人差別とアイデンティティについて」
山下—「靖国神社参拝問題」

・朝鮮大学校フィールドトリップ
日時：6月26日(日)
場所：朝鮮大学校

朝日大学生友好ネットワークの学生とともに、朝鮮大学校で開催された交流会に参加した。本交流会に参加して、在日朝鮮人は民族に対してとても誇りを持っていること、また在日朝鮮人と日本政府の間に明確な価値観の違いがあるということに気がついた。早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが主催する「日本コリア未来プロジェクト」の参加者からの発表を聞いた後、約5名ずつのグループに分かれて「我々はどのように東日本大震災の復興のためにコミットできるか」というテーマで議論をした。朝鮮大学校の学生の一人が、東日本大震災の悲惨な状況で在日朝鮮人への対応が後回しにされていたことから、日本政府の在日朝鮮人に対する意識が明白になったと話していたことが印象的だった。彼の言っていたことが彼の解釈なのか、事実なのかは定かではなかったが、歴史認識の問題を身近に感じるきっかけとなった。そして、歴史の認識がこのような緊急事態での妨げになってしまう可能性があることに大きな懸念を抱くようになった。(杉岡 昌太)

・中瀬正一氏フィールドトリップ
日時：2011年7月8日(金)
場所：日米会話学院

私たちは、日米学生会議のOBであり、極東軍事裁判で通訳を務められた経験のある中瀬正一氏に、極東軍事裁判に関するお話をおうかがいすることができた。極東軍事裁判の正当性については様々な議論がなされているが、私自身はそれまで特に自分の意見を持つほど問題意識は持っていなかった。しかし、中瀬氏のお話の中で当時の時代背景や実際の裁判の状況、そしてそれをとりまく日米の政治的な意図を学び取ることができ、極東軍事裁判やそれに関連した靖国神社参拝問題などをより身近な問題として捉えられるようになった。今後の外交関係を踏まえつつ、自分なりに戦後処理問題を考え、追求していきたい。　(山下 祐里奈)

・孫崎享氏フィールドトリップ
日時：2011年7月8日(金)
場所：孫崎氏ご自宅

元外交官、元防衛大学校教授で作家である孫崎享氏のもとを訪れ、歴史認識問題に関わるお話をうかがった。私たちが理解に困っていたこと問題を分かりやすく教えてくださった。また、私たちの質問一つひとつに丁寧にお答えいただいた。その中で、特に印象に残ったお話が二つあった。一つ目は、歴史問題を直接的な対話から解決を試みるのではなく、ドイツやフランスなどの欧米諸国が行ったように、欧米連合(EU)を設立することで「共通する意識」を生む方法があるということである。アジアでは「東アジア共同体」の形成が、もしかしたらアジア諸国が歴史認識問題を乗り越える手段に有効になるかも知れないと思った。二つ目は、靖国問題や極東軍事裁判については、個別的事例を見るのではなく、第二次世界大戦の大局を捉え、その中での日本の立ち位置を見る必要があるということだ。お話を通じて、歴史認識には多様な情報だけではなく、多角的な視点が必要であるということを感じた。(上江洲 仁子)

・直前合宿

直前合宿では、主に事前学習として行ったフィールドトリップや勉強会を振り返ってまとめ、今後の本会議においてアメリカ側参加者とど

のような議論をしていきたいかを話し合った。また、直前合宿の最後には、主に東日本大震災に関して、歴史分科会としてどのようにアプローチしていくかを英語で発表した。議論も充実し、発表の準備も順調に進んでいたが、発表内容の細かい打ち合わせをしないまま臨んでしまったため、分科会内で共有していない内容を発表し、混乱を招いたことが残念だった。個人としてではなくグループとして協力し、努力をするという自覚を全員で確認するべきだと感じた。充実しつつも多くの課題点も見つかる合宿となった。(山下 祐里奈)

■本会議中の活動

・第 1 サイト：新潟

新潟において初めての議論をするにあたり、日本側参加者の意見や議論の過程をアメリカ側参加者にどれほど受け入れてもらえるかを不安に感じていた。しかし実際に意見を交換すると、想像していた以上に円滑に議論が進んだ。英語での議論と日本語の議論とは明らかに差があったのは事実だが、何よりもアメリカ側参加者と本気で討論をし、語り合う機会は大変貴重であった。全てが期待していた通りに進んだわけではなく、アイディアが逆に溢れ出してしまい、それを収束させることの難しさをこの時期にすでに感じはじめていた。それぞれが政治、経済、外交、または学校教育など異なる切り口を持っており、分科会において最も重点を置きたい議題はまだ定まっていなかった。結果的に新潟での議論がその後のサイトでの議論の布石となり、より意義深い分科会へと発展させることができた。(杉岡 昌太)

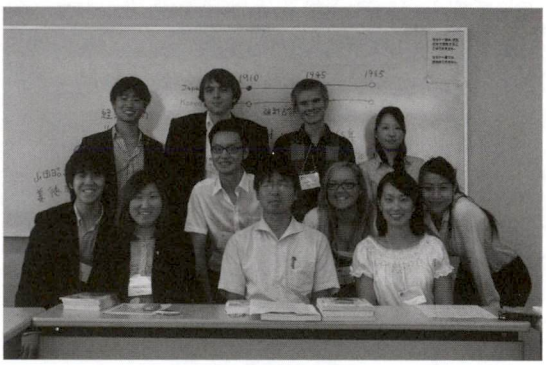
・新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科教授 吉澤文寿氏 フィールドトリップ

日時：2011 年 8 月 1 日 (月)

場所：新潟国際情報大学

日韓関係を専門にしている吉澤教授に講義をして頂いた。吉澤教授によれば、日韓の歴史認識問題は 1965 年の日韓国交正常化に起因するという。日韓基本条約が締結されたが、日本は何に対する責任を賠償する必要があるかという点において日韓の主張が異なっている。その認識の違いが戦後補償問題のみならず、北朝鮮問題や教科書問題をも引き起こしている。また、1965 年をもって、それ以前の日朝間の条約は無効とされるという条文解釈も異なる。故に、韓国併合の 1910 年から太平洋戦争終結の 1945 年までの植民地支配は正当化されると日本は主張し、韓国政府はそれに対して反論している。

他にも賠償の問題、竹島の帰属問題、強制徴兵の真偽、日本在留の韓国人の対応など、日韓関係に関するお話を幅広くお伺いすることができた。90 年代になって、やっと従軍慰安婦の被害者が名乗り出てくるようになり、慰安婦の被害が認知されるようになった。そのことから民主主義という国の制度によって、初めて歴史問題に向き合える環境があるのだと感じた。日本人は第二次世界大戦を振り返ることを嫌がるが、しっかりと歴史を見つめ、現在の立場を知ることで、国益を実現できる外交が可能になると思う。(五十嵐 淳)



吉澤文寿教授と

・第 2 サイト：京都 / 滋賀

京都では中間報告会を控えており、その発表に向けて分科会メンバーは一致団結しているつもりでいた。報告会の前日であるにも拘わらず、発表を早くまとめようと躍起になってしまい、参加者一人ひとりの意見が反映されていない状態で準備を進めてしまった。結局、前夜に完成した発表も表面的なものになってしまった。しかし、ある日本側参加者の発言をきっかけに、チームとして再

びまとまることができた。この発言は、新潟と京都で培った議論を根底から覆すものであったが、この時起きたアメリカ側参加者と日本側参加者の衝突をきっかけに、両者が歩み寄れた気がした。この結果、今までの発表を白紙に戻し、一から考え直すことになったが、本番は努力のかいもあって達成感を味わうことができた。(杉岡 昌太)

・中間報告会

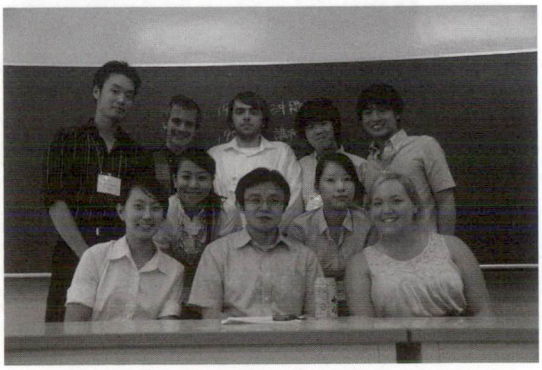
2011年3月11日の東日本大震災により東北地方は甚大な被害を受け、また福島第一原発事故は日本全国の人々の生活や生命、未来までをも脅かしている。このように日本が苦境のさなかにありながら、私たちは多くの支援を得て日米学生会議を開催することができた。だからこそ私たち一人ひとりが学生として何ができるかを考え、行動を起こすきっかけを作ろうと中間報告会が行われた。各分科会と震災特別分科会がそれぞれの視点から震災を見つめ、復興や防災へのアプローチを考え、発表した。私たち歴史分科会は、歴史が作られ歴史認識問題が起きて解決されるまでの枠組みを図にした。そして過去の震災の歴史と今回の震災をこの枠組みにあてはめ、具体的な解決策を発表した。震災に関して、歴史分科会独自の観点から発表が出来たと感じた。他の分科会の発表もそれぞれ独自の視点から震災へアプローチしており、とても勉強になった。震災を考え、復興にこれからも関わりたいと感じる刺激的な報告会だった。(山下 祐里奈)

・第3サイト：沖縄

1日目の議論で初めて深い議論ができた。歴史とは何か、歴史認識とは何か、歴史認識の違いはどのように生まれるのか、どのようにして解決していけば良いのか。日本側参加者が春合宿に作った図表を中心に議論が行われた。英単語について日本側参加者とアメリカ側参加者の認識が全く違い戸惑ったが、歴史分科会が考える、歴史が歴史として認識される過程を示した図を完成することができたのは大きな成果であった。沖縄サイトでは、フィールドトリップの感想と意見を中心に共有した。内容的にも濃い議論ができて、とても達成感があったサイトであった。(上江洲 仁子)

・沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科准教授
鳥山淳氏 フィールドトリップ
日時：2011年8月13日(土)
場所：沖縄国際大学

日本の領土の1%に満たない沖縄に米軍基地の75%が存在する理由を、日米両政府の歴史認識から説明していただいた。日本(本土)政府は、沖縄戦敗戦の際も、沖縄を必要な犠牲と見なしており、太平洋戦争で降伏せず戦争を継続した。アメリカ側参加者にとって、戦時中、沖縄は本土上陸のための拠点であった。敗戦後も本土の人々による沖縄に対する差別は続いた。「沖縄は日本の本土とは違う。」「沖縄を基地にすることは都合がいい。」マッカーサーはこのような日本政府の見解を利用し、住民の声が反映されにくい沖縄に基地を置きつづけた。また、冷戦時にソ連に対抗するために基地を沖縄に残した。昭和天皇も、アメリカに沖縄を50年以上租借して欲しいと密使を送った。このように、日本政府は安全保障としての問題を沖縄に押し付け、米国政府はそれを利用し日米同盟と称して、沖縄のアジア戦略拠点としている。(五十嵐 淳)



鳥山淳先生と

・第 4 サイト：東京

議論の総括の場である東京サイトでは、様々な歴史認識問題の中から、分科会として何を発表の核とするのかに悩まされた。しかし、この東京サイトまでに強固なチームワークをすでに築き上げており、そのうえメンバー一人ひとりの特長をそれぞれが認識していたので、かつてよりスムーズに議論を進ませることができた。個人的には、ファイナルフォーラムで、沖縄の歴史や原爆投下と原子力発電との因果関係などの特定の話題に触れることができなかったことが残念だった。だが、発表自体は非常に満足のいくものができた。(杉岡昌太)

・靖国神社フィールドトリップ

日時：2011 年 8 月 16 日 (火)

場所：靖国神社

今回が私にとって初めての靖国神社訪問だった。靖国神社で参拝はせず、神社内の遊就館という戦争資料館を数時間かけて見学した。京都 / 滋賀サイトで訪れた資料館とは大きく異なり、軍国主義時代の日本を正当化する意図を感じる展示が多かった。巨大な軍事力を称え他国列強を批判し、さらには「犠牲者」としての日本を強調する展示に、個人的に違和感を覚えずにはいられなかった。一方で展示資料や上映ビデオを前に深々と頭を下げ拍手をするなど、当時の日本を崇拝する人々の姿も見受けられ、歴史認識の違いを初めて身をもって実感した。無論、「正しい歴史」は存在し得ないが、だからこそ多角的で中立的な歴史の解説が必要だと思った。偏った歴史教育は歴史認識の差を広げ、その溝が時に争いを生む。遊就館では、歴史認識問題の縮図を見た気がした。ここでの経験はアメリカ側参加者にとっても刺激となり、より深く熱い議論のきっかけとなった。
(山下 祐里奈)

・ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムでは、歴史教科書ができあがる過程、そして私たちが考える理想の歴史教科書について、アメリカ側参加者と議論を通して図にまとめ、解決策として提示することができた。全ての問題を取り上げ、解決策を提示することも大切だが、歴史認識を形成する上で最も影響を持つ教科書が現在持つ問題点と、これらにおける解決策を明確に提示できたことは有益だった。なにより、アメリカ側参加者と日本側参加者の仲が良く、そのお陰でお互いに心を許し合い、意見を尊重し合い、白熱した議論ができたのではないだろうか。もっと議論を深めたかったという思いはあるが、歴史分科会として学んだことを、発表の仕方も様々な工夫をし、観衆に伝えられたことをとても誇りに思う。(上江洲 仁子)

福島潟にて

■分科会総括

この分科会を始めるにあたって、ある方に「歴史について語る意味はあるのかい？もっと未来について話しなさい。」と言われたことを今でも覚えている。確かに、真珠湾攻撃や原爆投下のような出来事は変えられない。しかし、歴史からは学ばなければならないことが沢山ある。さらに、私

たちは歴史があるからこそ、現在の自分たちの生活があるということを忘れてはならない。よって、各国の歴史認識の違いを議論することが、参加者それぞれの「ナショナルアイデンティティ」と異文化間の「コミュニケーション」について考えるきっかけになり、参加者の将来に影響を与えるのではないかと思っている。

本会議では各国の歴史認識の違いが日朝関係、沖縄普天間基地問題、北方領土問題、えひめ丸事件、東京裁判の認識などに及ぼす影響について各国の視点に立って議論し、国ごとの文化の違いが外交のスタイルの違いに影響していて、それが国際関係に大きく影響していることを理解した。また、歴史がどのように認識されていて、各国の主張の違いと歴史における「バイアス」をどのようにして克服するべきかを議論した。その結果、ファイナルフォーラムでは恣意的な歴史教育がもたらす悪影響について訴え、それを乗り越えるための国際的な共通教科書づくりを提案した。様々な文献やドキュメンタリー映像、そしてフィールドトリップが歴史を知るために多いに役立った。しかし、それらを通じて感じた一番大事なことは、現場を知ることの大切さではないだろうかと思っている。

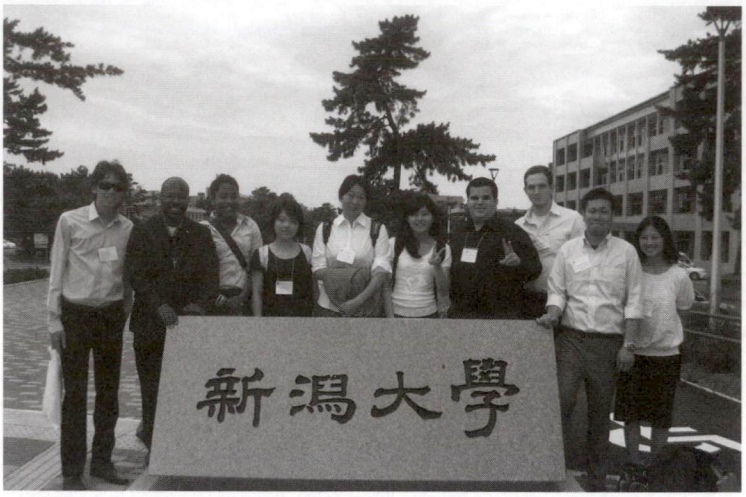
フィールドトリップを受け入れてくださった皆様、ファイナルフォーラムまで新潟からわざわざお越しくださいました吉澤先生、歴史という難しいトピックに挑んでくれた分科会メンバー、歴史を専門とする学生が一人もいないなかで分科会を上手くリードしてくれた Christina Ryu に、心からお礼を述べたい。私が掲げていた「10 人がこの分科会に参加して良かったと思える分科会にする」という目標は、皆様の応援がなければ達成できなかったであろう。本当にありがとうございました。(尾崎 裕哉)

分科会ミーティングの様子

# 差別から考える平等

## Minorities in Modern Society: Achieving Equality in a Diverse World

■分科会メンバー
井上聡美 *
石川惠
川邊拓也
佐々木いくえ
吉本理沙
Justin Perkins*
Jose Lamazares
Kiah Gilbert
Adam Waldman
Danielle Wilson
(* は分科会リーダー)




■分科会概要

少子高齢化と人口減少の進む日本において、労働人口の減少は大きな課題となっている。そのため外国人労働者を受け入れようとする動きがあるが、その一方で日本人と外国人労働者の間には賃金や労働時間など、労働条件に格差がみられる場合がある。彼らに対する差別を解消し、彼らの社会参画をどのように促していけるだろうか。外国人との平等を実現し、より住みやすい社会を作っていくために彼らの声をどのように社会に反映させていけばよいのだろうか。

今日の世界には外国人労働者に対する不平等だけでなく人種差別や身分差別、性差別、所得差別や身体の能力に関わる差別など様々な差別がある。本分科会では現在や過去における差別について取り扱い、マイノリティーと呼ばれる人たちの権利の獲得や政治参加にいたるプロセスの中でどのように日米の社会がマイノリティーと向き合い、政策決定がなされてきたのかを考察する。多様化が進む社会において尊重されるべき市民権、基本的人権とは何かを個々の視点から話し合い、「平等」とは何かを追求していきたい。そしてその「平等」を今日の社会でいかに達成していくかを検討したい。

■事前活動

・春合宿

本会議では英語での議論が基本となるが、春合宿ではまず日本語での話し合いから始めた。それぞれの参加者が関心を持った差別問題について、事例をもとに差別・平等とは何であるのかという事前勉強の成果を分科会内で共有した。性、人種・国籍、地域格差、外国人労働者といったトピックが挙げられた。それぞれに関する議論を通して、差別 / 区別 / 格差、平等 / 公平などの言葉をどのように定義すべきか、多様な価値観がある中で選択の自由はどこまで許されるべきなのか、また、無意識下での差別も問題になるのか、などの多くの疑問が挙げられた。また、差別の解消を目指すのならば、何をもって解消されたとし、またどのようにして平等を実現するのかについても話し合った。

本会議に向けた約３ヵ月の事前活動の中で、差別、平等を定義し、各自の興味にしたがった差別問題に関する分析とその解決策を考察していくことを目標とし、無事に春合宿を終えた。(佐々木 いくえ)

・定例ミーティング

本分科会参加者は、宮城、茨城、愛知、京都、沖縄から参加しているため、週に一度、インターネット電話で会議を行った。好井裕明氏の「差別原論―＜わたし＞のなかの権力とつきあう」を用いて議論を重ね、差別の定義について模索した。

文献より、私たちは、差別を非日常的で自分とは遠く離れたところで起きているものとして認識しており、それが差別問題をより解消困難にしているため、自分も差別をし得る存在であることを自覚し、差別が日常的なものであることに気が付く必要があると学んだ。私たち5人は、自分たち自身が差別をし得る存在であることに少々戸惑いながらも、差別を自分自身の問題であると捉える努力、そして常に内省的な姿勢を持つことが非常に重要であると考えをまとめた。また、各自のトピックも、本会議に向け自主的に準備した。(佐々木いくえ)

・防衛大学校訪問

防衛大学校の学生4人と差別や平等について議論した。まず私たちの事前活動の内容を紹介し、テーマを人種差別に絞り、積極的差別撤廃措置の必要性について意見を交わした。特に、参加していた女子学生からは、防衛大学校や自衛隊における女性の状況や役割について聞くことができた。防衛大学校では、女性の数は少ないものの、より良い環境が整えられつつあり、精神的な強さを活かした活躍の場面も多くあるそうだ。また、「自衛隊の能力主義は差別を是正できるのではないか」など一般の大学生とは少し異なる考えを聞くことができ、貴重な機会となった。(石川惠)

・朝鮮大学校訪問

日時：2011年6月26日(日)

場所：朝鮮大学校

事前学習として、在日朝鮮人に対する差別の現状を学ぶために朝鮮大学校を訪問した。朝鮮大学校は、四年間の高等教育を行うが、文部科学省から大学としての認可を受けていない。そのため、法律上は各種学校扱いであり、卒業生は「大卒」として扱われない。朝鮮大学校が歴史教育や文化教育を行なうことは、民族として当然の権利であり、それを理由に日本政府が学校法人として認可しないことが一番の問題だと朝鮮大学生は話す。訪問を受け入れてくれた学生たちは、他大学や地域住民との交流を通して相互理解を目指すサークルで、「交流が必要な間はまだ駄目です。私たちも普通の人間だと知ってもらいたい。」と話していた。(佐々木いくえ)

朝鮮大学生と

・炊き出しフィールドトリップ

日時：2011年7月14日(木)

場所：愛知県名古屋市若宮通り高架下

様々な差別や不平等な扱いを受けているホームレスの方から直接お話が聞けるということで、ホームレスの方への炊き出しに参加した。実際に、友人に騙され借金を負い偽名でホームレスをしている方、自殺を決心し樹海に向かったがすんでのところで子供の言葉を思い出して帰ってきた方など、衝撃的なエピソードを聞くことができた。また支援団体のスタッフに、生活保護システムの欠点や、震災後の被曝労働者としてホームレスがスカウトされている現状など、多くの方々苦しんでいる状況について詳しく教えていただいた。炊き出しに参加したことで、今まで私がホームレスの方に抱いていた偏見が間違っていたことに気づき、彼らが想像以上に苦しい体験をし、大変な状

況にいることを改めて実感させられた。(吉本 理沙)

・ジェンダー講演会フィールドトリップ
日時：2011 年 7 月 15 日 (金)
場所：沖縄県那覇市てんぶす那覇

琉球大学国際沖縄研究所主催の講演会『ジェンダーとトラウマ：「性的支配」を考える』に参加した。講演者は一橋大学教授であり精神科医でもある宮地尚子氏だった。まず「トラウマ」の具体例を紹介し、それらと「ジェンダー」との関係性を明らかにされた。また、男女における性的差別の被害の違い、「性的支配」の歴史的な変化を説明された。さらに、東日本大震災後の環境において生まれる差別をどう乗り越えるかについても述べられた。参加者との意見交換から、沖縄特有の文化や歴史的背景から生み出される差別をどう捉え、どう変えていくべきかという点についてもお話された。多様なテーマの中から、重要なのは、相手の立場に立ち、共感し合うことだというメッセージを受け取った。(石川 惠)

・直前合宿

まず、春合宿から直前合宿までの間に行った事前活動を振り返った。そこから問題点を洗い出し、アメリカ側参加者と議論したいことを明確にすることができた。

春合宿以降、様々なフィールドトリップや文献を通して考えを深めた。これを踏まえ、私たちは「差別を完全に無くすことはできない」中でどうやって「平等」を達成するか、また「平等」とはどういう状態なのかの２点を本会議では話し合いたいと考えた。また、日本側参加者の議論は特に抽象的になりがちだったので、様々な背景を持ったアメリカ側参加者を交えて、より具体的に議論を深めたいという点を確認した。(石川 惠)

■本会議中の活動

・第１サイト：新潟

初めてアメリカ側参加者と顔を合わせ、それぞれの事前レポートを基軸にしつつ、アファーマティブ・アクション、男女差別や人種差別、またナショナル・アイデンティティーについて議論をし、見識を深めた。また、日本側、アメリカ側参加者１人ずつのペアをつくり、それぞれが事前レポートの内容について発表を行った。

メンバーそれぞれが差別に対してどのような思いを持っているのかを知ることができたこと、またこれから議論すべきトピックの大きな枠組みを完成させることができたことが大きな収穫である。(川邊拓也)

・新潟大学大学院実務法学研究科准教授 渡辺豊氏フィールドトリップ
日時：2011 年 8 月 1 日 (月)
場所：新潟大学

渡辺先生からは、差別を縮減させる方法について制度面から講義をしていただいた。マイノリティーがいかにして社会に溶け込むのか、法律や教育の整備という視点からお答えいただいた。

１つの鍵は言語である。東日本大震災において、外国人労働者は、放送されていた避難勧告を理解できなかったが故に逃げ遅れるという不利益を被った。またアメリカにおいては、英語を話せる者はホワイトカラーとして働き、そうでない者はブルーカラーとして働く道しか残されていないという傾向がある。法制度や語学教育の整備に基づく視点は、制度的な解決策を考える上でのステップとなった。(川邊拓也)

・新潟大学人文学部人文学科教授 三浦淳氏フィールドトリップ
日時：2011 年 8 月 1 日 (月)
場所：新潟大学

三浦教授からは、特に部落差別について講義をしていただいた。まず、部落差別が発生した歴史から説明してくださり、さらに私たちの日常生活のいたる所に差別の影があることを、「ちびくろサンボ」や「ピノキオ」の例を交えてご指摘くださった。

三浦氏は、制度面から離れ、文化的な視点から考察し、個人個人の意識の上で差別を解消していく道を模索するヒントを与えてくださった。(川邊 拓也)

・第 2 サイト：京都 / 滋賀

主に移民者に対する差別について話し合った。移民者が被っている不利益の現状と、「Dream Act」などの在留少数者を保護する制度について考察を深めた。今後グローバル化が進み、より一層移民者が増加すると予測される世界の中で、彼らを保護する方法を模索した。

中間報告会では、二つのトピックについて発表を行った。第一に、上述した移民者に対する差別についてである。第二に、東日本大震災と差別を関連させ、震災・津波による被災者や、福島第一原子力発電所の事故による避難民の方々をいかにして差別から保護するかについて言及した。

私たちは結論として、差別を縮減させるには、「自覚」が重要であるという考えを発表した。ここでの「自覚」とは、偏見から差別という具体的な行為に繋がる前に、それを思い留まらせる「気付き」のことである。いかにして、「自覚」を養うことができるのかを次の議題とし、中間報告会を終えた。(川邊 拓也)

・第 3 サイト：沖縄

中間報告会後のフィードバックで指摘されたポイントを意識しつつ、LGBT( 女性同性愛者、男性同性愛者、両性愛車、性転換者 ) 問題について話し合った。日本側参加者は、これまで LGBT 問題について深く考えた機会が少なく、戸惑いながらも、アメリカ側参加者に知識や経験を話してもらうところから議論を始めた。

LGBT 問題を選択した理由は、以下の二点である。第一に、全ての人々が LGBT になり得る可能性を秘めており、国境を越え存在する差別であること。第二に、LGBT の人々を一目で判断することは難しく、彼 / 彼女らを救済しようとする手が差し伸べられにくいことである。LGBT が先天的な症状なのか、後天的な症状なのかを検討した上で、婚姻問題や養子問題など彼 / 彼女らが直面している様々な困難について議論した。(川邊 拓也)

・琉球大学法学部教授 喜納育江氏フィールドトリップ
日時：2011 年 8 月 13 日 (土)
場所：琉球大学

喜納先生のフィールドトリップでは、まず日本とアメリカでの、LGBT の認識の違いについて意見交換した。日本では、LGBT の人が LGBT であると公言しにくく、そのためか話題にあがることがあまりない。アメリカでは、よく知られていて広く議論され、権利を求める運動も盛んである。また、「差別を生むのは何か」というテーマで話し合い、差別の根幹にあるのはよく分からないことに対する不安であるから、LGBT の人と接する経験を積むことにより、その不安を小さくしていけば、差別をなくしていくことができる、という結論に至った。喜納先生のお話がファイナルフォーラムの発表の筋書きを決めるのに大いに役立った。(吉本 理沙)

・ケイヴィフィールドトリップ
日時：2011 年 8 月 17 日 (水)
場所：ケイヴィ (東京都)

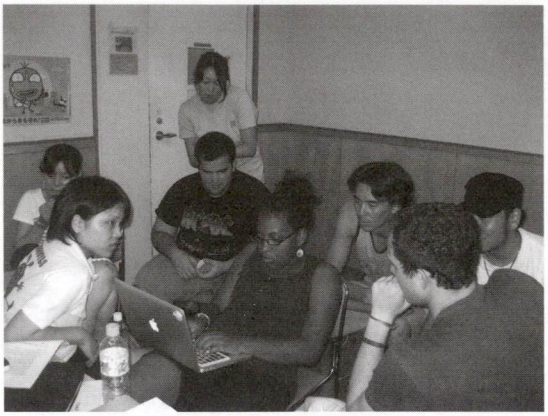
ゲイバーのオーナーである平野俊一氏に、質問形式で日本のゲイ社会について教えていただいた。日本では、インターネットや携帯電話の普及により、ゲイ仲間で集まったり、連絡を取ったりすることがとても容易になった。また、大学内でもサークルなどができてきており、少しずつゲイの認知度が高くなっている。さらに、ゲイ同士の結婚権についてオーナー自身の意見を聞かせていただき、私たちがこれからどのように差別と接していくべきか、具体的に議論をすることができた。(吉本 理沙)

平野氏と ケイヴィにて

・第 4 サイト：東京 / ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムでは、人々に LGBT について知ってもらうことと、差別について考える方法を伝えることを目的とした。そのために、LGBT を具体例に、私たちがどのように考えたかという議論の過程を発表した。

まず、差別についてよりよく知るための方法論を説明した。それは、差別が誰によって、どのような内容で、どこで、いつ、どうして、どのように生じるかという 6 つの質問に対して答えていく形で調べていった。そして LGBT について簡単に紹介してから、実際にこの方法論を用いて、日本における LGBT への差別について説明した。日本では、LGBT の認知度が低く、よく分からないという不安から差別が生じており、他の差別も同様に不安から生じるものが多い。その不安をなくすために私たちができることは、正しい知識を身につけ、他人を尊重し、自分が偏見を持ちうることを自覚するということである。一人ひとりの意識の変化によって、様々な差別を減らすことができると結論付けた。(吉本 理沙)



分科会の議論の様子

■分科会総括

「正義とは何か。」これは私が本分科会の担当者として一年間自らに問い続けた課題である。マイノリティーの議論をしている中で、往々にして少数者の声に耳を傾けること、ではなく、少数者の声それ自体が正義、美徳とされてしまうことがある。しかし、少数者の声を優先するということはそれと同時に多数の声を無視することにもなりうる。物事を判断する価値観や視点は世界には多数存在する。その中のどこから物事を判断するかを決定する過程で、どのポイントを正義とするのか、ということが本分科会の課題であった。議論は常にそのマイノリティーの声を活かすこと、つまり、マイノリティーの権利を優先することが正義か、というポイントから出発する。

その中で本分科会は主な課題として LGBT に関する問題に取り組んだ。すべての分科会参加者が、LGBT にマジョリティーと同じ権利を与えることには賛成であったが、議論は常に立ち戻った。な

ぜ今認められていないのか、家族や恋人が LGBT だったとき自分は認めることができるのか、できないとしたらそれはなぜなのか、その価値観はどこで作られるものなのか。そして LGBT をマイノリティーと呼ぶことは果たして正しいのだろうか。それらの答えは、今それぞれの参加者の中にある。それはおそらく全ての人の賛同を得られる答えでも、絶対的な真理でもない。ただひとつの価値観から切り取った恣意的な判断でしかないのだ。しかし、その相対性、不確実性を常に認め、自分に問い改めていく姿勢が何よりも大切なものなのではないかと考える。本分科会参加者全員が会議終了後も継続してその問いを自身に投げかけていくことを期待する。

最後に、フィールドトリップでご協力いただきました、渡辺先生、三浦先生、喜納先生、平野様、そしてご助言いただきましたすべての皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。(井上 聡美)

# 震災復興
## Disaster Response

■分科会メンバー
竹内智洋 *（日本側実行委員長）
櫻井千浪（科学・技術の発展と倫理の再考）
伊藤実梨（安全保障と日米）
石川陽平（文化と環境問題）
佐々木いくえ（差別から考える平等）
Dan Jodarski*（米国側実行委員長）
Danielle Wilson（差別から考える平等）
Emma Tome（グローバル化と世界システム）
Collin Cowdery（変わりゆく社会とメディア）
Zachary Callaghan（歴史認識問題と国際関係）
(* は分科会リーダー)

■分科会概要

2011 年 3 月 11 日、マグニチュード 9 の大地震と 30 メートルを超える津波が東日本を襲った。16,000 人近くの死者と 4,000 人以上の行方不明者を出したこの大惨事の被害総額は 25 兆円にものぼると言われ、復興までには長年に及ぶ国をあげた支援が必要となる。またこうした未曾有の事態に対し、国境を超えた支援を継続することが強固な国家間関係を構築するためにも重要となるだろう。

第 63 回日米学生会議では東日本大震災を受け、実行委員長 2 名と代表学生 8 名により震災復興分科会を結成し、この震災に対する両政府の対応について考えた。それぞれの分科会の代表者により構成されたこの分科会は、会議中の自由時間や移動時間など限られた時間の中で進められ、3 月 11 日以降行われたあらゆる支援についての認識を深めると共に、何が今後必要となるのか議論した。

分科会として話し合った成果は、オバマ大統領と野田佳彦内閣総理大臣宛の手紙にまとめ、会議後両者に送付された。

■手紙概要

震災復興分科会が１ヵ月の議論の末に書き上げた手紙は被災時に日米両国が協力することの重要性を述べると共に、東日本大震災の復興支援をする上で改善すべき２つのポイントを両国の政府代表者に提示している。

１つ目は、被災者を精神的にサポートすることの重要性である。被災した分科会メンバーの証言から現在は仮設住宅や瓦礫撤去に力が注がれているものの、被災者の精神的なサポートが欠如していることが明確になった。目に見える復興も必要だが、それと同時に、目に見えない傷を癒す試みが不可欠であると考えた。またこの点は、被災した子供を米軍基地に招き、ホームステイの機会を設けるなど、国境を越えた援助が大いに意味を持つと考える。

２つ目は、政府が信頼できる情報を迅速に伝えることである。震災後、異なる情報が錯綜したことで被災地の状況を正確に把握することが困難となり問題視された。特に、被災者支援には、リアルタイムで被災地がどのような状況なのか、また何が必要とされているのかを発信し続けることが有用である。そのために我々は、オンラインデータベースを日米政府間で作成し、共有することで、的確なサポートを円滑に提供できるようにする情報システムの構築を提案した。

震災は思わぬ時に思わぬ場所で発生し、いつ日本やアメリカで大きな被害を生むかわからない。震災が予測できないものであるからこそ、我々は以下の手紙を通し、日米政府が強固な関係を築き、「もしもの場合」に備えることを訴えた。

■手紙原文

Dear Mr. President Barack Obama and Mr. Prime Minister Yoshihiko Noda,

On March 11th, the Great Tohoku Earthquake and subsequent nuclear incident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant shook not only the nation of Japan, but also the hearts and minds of people all over the world. The emotional aftershocks of this disaster are still affecting Japan and are being felt throughout the global community. We, the representatives of the 63rd Japan-America Student Conference (JASC), would like to extend a message from the entire delegation of 71 students in response to this urgent situation.

JASC, first held in 1934, is an annual student-run conference that promotes international cooperation and strengthens the relationship between Japan and the United States. Despite challenges and fears rising in the wake of the disaster, the delegation of the 63rd JASC has spent a month in Japan discussing significant issues and striving for friendship and mutual understanding. This year, the delegates of the 63rd JASC have created a special roundtable to reflect and comment upon this disaster from a student's perspective. Student voices are especially significant in this time of recovery because our unrelenting curiosity helps provide a less biased understanding of the complex issues surrounding this disaster. Furthermore, we offer a creative vision for the future, rather than simply settling for damage control and the status quo. The full impacts of the nuclear disaster are ongoing, and not fully understood. The timescale of recovery may extend beyond our lifetimes. We represent the voice of the future and we care deeply about that future. The following are the comments and suggestions crafted by the Disaster Relief Roundtable of the 63rd JASC, and represent

the insights of the entire delegation.

The bilateral response to the March 11th disaster demonstrated strong solidarity between Japan and the U.S. The U.S. Marine Corps' "Operation Tomodachi" provided much needed disaster relief almost immediately after the catastrophe. In addition, financial assistance has been strong from the U.S. Many of our own American delegates of the 63rd JASC organized and/or participated in fundraising efforts at their universities. These efforts have had a positive impact and have helped move Japan towards recovery.

However, we feel there are lessons to be learned from the bilateral response to the Great Tohoku Earthquake and that certain areas of the bilateral response could be improved on.

The first such area is emotional support for victims of disaster. We believe that reconstruction must happen in both homes and hearts. Due to the strong, multi-faceted relationship between Japan and the United States, the U.S. is in a unique position to provide emotional aid during the long recovery process. An idea for a program that would leverage this strong relationship in order to address the need for emotional support of victims would be to have the governments of Japan and the United States work together to facilitate an exchange program for victims of disasters, particularly young people in regions exposed to radiation.

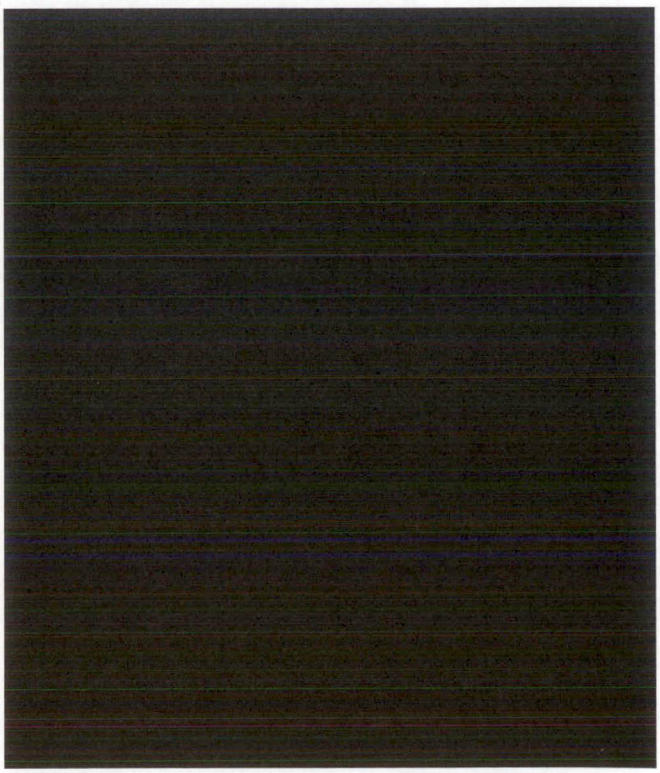
The second area of disaster response we feel could be improved upon is the spread of information both in the short-term and long-term following a disaster. In times of disaster, information should be communicated reliably, accurately and quickly. In order to accomplish this, there should be a centralized source that makes such information easily accessible. Also, information becomes much more valuable when an outlet is provided to turn awareness into action. One specific program we believe could provide improvement in both of these areas would be for the governments of Japan and the United States to facilitate the creation of an online, navigable database of disasters. This database would highlight the current needs for disaster relief and would make government and nongovernment programs more accessible. Seekers of information would have a way to turn awareness into action, not only for Japan, but for future disasters as well.

As student delegates of JASC, we are not currently in a position to realistically make our suggestions into changes ourselves. We instead request that those presently in a position to make a difference listen to our voices and make improvements in disaster response. During JASC, we have built a close relationship between Japanese and American people. We hope that our countries continue to foster this close relationship, and work together in solidarity far into the future especially in times of great need.

Sincerely,
The 63rd Japan-America Student Conference
Disaster Relief Roundtable

Ikue Sasaki, Collin Cowdery, Yohei Ishikawa, Emma Tome, Minori Ito, Danielle Wilson, Chinami Sakuri, Zachary Callaghan, Toshi Takeuchi, and Dan Jodarski

# 第 5 章
## 参加者の声



阿部　彩織

日米学生会議での日々は、未知の刺激にあふれていた。留学等の経験がない私にとって、アメデリ達は人生初の外国人の友達となった。始めは彼らの話す英語は半分程しか理解できず、焦りともどかしい思いばかりが募った。彼らのことを知りたい一心でしばらくは全身を耳にすることに徹し、会議も中盤にさしかかったころ、やっと議論に交われるようになった。そしてファイナルフォーラムの前日、不安になっていた私を励まし、真夜中に発表の練習に付き合ってくれたアメデリたち。根拠のない自信のようなものに後押しされて上った演台では、10人で作り上げた分科会のcontextのなかに見出した自分の立ち位置から、4ヶ月の総まとめができたように思う。

アメリカ側の視点が加わることで、global contextのなかの日本をとらえ、新たな面を発見することができた。折に触れて感じた日本の人々のあたたかさや、清水の舞台から眺める京の街並みの美しさ、そして日常の東京の風景でさえ、アメデリに紹介しようと意気込む私の目には、いつも以上に活気のあふれた別の街のように映った。隣にはいつも、親身に相談できる仲間、気後れすることなしに夢を語り合える仲間がいて、不安は次のステップへの原動力へ、漠然と思い描いていた夢は自分の将来像へと変えていくことができた。

日米学生会議を終えたいま、自分自身が大きく変われたという印象までは持ち切れずにいる。日米学生会議での一瞬一瞬において全力投球できたかと問いを立てると、後悔すら残るところだ。しかしこの1カ月間、70人のJASCer達からたくさんの刺激を受けながら、新たな一日一日を積み重ねてきた。8月21日、日米学生会議での日々は終わってしまったが、私の人生にとって、それは始まりの日であったかもしれない。この経験をどのように活かしていくか模索を続けることで、日米学生会議を真の“Life changing experience”へと近づけていきたいと思う。

最後に、JASCerのみんなと、震災後様々な活動の自粛が相次ぐなか日米学生会議を支えて下さった全ての方々に心より感謝したい。

有川　慧

「たった約1ヶ月の学生会議で、何ができるのか。」これは、第62回日米学生会議に参加してから、常に私に付き纏っていた疑問である。実行委員として会議の運営側に回り、さらに東日本大震災の影響を受け、多大な費用を掛けて例年同様に会議を開催することの意義について何度も考えさせられた。

第63回日米学生会議における「make a difference」という言葉は、会議での参加者内外の交流が互いの見解に変化を与え、その一つ一つの積み重ねが人々の価値観に共鳴した時に、世界に変化が生まれることを意味している。本会議では、約70名の思想も価値観も異なる学生が一つの場所に集い、互いのアイデアを衝突させ、悩み、葛藤し、彼らなりの結論を導いて行く。普通に過ごしていれば出会うこともないし、話すこともない学生と約1ヶ月間共同生活を行い、今まで議論し尽くされた“ように見える”様々な問題について、もう一度身を寄せて考える。それが、今まで物事を選択的にしか見てこなかった自分自身のフィルターを取り外す機会になる。

私の分科会では、会議前の期待通りに一直線に事が運ばず、切歯扼腕した参加者が多かった。分科会全体で一つの成果を創出する時、全員の意見を反映させることは難しく、妥協は付き物である。嘗てから熱意を持って取組んでいたものが切り捨てられた時、それを受け止める覚悟があるか。全てを切り捨てるのではなく、新しい物事に真摯に取り組み、考え抜くガッツがあるか。本会議を通して、参加者は様々な困難に遭遇し、互いに支え合いながら、それらを乗り越えて成長していった。

一人一人の参加者にもたらされた変化が世界の変化の種となるよう、我々は会議後もまた、努力を惜しまず挑戦し続けていく必要があるだろう。

最後に、本会議開催に多大なるご協力を賜り、運営にご指導いただいた全ての関係者の皆様に感謝申し上げたい。

ます。日米学生会議で議論したことを生かして、一端でもいいから担っていき、JASCer としての責務を果たしていきたいです。

五十嵐　淳

東日本大震災後にも関わらず、社会問題について日米の学生と真剣に話し合う機会に僕は恵まれることができました。日米学生会議関係各位に深く感謝しております。中身の濃い本会議の中でも、個人的に一番印象に残っているのが初の試みだった日中学生会議との議論です。グローバル化・ソフトパワー・安全保障・環境などについて、日米中の学生が語り合いました。中国の軍事力増強について透明性がないから、日本人は中国の覇権主義を恐れていると僕は主張しました。すると、中国人学生は、中国政府は今まで外国で戦争を行なったことがなく、「他の国」を侵略することありえないと。しかし、彼らの「他の国」の中に、台湾やチベットは入っていないではないかと自分とアメリカの学生は指摘をしました。中国の学生は、それらは中国に含まれていると頑なに主張しました。これぞ、歴史認識問題であり、いかに解決していくかを、僕は「歴史認識問題と国際関係」分科会にて、この１ヵ月間、考え抜きました。分科会として提案した解決の方向性として、独仏共同の歴史研究のように、日中韓でも共同で歴史研究をし、共同の歴史教科書を作り、教育を通して、人々の認識を正し、問題の解決を図るというものです。実はだいぶ民間ベースでは、こういった共同研究は進んでいるようです。後は、政府の決断のみです。国家はどこまで譲歩しうるのでしょうか。同じ国家でも、日本やアメリカは民主主義国家であり、右派や左派が同様に影響を及ぼしあうから、比較的譲歩しやすいです。一方、中国は権威主義国家のため、譲歩すると自らの正当性を否定しかねないから難しいです。そのため、同じ価値を共有する同盟国のそれぞれの若者が国際問題を解決する努力をするから、とりわけ日米学生会議が社会的に意義を持つのだと確信してい

石川　陽平

日米学生会議が始まる前、私は日米学生会議をどのように位置づけるべきなのか迷っていた。始まる前考えた末に出した答えはあったものの、腑に落ちなかった。日米学生会議が創設されて以降日米関係が極度に不安定な時期においては学生会議としての意義は大きかったが、現在の状況で力を持っていない私たち学生にできることはあるのだろうかという、不安にも似た疑問を持っていた。しかし、アメデリとディスカッションを重ねたり自由時間に語り合ったりするうちにその疑問は次第になくなった。

まず、学生として会議を行う意義は本当に大きいと思えた。社会に出れば、どうしても自らの利権の主張が多くなってしまうが、私たちは国境を超えて相手の意見を積極的に聞き入れようとし、思いやり、尊重しあった。このことは学生が最もできる点だと感じた。

JASCer は真に相手を思いやる優しさで満ちていた。英語が苦手な人に対してはアメデリがこまめに解説をし、ジャパデリは日本の文化を紹介し、疲れた顔をしている人に対しては皆が Are you OK? と心配し声を掛け合った。お互いの肩をもみ合いながら労をねぎらう姿もよく見られた。１ヶ月という期間、苦楽を共にしたことで、家族と呼べるほどの関係が築かれた。71 人という人数は世界から見ればちっぽけな人数かもしれないが、その交流の深さは日米や世界を繋ぐことができる深さだと確信した。

私自身、このような素晴らしい環境のなかでお互いの視点や夢の共有をした時間は大変貴重であった。医学部というクローズな世界に生きていた私に世界の広さや可能性を見せてくれた。各方面の世界の動きをデリの口から聞き、会議中各地で様々な体験したことで、大海原に押し放たれた

かの如く世界観を広げることができた。本会議終了後も、JASCer と講演を聞きに行くなどしている。

最後になりましたが、アラムナイの方々や協力していただいた方々のお力添えを本会議中ひしひしと感じました。心から感謝申し上げます。

石川　恵

「あなたの日米学生会議での役割はなんですか？」JASC に応募しようと決めたときから、私はこの問いの答えを探していた。本会議を通して私は具体的な二つの役割を見出すことができた。

ひとつは沖縄の学生と参加者をつなぐ役割である。私は第３サイトである沖縄県の大学からの唯一の参加者だった。時には沖縄出身ではない私にできることは何だろうかと悩むこともあったが、沖縄のことをもっとよく知って考えて欲しいという強い気持ちから、沖縄の現状を学生の視点から参加者に伝え、県内学生と共に沖縄の将来について考えるという役割を担うことができた。

もうひとつは自分の意見を伝えるという役割である。心配していた英語は本会議中も大きな悩みとなった。さらに私が所属した分科会が選んだ LGBT というトピックに関しては講演会に行った経験はあるものの、自分自身の問題として考えることを避けてきてしまっていた。分科会での議論そのものが新しい知識であり貴重な経験だった。そのような中で英語での議論を理解して自分の意見を言うことはとても難しかった。しかし最後には、分科会の仲間に助けられながら、なんとか自分の意見を伝えることができた。そこで私が感じたのは、どんな困難があろうとも自分の意見を伝えることがひとりの参加者として非常に重要な役割であるということだ。今、英語で悩んでいる人がいたら迷わず応募して欲しい。大切なのは「伝えたいこと」があるかどうかだから。

JASC に応募したとき、私はなにか「生きている」実感を得られることを求めていた。JASC での毎日はまさに「生きている」、そんな実感と役割をくれた。そして 70 人の大切な仲間と多くの貴重な経験をくれた。このような機会を下さった全ての関係者の方々、そして 第 63 回の皆に本当に感謝している。

この経験は次へ進むステップだと思う。１人の JASCer として、また新たな役割を果たすべく、これからも一歩ずつ確実に進み続けたい。

伊藤　あゆみ

日米学生会議。この名前をみて、背伸びした学生が偉そうに社会問題について議論する場をイメージする方もいるかもしれない。実は私も最初はそう思っていたが、それは完全に間違っていた。

日米学生会議では、様々なバックグラウンドをもった学生全員が納得するプレゼンテーション（または活動）をつくることが求められる。その際には、わからないことはわからないと問い続け、相手の意見を丁寧に聞き、なぜそう考えたかというイメージを共有し、理解しようとすることが不可欠であった。表面的に意見を認識するのではなく、きちんと相手の意見を理解しようとすることは、言語の問題もあり簡単なことではない。しかし、そのプロセスを丹念に行うことで皆が同じ議論の土俵にたつことができ、問題の複雑性を発見し、新たな解決の糸口を見いだすことができた。そのプロセスは、まさに、テーマ「Qquestion, Engage, Build: Collaborative Effort to Make a Difference」そのものであり、本当に刺激的で楽しかった。身の丈に合わないような宙に浮いた議論をしていては、プレゼンテーションは完成しない。日米学生会議は、自分たちの視点や身近な疑問から問題について話し合い、複雑性を理解しようとする試みであった。

今回の日米学生会議で、私は相手の声を聞き、心から理解することの重要性を学んだ。特に沖縄サイトで歴史認識問題や基地問題に取り組んだ際には、各アクターが自分の意見や思いの主張に終始する、または立場上の制約からそうせざるを得ないあまり、相手と十分な対話をすることができ

ず、解決への道が閉ざされてしまっている様子を垣間見た。

日米学生会議の意義は、このような問題において、大人よりも自由な立場から相手を理解し、解決策を提供し、新たな視点から問題提起する機会を提供することにある。経験は社会で活躍する大人には劣るかもしれない。しかし、社会に出る前に学生がこのような機会をもつことは、はじまりは小さくとも、いずれ確実に社会全体の未来に良い影響を与えるものとなると考える。

伊藤　実梨

事前活動から本会議まで JASC での 4 カ月。私にとって JASC とは何だったのか。完全な答えは未だ見つけられないが少なくとも言えるのは、世の中の問題、参加者をはじめとする他者、そして自分自身と真摯に「向き合う」4 カ月であったことだ。

まず分科会を通し安全保障と向き合った。それまでただ机上の学問分野として触れていた安全保障を現実の問題として目の当たりにし多くの新たな視点に出会いながら深く学び議論した。多様な分科会メンバーと共に、時に困難に直面しながらも現状を見つめることを止めず熱く真剣に議論した経験は何にも代えがたい。

また 70 人の参加者と共に語り向き合った。非現実とも言える日々が続き真剣な議論から些細な会話まで全てが刺激的で楽しかった。彼らは一生の友人かつ切磋琢磨出来るライバルであり、今後も私は彼らの挑戦や言葉に関接的直接的に励まされ背中を押されるだろう。

そして彼らの多様性や個性に囲まれ組織の一員としての自分という意識が強まると同時に、様々な経験や挑戦を通し自分の弱みや強みを知り「分科会、JASC、あるいは社会における自分の役割や貢献出来ることとは何か」を大いに考えさせられ、自分自身と真剣に向き合うきっかけを得た。この問いへの答えは JASC の経験を礎に今後も探し続けていきたい。

心から辛かった時間や楽しかった時間全てを含め数え切れない程の素晴らしい経験をした。そして JASC で過ごした 4 カ月を経て少し「成長した」と言える自分と、その一方で「これからが勝負だ」と更なる挑戦へ立ち向わずにいられない自分が、今ここにいる。かけがえのない 4 カ月を可能にして下さった全ての方に心から感謝を伝えたい。本当にありがとうございました。

井上　聡美

昨年、第 62 回日米学生会議の報告書に載せた参加者の声を振り返る。そこで記した私の気づきは、自分を見つめるためはまず他者を見つめる必要がある、ということだった。JASC という場は一ヵ月をかけて参加者同士が互いを見つめあい学びあう場であるということ、そしてそういった JASC の場ではありのままの自分自身でいることよりも、自分自身にできる役割を探し、そのポジションに自分を当てはめることの方が重要であるということを学んだ。もちろんありのままの自分にできることはたくさんあるが、「適材適所」という言葉が示すようにその中から自分に一番合うポジションかつ JASC に一番必要なポジションを見つけ、その自分を演じることで多くの他の参加者に影響を与えることができる、そう感じた。

それから一年、日米学生会議という団体に必要な役割のうち、私が担うことができるのはどのような役割なのか、そしてそれが他の参加者にどのような影響を与えられるのか考え続けた。そして日米学生会議に参加する他者という存在の目線を意識して私を演じる中で、さらにその私の中に私自身に対する目線があることに気がついた。つまり、他者を意識してはまった役割に居続けることは同時に私を見つめることでもあるということだ。私が本当にできることや私が本当はどんな存在でありたいと願っているのかという、非常に基本的な私自身への問いかけの答えが見えるようになったのである。

第 62 回日米学生会議は私にとって自分を通し

て他者を見つめる場であった。そして第63回日米学生会議は他者を通して自分を見つめる場へと変化した。そして今、その目線は私自身へ戻ってきた。これからも私の私自身との付き合いは続いていく。むしろやっとスタート地点にたった気さえしている。JASCで得た私自身への視点と共に、私は私自身との人生の航海を続けていきたい。

上江洲　仁子

本当にあっという間だった。私にとって、JASCとは何だったのだろうか。一言で言うと、私らしさに気づかせてくれた。大学に入り、その生活に慣れることで精一杯で、自分がやりたいことや本気になれる場所が見つからずにいた。そんな中、私はJASCと運命の出会いをした。それから、奇跡的に合格を果たし、待ちに待った春合宿の日が来た。初めて会った仲間、一人ひとりが素敵で、心から尊敬した。その一方で、私は緊張のあまり、自分を出せずにいた。そんな心配の中、しだいに仲良くなるにつれて、自然と自分を出せるようになった。いよいよ本会議。何よりも英語を使うのが怖かった。アメデリに始めて会った時、緊張のあまり「Hello」さえ言えなかった。そしてRTでは、議論に追いつけずに悩んでいた。これは私だけの問題、熱い議論を続けさせることが、グループへの最大の貢献であると思っていた。しかしそれはただ、逃げていただけであった。悩みが次の失敗を招き、度重なる失敗をどうにかしたくて、その思いが強くなりすぎて、体調をくずすこともあった。JASCに貢献できないだけではなく、迷惑をかけてしまう。本当に私はここにいていいのだろうか。そんな時、「君がいないとJASCは(私も)あかん。」というメールが届いた。それで私は目が覚めた。私を必要とする人がいる。諦めなければ、何か変えられる。それから、自分なりに問題解決に向けて、全力で頑張った。あの時のメールのように、何気ない一言が私を助けてくれた。そして諦めずに頑張ったことで、私だけでなく、周りも変わった。自分の実力のなさを認めることと諦めないことはとても苦しかった。でもどんなに大きい壁でも、諦めず立ち向かえば、仲間と一緒に乗り越えられることができるということをJASCで学んだ。JASCに携わった一人一人に心から感謝したい。

この経験を生かし、仲間を大切に、どんなことがあっても諦めず、私なりに、少しでも誰かに勇気を与えられる人になりたい。

奥谷　聡子

私は去る一年間、実行委員として夏の本会議に向けて仕事に励んできました。本会議が始まるまでの道程は長いようで短く、それに比べると夏の約1ヶ月は夢のように瞬く間に過ぎてしまったように感じます。夢から覚めた今、第63回日米学生会議を無事終えることができた安心感と同時に、この一年間の思い出が次々と脳裏を過り、毎週の定例会や二週間に一度のアメリカ側実行委員会とのSkypeミーティングなど全てが恋しく、現実に引き戻されるような少し切ない想いでいます。今年度は、選考期間中に東日本大震災が発生し、会議開催も一時危ぶまれましたが、余震が続く中で選考試験を行いました。本会議初日にはアメリカ側代表団は豪雨のためバスが塞き止められるなど、数々の天災を乗り越えて会議はようやく開幕しました。参加者としての会議と、実行委員として臨んだ本年度会議は全く異なる経験でした。各サイトのプログラムは全て、意図的に実行委員により組み込まれています。其々のプログラム後に参加者から良いフィードバックを得られた時や、彼らの楽しんでいる姿を見た時に実行委員として一番の嬉しさを感じました。分科会でも同様に、活発に議論が交わされている時や価値観、意見の違いに悩み、もがき、一つずつ山を越えて変化していくグループのメンバーを見た時はとても嬉しかったです。この反面、実行委員としての挑戦も多々ありました。各サイトでは、水不足、熱中症、食文化の違いなど様々な想定外の問題が発生し、その都度、冷静且つ迅速な対応を求めら

れました。71名という大規模な集団を学生が全て運営することには重大な責任が伴います。しかし、そこには主催団体、財団、企業、個人の手厚い支援があることを常に認識させられました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

最後に、今回出逢った70名の国境を越えた友人、特に15名の実行委員ファミリーに向けて「ありがとう」の言葉を贈りたいと思います。

尾崎　裕哉

別れの日に一人ひとりの目から涙がこぼれるのを見て、日米学生会議の成功を実感した。私が日米学生会議で心から達成したかったものが分かった瞬間だった。不安と期待が渦巻く心を抱えながら過ごした実行委員としての一年間はこの瞬間の為にあったのだと言える。

「知ることから創ることへ」という理念を掲げ活動してきたこの一年間、私は様々なことを学べた。私にとってこの理念の本質とは「創ることで創ることを知る」ことにある。理念の決定、広報、財務活動、選考、コンテンツ作成など、日米学生会議の一つ一つのピースを合わせて行く中で改めて「共に創る」ことを知った。それは、時には辛いプロセスだった。しかし、辛いことを感じた分だけ楽しさが生まれ、仲間と過ごした一瞬一瞬がより深く心に刻まれた。

なんといっても、本年度の会議には特別な意味がある。東日本大震災によって一度は開催が危ぶまれたものの、大勢の方々の支援や実行委員の努力により本年度も無事開催することができたことである。その想いを参加者は理解してくれたと思う。本年度だからこそ開催するべきJASCを開催し、今年だから実現できた数々のイベントが各参加者にLife Changing Experienceを届けることができたと自負している。71人分の世界を変えることが出来ただろう。

この夏を共に過ごした仲間たちは日米学生会議という舞台の上での自分達に出来ることを探し、それぞれが自分らしさを精一杯演じてくれた。そして今、日米学生会議を糧に旅立とうとするもの、日米学生会議の伝統を引き継ぐもの、それぞれが選んだ道を歩もうとしている。日米学生会議は将来にどのような影響をもたらせるのかは正直分からない。でも、間違いなく二年前に日米学生会議と出会っていなければ、今の私はいなかったと思う。そして、私たちを支えて下さった方々の想いを胸に、この先出会う全ての人達に日米学生会議で得た学びを伝えて行きたい。改めて日米学生会議に関わる全ての方々に感謝の意を表したい。

小田　康弘

私が日米学生会議に出会ったのは高校二年生の夏でした。当時広島学院に通っていた私は、第59回会議広島サイトに現地高校生として一部参加させていただいたのです。生き生きとした大学生の先輩方、活気に満ちた議論。その空間に高校生の私は大いに刺激され、「大学生になったら必ず日米学生会議に応募したい」という気持ちを抱くに至りました。その後大学に入学し、三年生になり、4年越しに再びいただいた日米学生会議とのご縁が今年参加した第63回会議でした。

会議全体を振り返ると、夏の本会議に先立って行った広島研修と防衛大学校研修が鮮やかな思い出として蘇ります。広島研修は、仲間と一緒にどうすれば広島のことがよりよく伝わる研修を作れるかを考えた、熱い準備期間がありました。防衛大学校研修は、日本に自分と同じ年齢の「軍人」がいることを知って「安全が保障されるということ」を根本から考え直す機会となりました。共にかけがえのない経験です。

全ての事前学習を踏まえ、いよいよだと臨んだ夏の本会議はいわば「本番」です。日本人とアメリカ人総勢71名の中、持てる全ての力を注ぎました。新潟、京都/滋賀、沖縄、東京の各地各場所で参加した一つ一つのプログラム。実現するために、どれほど多くの方がご支援下さったことか。どのプログラムに参加した時も常に感じた感謝の気持ちは今でも言葉で表し切れません。特に本年

度会議は東日本大震災直後の開催であり、経済的にもその他の面でも皆様大変な中で頂いた重みのあるご支援だと感じています。

私は日米学生会議を通して、今後直近の目標を「自分が人生を通して、社会において社会のためにしたいことは何か、具体的に考える」と据えました。日米学生会議をご支援下さった方々の私たちへの期待を忘れず、応援して良かったと思って頂けるよう努めます。

最後に改めて、ご支援を賜った皆様、全ての会議参加者を含め、日米学生会議に関わって下さった全ての方々に御礼申し上げ、私の感想とさせていただきます。

川邊　拓也

山のように積まれた、思い出の写真を見ながら、「参加者の声」を書いている。静止画であるにも関わらず、私にはそれらが動いて見える。皆の笑い声、考え抜く表情、癖や仕草、全てを鮮明に思い出すことが出来る。それほどこの一夏の経験は、私の胸に深く、色濃く刻みついている。

「何か1つのことを本気でやり切ったと言える自信が欲しい。」私がJASCに応募した動機である。中学、高校時代は柔道に全身全霊で打ち込んできた。しかし、私が大学で「やり切った」と言えるものは何一つ無かった。原因は明白であった。自分の興味に基づく、ありとあらゆる活動に手を出しすぎたためだ。全て、私がやりたい活動であったにも関わらず、タスクが余りにも多すぎたために、いつしかそれらは私の中で“義務化”されていた。JASCを“義務”として終わらせたくなかった私は、直前合宿のリフレクションで「1ヶ月全てをJASCのみに捧げ、全力で楽しむ」と誓った。しかし、JASCを「楽しむ」ことと「やり切る」ことを両立させることは予想以上に困難であった。語学堪能、知的好奇心旺盛、才能に満ち溢れ、尚且つ努力することを惜しまない、まさに「自彊不息」という言葉が当てはまるJASCerの中で、自分の役割を見出せず、苦しんだ時期が多かった。JASCでの存在意義を、自問自答し続けた末に気付いたことは、自分の役割が各要所(全体内、RT内、新実行委員内)で変化していることだ。1つの役割に固執せず、必要とされていることに柔軟に対応することもまた、重要な役割であると知った。

本会議を終えた今、「JASCに1ヶ月を捧げ、本当に良かった」と心から言える。第63回日米学生会議に携わり、私を支えて下さった全ての方々に感謝の意を示したい。最後に、私たちの旅は終わった訳ではない。この4ヶ月間はあくまで未来へのきっかけに過ぎないのだ。私たちの旅はこれからも続く。

河村　統治郎

私が、日米学生会議に参加して一番感じたのは、日米学生会議は自分自身と向き合う場であったということです。本会議は、約1ヶ月寝食を共にして、朝から夜中まで何度も何度もディスカッションを繰り返し、相手と真剣に向き合う場でした。その中で、私は言葉の壁、文化の壁を感じ、自分自身と常に向き合っていたと思います。

語学面に関しては、曲がりなりにも出来ると思っていた英会話が上手くできませんでした。少しでも相手の話が早くなると付いていけない、参考資料も難しくて読めないという挫折を味わいました。また、文化の面ではディスカッションに取り組む姿勢の違いから、同じ分科会のメンバーと衝突するといった場面もありました。それだけではありません。ディスカッションを通じて、自分の考えを常に持つこと、自分の考えをまとめること、立場に場所に関係なく自信を持って発言することができていない自分にも気づきました。これらの思いが募り、悔しくて泣くこともありました。

しかし、ただ落ち込むだけでなく、そのような状況でも分科会に貢献できるように自分には何ができるのかも考え、実践することができたと思います。友人たちの手を借りながら、議論の中で分からないところは分かるまで説明をしてもらう、

自分の意見を相手にしっかりと主張する。ファイナルフォーラムに向けて、議論の流れを建設的な方向に持っていく。最後の最後まで自分と向き合い、議論に参加し続けることが出来たのではないかと思っています。

最後に、参加者たちは日本側・アメリカ側に関係なく、本当に全員が素晴らしいです。辛いことも多くありましたが、彼らと１ヶ月を過ごし、友情・ディスカッションを築き上げ、ともに感動しました。最終日に、アメリカ人青年達が空港に向かうバスを見送る際に止まらなかった涙は、この１ヶ月の全てを表していたと思います。参加できて、本当に良かったと思います。

北林　未菜

私は、この会議に参加した71人の中で最年少であった。18歳、高校卒業して４ヶ月、大学生活を始めてから３ヶ月弱の時点でJASCに参加した。春合宿から本会議までの４ヶ月間、自分で変化が起きたのか、終わってからも良く分からなかった。それは、終盤のJASCメールやJASCerと話していたときに、「未菜は、本当に成長して、変わったね。」と言われて初めて意識し始めたことだからだ。まだ自分でも整理できていない部分は多い。

大学二年、大学三年、大学四年、さらには大学院に通っている参加者もいる中で高校を卒業して間もない自分の役割とは何なのか、とずっと考えていた。他の参加者と比べて、若い上にエネルギーに満ちている部分もあれば、同時に幼く感じられているのではないかなどの不安もあった。しかし、自分は、たった４ヶ月でいきなり大学院生並みの知識をつけられるわけでもないし、考え方も急に変わることはない。考え方については、今自分が感じていること、知っていること、それらを応用して分科会活動、他の参加者と接すればよいのではないかと思った。もちろん、自分の中で他の人の意見を聞いているうちに、このような考え方もあるんだ、などの新たな発見もあっておもしろかった。日米学生会議に大学生活の早い時期に参加できて本当にかけがえのない経験をしたと考えている。まだ、自分の中で明確に表すことはできないが、確実に参加する前と後では変わっている。これから大学四年間を歩む上で、どういう風に過ごす・どういう風な人になりたいなどを考える上での重要な基盤となった。

栗原　隆太郎

参加者、実行委員として約一年半に亘って関わってきたJASCとは何だったのだろうか。

この問いを「参加者の声」を書くにあたって自身に問いかけてみたものの、一年半という期間はあまりに長く濃く、幾度試みても纏まらず非常にもどかしい思いを感じた。しかし、そのもどかしさは、JASCがこの約一年半、自分が意識している以上に私の生活の根幹を成すものであったことを教えてくれた。つまり、常に自分の生活の一部として存在していたものを客観視し、「JASCとは何だったのか」という大きな視点が必要な問いに答えるには、私にはもう少し時間と成長が必要なのだ。

上記のような大きな問いには今はまだ答えられないが、JASCが自分にもたらしてくれたものは現時点で強く実感している。

JASCを通して、私は日米のことや他人のことより何より、自分と向き合い、自分を知った。JASCの実行委員としての仕事や参加者との交流を通して、自分の弱さに気付くことが出来た。そしてそんな弱い存在の自分は数多くの人に助けられて生きているということを、単なるclichéとしてでは無く、心から理解することが出来た。

この二つの「気付き」を与えてくれたこと。それは今後の人生を送る上で私の進む道程を大きく変化させることを確信している。そのような変化を多くの参加者に起こすエネルギーを持ったこのJASCという会議の何たるかを理解するには、まだまだ長い時間がかかりそうである。未来のある一点でJASCを振り返った時に、その問いへの答

えを再考することが楽しみであり、そこでしっかりとした答えを出すためにも私自身成長し続けたい。その決意の思いと、客観視できない程JASCに夢中にさせてくれた友人達、そして会議の開催を可能にして下さった全ての人々に感謝の意を表し私の「参加者の声」としたい。本当にどうもありがとうございました。

小池　あずさ

「第63回日米学生会議、どうだった?」—8月21日、約1ヶ月に亘る会議の幕が降りてから、何度となく聞かれる質問である。シンプルに感想を言うならば、楽しかった、つらかった、勉強になった—こんな言葉を並べればいいのかもしれない。しかし、私には1ヶ月のJASC本会議、5月の春合宿から始まる4ヵ月のJASC体験を、どのような言葉を用いれば形容できるのかわからないし、もしかしたらそれを形容できる言葉などないのかもしれない。ただ、一つ確かなのは、私にとってのJASCは、2011年の8月21日に『終了』したものではなく、新しい『スタート』であったということだ。その『スタート』をきらせてくれたのはJASCを通して得た『高め合える仲間』と『支え合える仲間』である。常に挑戦し、質問を投げ、最高を求め苦しみ、泣きながら心を打ち明け、真剣に相手を理解して支え合った大切な仲間—JASCが私にくれたものは数えきれないし、今後の人生で段々と気づくものは沢山あるだろう。けれど、これからの私の人生を通して私の芯にあるのはJASCerとしての誇りと、今も未来もずっと全力で走り続けるのであろう、高め合い、支え合える『仲間』だと思う。ただひとつ言っておかなければいけないのは、JASCで私が作り上げたものは『完璧ではなかった』ということである。JASC本会議を終えた私の前にあるのは巨大な課題の山である。まだ、なにも終わってはいないのだ。JASCにおいてはしばしば、『Life Changing Experience』という言葉が使われる。今ならこれが、JASC自体が人生を変えてくれるのではなく、JASCにおいて気づいた自分の不完全さや悔しさ、そして今も走り続ける仲間に負けられないという意地が今後の人生を通して自分を駆り立て続けるからこそ、自分の手で人生を変えていくのだということがわかる。まだ何も終わってはいない。すべては始まったばかりだ。『Once a JASCer, Forever a JASCer.』。私にこのような貴重な機会を与えてくださった皆様、心からお礼を申し上げます。

小林　歩

自分が届けたいのはどんな「声」だろうか?「誰」に届けたいのだろうか?あらためて考えると、なかなか難しい。濃密だった一ヵ月、それを言葉で説明するのも難しい。友達に「お帰り。どうだった一ヶ月?」と聞かれた時でさえ、「伝えたい」という気持ちと、「簡単に分かった気になるなよな」という気持ちが交錯するのに・・・と、正直な戸惑いを吐露した勢いで、「正直な声」を書いてみる。

今、自分の頭の中を占めているのは、仲間のことだ。JASC中、何度も、皆の英語、ユーモア、知識に、凄ぇと唸り、同時に、羨ましいと思った。でも実は、一番尊敬したのは、自分と同じくらい英語が出来なくて、自分よりも分科会の知識が少なかった、同じ分科会の梓だ。

京都での中間報告会。前日の深夜、梓とプレゼンの改善案を思いついて、当日の朝に他のメンバーに提案することにした。でも、当日の朝、自分は、担当の原稿が書き終わらず、提案することを忘れ、独りで作業に没頭していた。ふと気がつくと、梓がメンバーのところを周って、改善案を話してくれていた。その時、同じくらい余裕がないはずなのに、チームのために行動している梓と、自分のために行動している自分の差に、ガツンと頭を殴られた。

尊敬だけでなく、仲間にがっかりする場面もあった。首里城を訪れた際、大半のJASCerが展示そっちのけで記念写真ばっかり撮っているよう

に見えた。内心、「写真撮りに来た訳じゃないでしょ。『沖縄の文化を知りたい』って口だけじゃん。」と思った。でも、いつもなら一人で醒めて、心の中にしまってしまう場面だったけど、今回は違った。その気持ちを伝えたらちゃんと受け止めてくれる仲間がいた。RT リーダーの隆太郎と話し合ってみて、その中で自分なりの解決策を見出すことができた。

終了後も、JASCer に対する 50% の尊敬と 30% のジェラシーと 20% の「こんなもんじゃないだろ」が、自分の原動力になっている。みんなありがとう。

## 櫻井　千浪

第 63 回日米学生会議を振り返って思うところは主に 2 つあります。英語と分科会についてです。私は、伝えたいことすべてをすぐに正しい英語に直せるほどの英語力はありません。本会議の最初の頃は緊張もあって、分科会の英語での議論についていけませんでした。自分の英語力のせいで分科会の議論を止めてしまうのが嫌で、C(Clarify: 簡単な英語表現に言い換えてほしい時のサイン) や T(Translate: 日本語で通訳してほしい時のサイン) を使うのをためらってしまい、今ではそれを後悔しています。議論を理解できなかった悔しさと、理解していれば出てきたかもしれない意見を出せなかった悔しさを感じています。しかし、本会議中盤からは、分科会の日本側参加者たちの励ましやアメリカ側参加者の優しい心遣いのお陰で、分からないときには C( 時々 T) を使えるようになりました。そうすると自然と自分の意見も出てくるようになり、分科会に貢献できたと思います。この会議を通して、英語力も伸びましたし、英語が分からなくても質問して理解することが大切であることを学びました。これからもっと精進して英語力を伸ばします。

次に、分科会で学んだことです。それは、他人の意見を尊重し、一方で、自分の意見も述べて、分科会全体として高めあっていく姿勢が、グループで実りある議論をするにはとても重要だということです。自分の意見を主張することに必死になるあまり自分と異なる意見を真剣に聞かないということは、意図しないうちに起こってしまいます。

しかし、自分がグループ内で一番素晴らしい意見を持っている保証などないですし、それまで気付かなかった大切な視点を他の人の意見から得ることができます。私の分科会のメンバーは、それぞれが素晴らしい意見を持っているのに加え、他の人の意見を聞き理解し尊重する姿勢を持っていました。その姿勢の大切さを実感できたことは、今後の私にとって大変良いことだったと思います。

## 佐々木　いくえ

今年三月、一次審査合格に喜んでいた日常生活のど真ん中を、大震災は急に襲ってきた。震災後は一日を無事に生きるのが必死で、まるで戦後のように自衛隊の配給に並ぶ日々だったが、全国・全世界から駆けつけてくれた人々の姿に、とても救われた。

開催地である新潟・京都 / 滋賀・沖縄・東京のどこを訪れても、「大震災復興のために何かしたい。」という声と、被災地の現状に胸を痛めてくださる多くの人々と出会った。特に新潟県山古志村を訪れた経験は印象深い。現在山古志村は、当時の状況・防災の重要性・自然災害からの復興を人々に伝えている。山古志村訪問はとても辛く感じる一方で、「いつか、自分の故郷も山古志村のように生活を取り戻せるのではないか。」と未来の姿を見せて頂いたようだった。

このように、支援して下さった方々に直接お礼を伝えられたことは、人を助けるのは優れた技術などではなく、他人が他人を思いやるその心であり、此度のような試練であっても、乗り越えるための鍵は人間の絆であると、強く信じることができた。

日米学生会議は未曽有の大震災の中、強い絆に守られ最後まで無事に終えることができた。この

意義は非常に大きいと石巻市から参加した者として感じている。日本には今も希望があること、災害は人々の生きようとする心まで奪うことはできないことを実証できたのではないかと思う。

日米学生会議参加にあたり、私は本当に多くの支援と、優しく心強い励ましを頂いた。日米の仲間に支えられながら、大震災から半年間という時期を、私は諦めずに希望をもって乗り越えることができた。日米学生会議を御支援して下さった皆様方に、皆様から助けて頂いたおかげで、立ち直ることができたことを心から感謝致します。

また70人との一ヶ月に亘る共同生活は一日一日が大切で、かけがえのない思い出となった。会議前は一人でいる時間や睡眠時間が少なくなることが心配だったが、会議中はどんなに疲れていても、他の参加者と話す時間が何よりも貴重だと感じた。分科会外でもJASCerらしく時事問題、音楽、大学や文化の事など多くの話題について話し合うことができた。会議で過ごした一ヶ月は今までで一番充実した、決して忘れられないものとなった。会議は終わったがこれから自分が何をするかが重要なので気持ちを新たにしていきたいと思う。

### 佐藤　安里紗

日米学生会議を終えた今、自分の気持ちを一言で言い表すことは到底できない。様々な感情が入り交じって、本会議終了後約一週間が経ったが、会議が行われた一ヶ月の出来事をまだすべて整理しきれていない。しかし文章にすることで会議全体を客観的に振り返ることができるだろう。

会議が始まる前、私は不安と緊張に押しつぶされそうだった。というのは5月の春合宿以降日本側でできる限りの準備はしてきたが、十分ではない、あるいはアメリカ側に受け入れられないのではないかという懸念があったからだ。また、日本側は英語面だけではなく内容面でもアメリカ側に劣るのではという心配があった。実際、会議を終えて、自分にとって問題は英語力よりも発想力や相手に自分の意見を分かってもらえるような表現力だった。私は9月からカナダに留学するが、表現力の強化は留学中の目標の一つになった。分科会では時折、相手の意見を理解するのも、相手に自分の意見を理解してもらうのも難しいと感じた。初めはお互いに理解できないことでストレスがたまり理由も分からなかったが、ある時相手の側に立って説明していないからだと気づいた。相手にどう理解して欲しいかではなく、どのように説明したら相手が理解してくれるかを考えるべきだったのだ。その後は、相手に分かってもらうために我慢強くなることができた。

### 塩原　梓

春合宿の夜、一人ひとりJASCに対する目標を宣言した。私が言った言葉は、「何に対しても自信のない自分から抜け出したい」。

忘れもしないあの日、一通のメールを受け取って、私は第63回日米学生会議に参加できることを知った。楽しみや不安よりも、何かの間違いじゃないかという気持ちの方が強かった。

さて、あのメールを受け取ってから5ヶ月が過ぎようとしている今日。今だって自信なんて持てない自分がいて、私がメンバーとして選ばれたことが正解だったなんて胸を張って言えないわけだけれども。思考に何か変化が生まれていることは確かで。

その変化の原因はJASCer一人ひとりとの出会い。彼らのいろいろな物事や自分の気持ちに対する姿勢を目の当たりにした本会議。思ったことを人に伝えて、その言葉に対する真剣な応答があって。そんな彼らのやりとりは、自分が今までどんなことから逃げてきたのかを気付かせてくれた。私だったら向き合いたくないと言って誤摩化して考えないようにして頭の隅に追いやってしまうような感情に対しても、理由を追求して、その理由が本当に妥当なものなのかを検証して。

何かを感じたときはその自分の感情や考えと真摯に向き合っていかないといけなくて、そのような作業なしには、「なんとなく自信のない自分」

から抜け出すことはできない。そんなことを気付かせてくれたように思う。魅力的に感じる人は自分の考えをしっかり持って、それを伝えることができる。一つひとつの言葉の重みが全然違う。見える風景の重みが違う。過ごす時間の重みが違う。そんな鮮やかな世界で生きてみたいと思った。

自信のなさの理由を、どうしても感じてしまう心と言葉のギャップの原因を、なんとなく掴めたのかもしれなくて、それを確かめるためにこれから頑張ろうと思わせてくれた。そのような機会を与えてくれた全ての人たちに対する感謝の気持ちで一杯です。

### 杉岡　昌太

日米学生会議を通して学んだことは社会に蔓延する様々な問題は単純なものではなく、実際に当事者の声を聞き、そして現場を見ることにより真に理解に近付けるということでした。アメリカ側と日本側の観点を総合することによって、日本の学生だけでは決して生まれないような発想や、議論構築が生まれ、世界観がたった約一ヵ月という限られた期間の中で広がることを肌で感じさせてくれました。学生という位置づけを超え、社会、世界の一員だという意識の下集まった参加者全員が会議においての自分の役割を見つけており、それを実行し、お互いを感化していたと思います。私自身もこの会議を通して、様々な感情や論理、そして思考、価値観と触れ合うことで、これからの未来を見据える大きな先見性を得られたのではないかと自負しています。また、会議の本質として、この場で出会った参加者とは一ヵ月間ただ闇雲に時間を共有したというのではなく、未来永劫に繋がる絆を共に作り上げることに成功したと心の奥底から信じることができます。この絆が今後の将来に最良の影響を大いに与えてくれると確信しており、そして私自身も彼等に良い影響を与えることとなると感じています。今年３月、東日本大震災の発生した日本においてこの会議を継続、実施したことはアメリカ側、日本側参加者にとって以前の会議とは比較できないほど大きな意味を内包しており、それぞれの参加者が今後の課題を見つける機会を得ることができたと思います。この会議運営に協力して下さいました多くの関係者の方々にこの場を御借りして感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。人生においての転機を頂けたことに深く感謝し、これからも努力して参ります。

### 杉山　和

会議中はあまり意識に上ることがなかったが、海外の人々から見ればいまだに安心して日本に渡航することは難しいと思う。そんな中、日本開催の日米学生会議に参加してくれたアメデリ全員の勇気を心から尊敬する。

日米学生会議から学んだことは大きく二つの種類に分けられる。一つはプログラムを通しての知識の習得で、もう一つは他の JASCer との対話から得られたものである。原子力発電所の見学、米軍基地関連施設での説明など日米学生会議のプログラムはどれも普段は経験できない貴重なものばかりだったが、日米両国の参加者との交流はより貴重だったと思う。参加者とコミュニケーションを取るなかで、国によって違う点と変わらない点があることが分かった。言葉や表現方法、習慣が同じでないのは当然であり、会議中もお互いの間にある「違い」を感じることがしばしばあった。しかし、アメデリも同じ人間であることを忘れないようにすれば、話を聞いて何を考えているのか理解できることを学んだ。また、一生懸命英語で話すのを親身になって聴いてくれるアメリカの友人も何人かできた。ジャパデリの友人も含め、かけがえの無い親友がすごく増えた。私は最初 hug をすることに慣れておらず、何のためにするのかもよく分からなかったが、抱擁したときに心臓の鼓動が伝わってきて同じ人間であることを実感し、安心したのを覚えている。

実行委員としてもう一年日米学生会議に関わることが決まってから、自分にとって日米学生会議

がどんな存在なのか考えた。本会議前までは、大学外の活動に参加していることをステータスと考えていて自尊心を満たす存在であったが、今では居場所の一つになった。今楽しみにしているのは、これから共に実行委員として活動するメンバーの新たな側面を発見することと、多くの人々と新たに出会うことである。

### 竹内　智洋

会議継承の意義や実行委員長としての役割をはじめ、この一年は葛藤に続く葛藤だった。実行委員という個性豊かなグループを束ねることもそうだが、東日本大震災が起きた年に大金をいただき会議を運営する意味はどこにあるのか常に考えさせられた。そして、無事本会議の全日程を終えた今、二つの視点を得た気がする。

まずは自分を客観視する視点である。この長い準備期間、実行委員の中で幾度となく意見の対立が起きた。一人ひとりが心から第63回会議を良いものにしたいと思うが故の衝突である。しかし、この様な状況の中でふと自分を客観的に見つめた時、今までになくはっきりと己の弱みを見極めることができた。実行委員長としての1年が自分を一回り成長させてくれた。今後も多くの困難はあるだろうが、この一年で学んだ「辛抱強く、冷静に対応する」ということを常日頃から意識できる人間でありたい。

次に常に感謝の気持ちを持ち活動する視点である。77年にわたり伝統が継承されることは大変難しく、大勢の方々のサポートがあって初めて実現するということをこの一年を通じて、実感した。3月に起きた大震災により会議の存続が危ぶまれる中、今年も開催にこぎつけることができたのは、大勢の方々が日米学生会議を信じ、ご支援して下さったからに他ならない。企業や財団の方々、行政の方々、日米学生会議の先輩方と国際教育振興会の方々など、大勢の皆様のお力添えがあって初めて会議を開催できた。この場を借り、ご協力下さった皆様に心より感謝申し上げたい。

最後に、第63回日米学生会議は「知ることから創ることへ」という理念を掲げ運営された。この一ヵ月間は多くの意味で「知ること」は実現したが、「創ること」は今後追求すべき課題であろう。過去の参加者の間でOnce a JASCer, Always a JASCerと言われるように、私たちは今後もJASCerであり続け、今年度の理念が指し示す「創ること」を未来のリーダーとして追求する責任がある。

未来は私たちにかかっている。頑張ろう。

### 多鹿　ちなみ

3週間と2日という期間を通して、第63回日米学生会議の参加者71名は“JASCer”となれたのだろうか。

5月の頭に行われた春合宿で36人の仲間と顔を合わせて以来、待ちに待っていた本会議が終了した。23日間、常に思考し、常に行動した。後悔することは何もない。しかしそれがつまり、過去の、そしてこれから開催されるどの会議にも劣らない最高のものであったとは限らない。
本会議自体は終了した。23日間を通し私たちが“JASCer”となれたのであれば、勝負はこれからである。私たちの“JASCer”としての人生は始まったばかりである。

本会議では23日間を最大限に使った。チャンスは十分すぎるほど与えられた。

各サイトでのフォーラム、講演会、フィールドトリップでは、国家単位の視点からコミュニティーの視点まで、幅広いレベルでの世界を知ることができた。

会議のひとつの大きな軸である分科会活動では、ディスカッションを行う際に生じる優先順位の違いや、英語での討論という部分で得るものは多かった。分科会という、本気で「“議論”をし続ける」ことが出来る環境は、他で経験することは出来ないだろう。

また、分単位での行動が必要とされる中、参加者との交流も重要なイベントであった。自己管理

とタイムマネジメントが必要とされた本会議中、見ず知らずの71名の学生と共同生活を送る上で、個々の価値観や優先順位の違いなどをありのまま実感することが出来た。

これらを生かすかどうかは、今後参加者ひとりひとりの行動に委ねられている。

第63回日米学生会議自体は、私にとって悔いのないものだった。しかし周囲から見た際、果たしてそれがどのような23日間であったのかが分かるのは、10年、20年、50年後だろう。これから先、どのJASCerに会っても胸を張っていられるように、これからはOGとしても、責任を持ち精進する次第である。

## 舘林　真一

第63回日米学生会議が終了してから早一週間。すでに沢山の友人から「どうだった？」と聞かれるが、いつもその質問に単純に答えられず困っている自分がいる。言葉で表すのがこんなにも難しい、最高に充実した夏は今までになかった。振り返れば、スタートラインだった春合宿はもうすでに4ヵ月前のこと。「科学・技術の発展と倫理の再考」という、今まで考えもしなかったトピックを扱う分科会に所属した私は、不安と期待で一杯だった。春合宿での最初のミーティングからすでに意見が真っ向から分かれるなど、衝突することも多々あり、分科会の方向性もなかなか定まらなかった時には、ゴールの見えない霧の中をただ走っているかのような感覚を覚えた。そんな日々も今思うと懐かしい。

いよいよ本会議でアメリカ側参加者と対面した時は、興奮というよりは「やっと会えた。」という安堵感の方がむしろ強かった。日米合わせて71人の学生。こんなにも大人数ではあったが、すぐに打ち解けることができ、参加者一人ひとりの個性がとても強く、みんなが自分にない何かを持っていた。自分の弱さをさらけ出し、他人の良さを素直に認め合い、いつも本音で正直にぶつかってきてくれる仲間ばかりだった。そんな彼らと過ごした1ヵ月はとにかく刺激的で、自分自身を見つめ直す貴重なチャンスも与えてくれた。特に忘れられないのは、毎晩の『特別分科会』。みんなでリラックスしてそれぞれの夢をシェアし「We'll make a difference!」と叫び、将来について声高に熱く語るのが楽しくてたまらなかった。

日米学生会議は私の人生の芯として残り、私の糧となっていくだろう。これからは、第63回日米学生会議のテーマの最後の締めである「未来を共に創ること」を日米学生会議の皆で成し遂げたい！日米学生会議の醍醐味。それは価値ある「新しい体験」と「人脈という宝」、そして何より、自分の将来への「新たな可能性」を見いだせる場であることだ。

## 棚田　壮太

私がJASCに応募した理由は、『夢を語る熱い学生と出会いたい』と考えた為である。「自分はいったい、何をしたいのか？」半年に及んだ就職活動の最中にも、ずっと考え続けたこの問いに、社会人となる前の最後の機会を活かし、改めて熱い学生達と共に迫ってみたいと考えた為だ。

私のこの狙いは、なんと5月の春合宿段階で、既に達成されてしまった。そこには、36のまったく違う個性が集い、自分の考えをしっかりと持ち、表現していたからだ。この段階で、意欲的に成長する個々の姿に感銘を受けた。更に7月29日にはアメデリと出会い、第63回JASCは71の個性という、まさに無限の可能性を秘めた集まりとなった。

新潟、京都/滋賀、沖縄、東京と、景色も環境も変化する日程の下で、あっという間の1ヶ月ではあったが、私たちは時間の許す限り議論を尽くし、そしてお互いを理解しようと毎晩深夜まで熱く語り合った。間違いなくこの個性的な集団は一丸となり、大きな成長を遂げていると感じた。一方で、自分自身はどれほど成長し、JASCを通じて何を得たのか。この問いへの答えには時間が掛かりそうである。

JASC を終え改めて思う事は、ここからが一番大切だということである。JASC で語られた議論にどんな価値があったのか。学生最後の夏を過ごす場としてJASC を選んだことが正しかったのか。JASC が自分の人生において大きな転機となったか。これらの問いへの答えのすべては、今後の自分が決めるという事だ。JASC を通して感じた最高の瞬間を胸に秘め、新たな一歩を踏み出していきたいと思う。それが、JASC という素晴らしい環境を提供してくださった、多くの支援者の方々、1 年間奔走し笑顔で迎えてくれた EC の皆、そして尊敬する 70 名の仲間達への真の恩返しと考えている。

冨沢　瑠美

最寄り駅の改札を抜けると、この４カ月が一気にフラッシュバックした。８月 21 日の夜、日米学生会議の全プログラムを終え、“ 日常 ” に戻ってきた瞬間である。名前のつけようのない感情の高ぶりを覚え、倒れそうになった。

振り返れば去年 11 月、私のストーリーは幕を開ける。授業の空きコマにあった説明会、大学のテストと被ってドタバタした１次審査の資料作り、色々とアウェーな気分になった２次面接、でも謎の自信に満たされて四ツ谷を出たこと。気付いたら春合宿に参加していた。ここで大ショックが起きる。ズバリ「英語」!2 日目の英語ワークショップでのディベートでは、トピックである “U.S. Base in Okinawa” をアメリカ野球の話と勘違いして考え始めたほど、気が動転していた。今だから笑えるが、当時は本気で帰りたくなった。不安が９割のスタートだった。

そこからは、考えられないほどのスピードで日々は過ぎていった。分科会は感激の嵐。今まで完全に独学で進めてきたメディアについての研究を、初めてアウトプットができたこと。同じような本を読み、問題意識を持ち、自分なりの解決策を考えている同年代に出会えたこと。しかしここでも英語はネックだった。それはあくまで一つのツールでしかなく、肝心なのは私自身のアイデアや伝えたい気持ちであることは分かっていたが、それでも他言語を用いて細かい描写、ニュアンスを伝えるのは困難極まりなかった。しかし同時にその苦難は、言語の壁を越えた人のつながり、心強い仲間がいることを心の底から感じさせたのも確かである。よく笑って、よく泣いた。毎日何かしらの葛藤があった。人間の持つあらゆる感情を一気に味わった日々。隣にはいつも誰かがいた。だから倒れなった。だから思いっきり挑戦できた。それが日米学生会議。

支えてくださっている全ての方への感謝は尽きない。そしていとおしくてたまらない仲間たちへ。ありがとう。一生よろしく。うーん、感無量！

中川　渉

JASC の終了から早２週間が経ち、日記を見返してみると自分が如何に自問自答していたかがよく分かる。そして、振り返ってみると今回の会議のテーマ「対話と挑戦からともに描く未来」は同時に私個人のテーマでもあったように感じる。

「私にとって JASC とは何だったのか」成績を付け、答えを出すことはまだ出来ない。ただこの４ヶ月間が剥き出しの自身と直に対峙せざるを得ない期間であったことは間違いない。それは多くの尊敬する参加者に囲まれ、対話を繰り返す中で溜まっていく自身への疑念であり、一人の友が何気なく発した言葉が一瞬にして打ち砕く私の苦悩であった。高校時代から自立を是とし何事も一人で解決しようとしてきた私にとって、他者との対話・比較によって初めて気づく新たな自身の側面は新鮮そのものであった。自分の壁を乗り越えたとはまだ思わない。JASC という特殊な環境・時間が課題を解決し、また新たな環境では同じ壁にぶつかるかもしれない。しかし、この経験が私の成長へつながるマイルストーンであることは間違いない。

私は実行委員選挙への立候補を最後まで迷った。結局、私はこの居心地のよい気心知れた仲間

たちから離れ、全く新しい環境で自分にチャレンジすることが私にとって重要であるという結論に至った。そこで初めてこの4ヶ月間に適正な評価が自分の中に持てるに違いない。新たな環境で直面する様々な壁にも、JASCの参加者としての経験、得た仲間たちが私の支えになっていくことだろう。

本会議を終えた今、「対話と挑戦から共に描く未来」というテーマは今後も私の課題になっていくと感じる。このような素晴らしい場に参加する機会を私に与え、会議を支えて下さった全ての方々に心から感謝の意を示したい。たとえ参加者それぞれの道は異なっていようとも、それらの道が交わったJASCでの経験は各々の未来にとって絶大な原動力となることだろう。

## 中澤　耕己

前年度会議の終盤にサンフランシスコで行われた選挙を経て、第63回日米学生会議実行委員となってから、ちょうど1年が経ったことになる。実行委員として日米学生会議に1年間関わることは、大学4年になる自分にとって生易しいものではなかった。しかし、多くのものを背負った分だけ、自分の中の熱意と意地は強かった。挫ける理由がたくさん転がっていたからこそ、何が何でも完遂しようと思っていた。

そして1年が経ち、膨大な準備の時間に比べれば、瞬く間に本会議は終了した。第63回日米学生会議は成功したのだろうか。参加者は、自分は、変わることができたのだろうか。本会議終盤で自問し続けた問いである。その解は誰かが出してくれるわけではない。噛り付くようにして本会議を走り抜けた後の虚脱感があるだけである。

本会議前、大学の友人に「なぜそこまで没頭できるのか？」と聞かれた。そんなことは考えたこともなかった。ただ、強い個性と実力を併せ持った学生が日米両国から集い、切磋琢磨する環境が心地よかったし、尊敬している仲間たちだからこそ、誰にも負けたくなかった。むしろ、立ち止まる理由がなかった。しかし、そうやって「ライバル」を横目に走り続ける中で、結局気付かされるのは自分の弱点ばかりであった。多くの人との関わりの中で最終的に見えてきたのは、自分に出来ない多くのことと、わずかながらの出来ること。常に自分の弱さを映してくれる素晴らしい仲間に感謝している。

この「参加者の声」を読めばわかるように、この夏が自分の中で何一つ整理されていない。しかし、無理やり整理する必要はないとも感じる。これから先、この仲間と世界のどこかで再会する時に、絶対に負けていたくないという気持ちを持ち続けさえすれば。

最後になりますが、第63回日米学生会議開催に際して、本当に多くの方々にお力添えいただきました。この場を借りて、ご支援ご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

## 宮内　雄飛

日米学生会議に応募したとき、強い志望動機を持っていなかった。高校生の頃から、漠然と大学生になれば参加するものだと思っていた。なんとなく面接を受け、気がついたら合格通知を手にしていた。合格通知を受け取ったときも嬉しくて号泣することはなかった。しかし、春合宿で多様なバックグラウンドを持つ刺激的な仲間や、各分野の第一線でご活躍されているアラムナイの方々にお会いしたことで、に対する考え方は一変した。事前活動や本会議を通じて多くの方々と様々なお話をする機会をいただき、ありきたりの表現ではあるが、自らの視野をさらに広めることが出来たと実感する。

私の所属した分科会「文化と環境問題」では、アメリカでもとりわけ環境問題への意識が高い学生が集まったこともあり、良い意味で期待を裏切られる事が多々あった。しかし、分科会のアメリカ人がアメリカにおける大多数の意見でないことを考慮すれば、教育がいかに重要か再認識させられた。

「京都・滋賀」サイトでは、大変多くの方にお世話になりつつ、自らのアイデアを本会議のプログラムに組み込んでいただけた。企業訪問先の決定やゲストスピーカーの招聘に関しては、なにが日米の学生にとって最適か、非常に時間をかけて熟考したので、各プログラム後の参加者の声を聞いて非常に満足した。

日米学生会議の魅力は、ヨコだけではなくタテのつながりがあることだ。アラムナイに誘われ、昨年のファイナルフォーラムでの内容がベースとなった一つのプロジェクトに携わることができたが、これもひとえに日米学生会議に参加できたおかげです。学生会議であるがゆえの限界を感じることもありましたが、それ以上に多くのことをこの日米学生会議から学びとることができました。

最後になりましたが、未曾有の震災後という困難な状況にもかかわらず、本会議の開催にあたりご尽力をいただきました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

山田　晃永

いつの間にか、長い実行委員生活も終わりを迎えようとしています。思い出はここに書き連ねるのではなく胸の奥にしまいこみ、代わりにお世話になった方々へお礼を述べさせていただきます。

まず、沖縄サポート委員会への感謝の気持ちは言葉では言い表せません。錚々たるメンバーにお集まりいただき、私のような者が一緒に活動させていただくだけでも恐れ多く、皆様のご尽力で事業の規模が大きくなるにつれ、期待に押し潰されそうになりました。しかし、お忙しい中、隔週でお集まりくださり、私どもの夢を形にするために真剣に議論してくださる皆様の姿を見るたびに、最後まで諦めずに頑張ろうと気持ちを新たにしておりました。体力も気力も足りず苦しかった時期は、インターネット電話を通しても溢れ出る皆様の温かさに、何度も救われました。

また、連日通い詰めた財団法人国際教育振興会の皆様には大変お世話になりました。特に、何度も丁寧に文章を添削してくださった伊部さん、私の長話にお付き合いくださった稲田さん、どんな雑務も笑顔で引き受けてくださった後藤さん、本当にありがとうございました。

思い返せば、あらゆる面で悩みの尽きない１年でした。強がりの泣き虫という扱いにくい私を支えてくれる友人の大切さに気付かされました。また、常に側にいてくれた実行委員の井上聡美と下地邦拓には心から感謝しています。下地とは度々衝突もしたけれど、名桜大学の大城美樹雄先生が「下地君と山田さんのペアが沖縄担当で本当に良かった」とおっしゃる通り、最高のパートナーでした。

上記の他にも、実に多くの皆様のご支援ご協力のおかげで会議を終えることができました。実行委員としての任務を終え、さらなる挑戦をすべく、来年１月から渡英いたします。お世話になった皆様に一回り大きく成長した姿でお会いできるよう、異国の地で邁進いたします。拙い言葉ではございますが、お礼のご挨拶とさせていただきます。

八木澤　龍大

５月から８月までの４ヶ月間の日米学生会議のプログラムの中で、私が強く感じたことは以下の２点です。

１点目は、歴史や伝統を伝えることです。以前は戦争をどこか遠いことのように感じていましたが、広島研修と沖縄サイトで現地の人々や実際の資料に触れ、平和な社会を作るにはどうすればいいか考えるようになりました。書物を読むだけでなく、現地に直接赴くことで、深い学びを得ることが出来ると感じました。また、京都サイトでは、香の老舗、松栄堂の社長から、失われつつある伝統を後世に伝えるには、「伝統を伝えよう」と力むより、自分が伝統を楽しみそれを効果的に表現することが重要だと学びました。また琵琶湖の沖島では後継者不足が問題となっていますが、インターネットで広く体験やボランティアなどを募れば、世界から沖島の生活に興味を持つ人々が集ま

り、彼らこそが「後継者」となるのではないかと思いました。グローバル化社会の現在、後継者は世界のどこかにいるという姿勢も持つことができるのではないでしょうか。

２点目は、様々な視点から物事を見ることです。原発問題や基地問題では、推進する人と反対する人がおり、それぞれの正義を目の当たりにしました。また、それぞれの問題で政府と地方、さらに日米間での問題意識のズレに驚かされました。問題を解決する上で致命的なこのズレを修正し、同じ土俵に立つために、互いの思いを現地で体験し、互いの正義を理性的に理解し合わなくてはならないと思いました。原発や基地の政策を扱う人々は、実際に現地や相手国に赴く必要があります。「大局を見るために局地的な視点は不要」という考えは言い訳です。私は、局地的な視点を理解した上で大局的な政策を実行することは不可能ではないと信じています。

以上の２点を踏まえた上で、直接現地学習の必要性を強く感じ、私は、将来的に学生達向けに直接現地に赴く学びの場を提供する仕事をしたいと思うようになりました。

### 山下　祐里奈

日米学生会議を終えて既に一週間近くが経つが、未だにプログラムが終了してしまったことを信じられない、信じたくないという思いが私の中に強くある。日米各所から、71 人の学生が集まり、共同生活をしながら様々な学習を１ヵ月に渡って行うという非日常の中、決して楽しいことばかりではなかった。悔し涙を流したり、イライラしたり、沢山の悩みを抱え、自分の弱さや欠点と向き合った。様々な困難を前に、逃げずに戦えたのは、周りに素晴らしい仲間達がいたからである。悩みを聞いてアドバイスしてくれるのは勿論、彼ら自身が真剣に自分に向き合い、常に向上心を持ち努力する姿を、身を持って私に示してくれた。彼らのひたむきな姿に刺激され、「負けたくない、自分にもできる」と信じて、自分の悩みにぶつかることができた。

本会議で最も印象に残っているのは、分科会活動である。ファイナルフォーラムでの発表ばかりを意識するのではなく、お互いの意見を出しつくし、解決策や妥協点を自分たちで作り出すという共通の目標を定め、全員が納得のいくまで活発に議論することができた。はじめはなかなか英語に自信が持てず、積極的な議論への参加ができなかった。しかし、分科会メンバーが互いに気を遣いあい、意見を尊重しあうことで、英語のハンデを考えなくなり、積極的に発言出来るようになった。分科会のメンバー全員が成長し、互いを高めあいながら非常に有意義な議論が出来たと思う。

五月の春合宿から本会議終了までの４ヵ月間を通し、様々な人に出会い、様々なことを学んだが、これらは日米学生会議だからこそ得られた大変貴重な経験である。私にこのようなチャンスを与えてくれた全ての人々に心から感謝している。同時に、次の世代にも、このような価値ある日米学生会議という舞台を繋げて行く責任も感じている。これからは、参加者としてではなくなるが、いつまでも日米学生会議に関わり、貢献していきたい。

### 吉本　理沙

私は６年間ある大学生活の１年目は、医学だけにとどまらず様々な学問を専攻する学生、そして名古屋だけにとどまらず、日米両国の各地から集まる学生を作りたいという思いで、日米学生会議に参加しました。

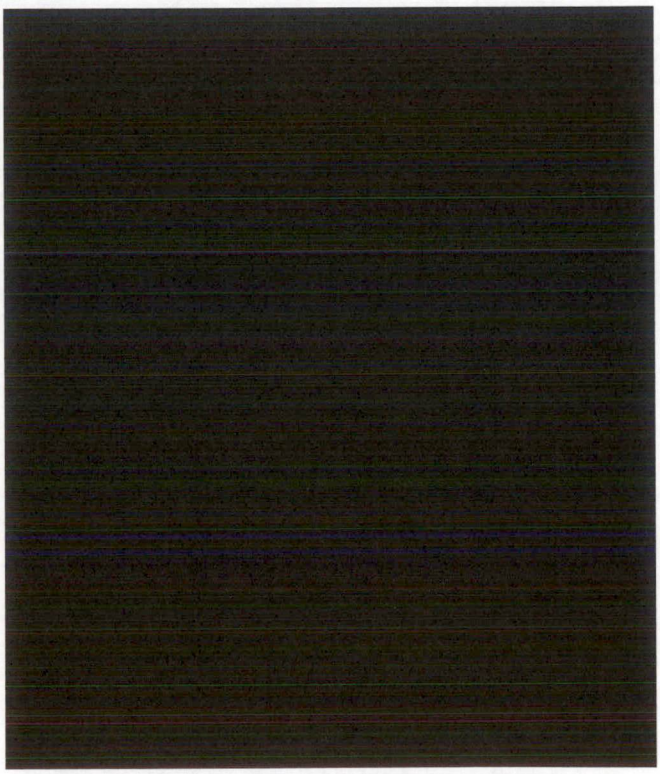
日米学生会議を通して、一ヶ月をともに過ごし、議論をし、夢を語ったりした仲間を 70 人得られました。それぞれの進む方向は違いますが、一人ひとりがそれぞれの夢に向かって努力しており、非常に刺激を受けました。それにより自分の将来の夢や目標に対しモチベーションが高められると同時に、自分の足りないところ、良いところ、やりたいことなどが明確になり、自分を見直すことができました。

さらに、当初の目標を達成しただけでなく、多くのことを日米学生会議から学ぶことができました。まず分科会では、今まで知識でしか捉えられていなかった「差別」が、事前学習やアメデリを交えた議論の中で、少しずつ現実味を帯び、日常的なものであると実感し、差別について考えさせられる機会となりました。そして、４つのサイトで原発、山古志村、米軍基地、ガマなどにおける講義や見学、そして学生同士の討論を通して、日米問題だけに収まらない幅広い問題意識を持つことができました。

以上のように、日米学生会議では、一ヶ月という期間で様々なことを考えさせられる大変貴重な機会が与えられました。これからの課題はそれをどのように活かしていくのかであると感じています。今、日米学生会議を振り返ってみると「知ることから創ることへ ～対話と挑戦から共に描く未来～」という第63回日米学生会議のテーマの難しさを改めて実感するとともに、その意味が分かったような気がします。

# 第 6 章

## 第 64 回
## 日米学生会議概要



# 第 64 回日米学生会議概要

## 衝突と理解から生まれる新たな意志　～未来を構築する力へ～

### - Share in the Present, Connect for the Future: Strengthen Ties to Inspire Change -

2012 年は、アメリカを始め、世界各国で選挙や政権交代が行われ、国際政治の転機を迎えるだろう。国際社会における各国間の結び付きがますます強固になる中、この政治的変化は世界に大きな影響を及ぼすはずだ。中国を始めとする新興国の台頭により、国際関係も変動しつつある今、私たちは、日本の立場のみならず、安全保障や経済の面で非常に強い相互依存関係を持つ「日米」の関係について再考する必要がある。

また、2011 年 3 月 11 日に発生した未曾有の大震災とそれによる原発事故は世界に大きなショックを与えた。震災から 1 年を迎え、より具体的な復興政策や各国からの協力が引き続き必要となる。日本は、災害大国そして原発事故発生国として、改めて災害対策を打ち出すとともに、原発を巡るエネルギー政策を見直し、世界に発信していく責任がある。私たちも学生として、長期を要する震災復興に今後どのように関わり、貢献することができるかを考えねばならない。

このような中開催される第 64 回日米学生会議では、日米両国から問題意識の高い学生が集まり、激動する世界においていかに日米が連携し、世界的財政危機や環境問題など両国を取り巻く国際問題に対処していくべきか、1 ヵ月をかけて議論し、考える。特定の利害に縛られない学生だからこそ、自由な意見を発信し合うことができる。多様なバックグラウンドを持つ日米学生の率直な意見は、時に「衝突」を生むだろう。しかし、互いを尊重し合いながら、意見や価値観を「理解」するよう努めていく中で、自身の新たな視点や課題を見出し、未来へ向けた「意志」を育むことを目指す。参加者一人ひとりが、学生としての目標や課題、同時に国際社会の一員として将来担っていくべき役割を模索し、共に未来を構築するために行動を起こすきっかけになることを期待する。

【主催】
財団法人国際教育振興会

【企画・運営】
第 64 回日米学生会議実行委員会

【後援】
外務省、文部科学省、米国大使館、
日米文化センター、社団法人日米協会 ( 予定 )

【賛助】
公益財団法人三菱 UFJ 国際財団、財団法人双日国際交流財団、財団法人平和中島財団　他 ( 予定 )

【開催期間】
2012 年 7 月 28 日～ 2012 年 8 月 20 日

【開催地】
第 1 開催地　ダラス（テキサス州）
第 2 開催地　マディソン（ウィスコンシン州）
第 3 開催地　バークレー / サンフランシスコ（カリフォルニア州）
第 4 開催地　シアトル（ワシントン州）

## 会議の過程

第63回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側主催団体の財団法人国際教育振興会、米国側のInternational Student Conference(ISC) ,Inc.の支援の下、本会議開催のための準備活動を行う。4月に参加者決定後、各参加者は所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、5~7月の期間には、自主的に講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月に亘って共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、自ら提案した議題について議論するスペシャルトピック、様々な文化体験、そして最後に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科会に分かれ、第64回日米学生会議として学生だからこそ可能である「心の対話」を行い、国境を越えた相互理解を推進する。また、フィールドトリップでは、議論に必要な具体的事例を学ぶのみならず、各地の文化に触れる活動を行うなど、各自の視野を広げ、討論と対話の充実を図る。さらに、学生同士の討論に止まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。ファイナルフォーラムでは、分科会での討論の概容など本会議の成果を社会に向けて発信する。本会議終了後には、参加者は会議において得られたもの、そして1ヵ月の成果を、報告書また報告会という形で外部へ発信する。会議で得られた成果が長期的に社会還元されることを期待している。

## 本会議におけるプログラム

≪分科会≫

本会議において活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生(実行委員1名を含む)が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。第64回会議における分科会は以下の通りである。

(1) Business and Ethics in the Modern World
現代社会における企業活動と倫理
(2) Environment and Technology
環境と科学技術
(3) Personal and National Identity
パーソナル / ナショナルアイデンティティ
(4) Post-Crisis Reconstruction
復興と社会の再構築
(5) Human Rights and Responsibility
人権問題と我々の責務
(6) Cooperative Security in the 21st Century
安全保障と日米
(7) Cultural Innovation and the Arts
グローバル化における文化芸術

≪ Field Trip ≫

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な具体的視点を得るための重要な活動となる。

≪ Special Topics ≫

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角的な議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

≪ Conference Wide Discussion ≫

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議アラムナイや専門家の方々をゲストスピーカーとして招き、第 64 回日米学生会議テーマ、各開催地のサイトテーマに基づいたディスカッションを行う。これにより、参加者の見識を広め、新たな課題や視点を発見することを目的としている。

≪ Conference Wide Reflection ≫

参加者が一同に集い、1 ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

≪ Forum ≫

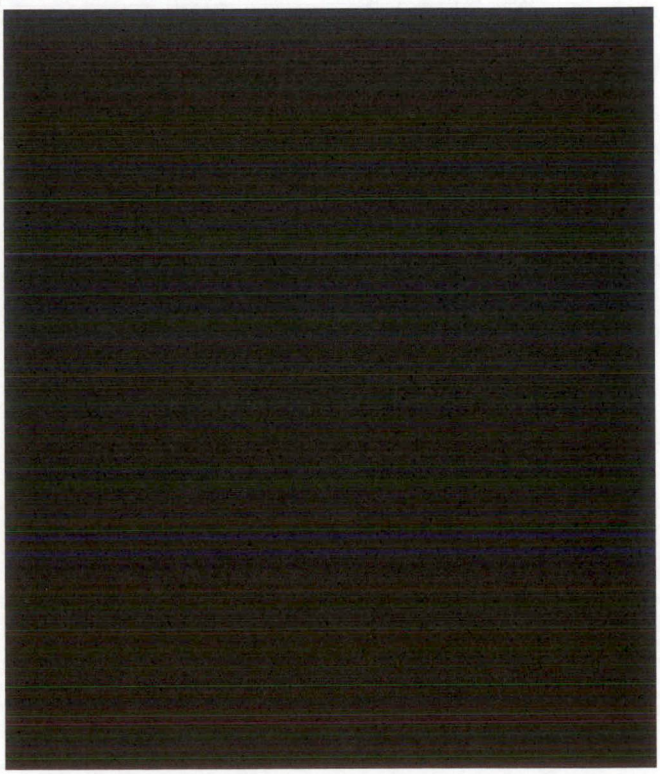
第 64 回の各開催地で、Site Theme に関連する問題や日米両国に深く関わるトピックについて、一般公開のフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家や有識者の講演、学生を交えたパネルディスカッションなどを行う。これにより、参加者が各開催地で学んだ知識を深め、新たな問題意識や興味を持つ機会になることを期待する。

≪ Final Forum ≫

最終開催地において行われるファイナルフォーラムでは、1 ヵ月の総まとめを行う。主として分科会における議論の概容や成果を発表し、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの視点を来場者の方々と共有することによって、第 64 回日米学生会議において得られた、学生達の成果や発見を社会に発信する。

# 第７章

# 日米学生会議にご協力いただいた方々



# 第 63 回日米学生会議 ご協力いただいた方々 ( 敬称略・順不同 )

【主催および後援団体協力者】

財団法人 国際教育振興会

| | |
|---|---|
| 理事長 | 大井 孝 |
| 参与 | 稲田 脩 |
| 事務局 | 後藤 明子 |

国際教育振興会賛助会

| | |
|---|---|
| 名誉会長 | 高円宮妃殿下 |
| 会長 | 南原 晃 |
| 事務局長 | 伊部 正信 |
| 事務局 | 好中 由起恵 |

International Student Conferences, Inc.

| | |
|---|---|
| 理事長 | スティーブン・モス |
| 事務理事 | サラ・トンプソン |
| 事務局 | スペンサー・オスカーソン |

外務省

| | |
|---|---|
| 広報文化交流部部長 | 村田 直樹 |
| 人物交流室長 | 川上 文博 |
| 人物交流室 首席 | 縄田 博 |
| 人物交流室 | 伊藤 千恵子 |

文部科学省

| | |
|---|---|
| 国際統括官 | 藤嶋 信夫 |
| 大臣官房 国際課 課長 | 池原 充洋 |
| 大臣官房 国際課 総務係長 | 植村 正樹 |

米国大使館

広報・文化交流部 文化プログラム担当官
リチャード・メイ

広報・文化交流部 教育人物交流室
落合 安代

社団法人 日米協会

| | |
|---|---|
| 会長 | 大河原 良雄 |
| 専務理事 | 渡辺 隆 |

日米文化センター

| | |
|---|---|
| 日本代表 | 伊部 正信 |

< 新潟サイト >

【共催】新潟日米協会

【後援】新潟県、新潟市、新潟県コンベンション、財団法人新潟観光コンベンション協会、財団法人新潟県国際交流協会、財団法人新潟市国際交流協会、新潟日報、新潟放送、新潟総合テレビ、テレビ新潟放送網、新潟テレビ 21

【賛助】医療法人社団竹内会、NSG グループ、マイコロジーテクノ株式会社、三国フーズ株式会社新潟営業所、山崎製パン株式会社、蔵の宿 菱風荘、社団法人北陸建設弘済会、北方文化博物館

< 京都 / 滋賀サイト >

【後援】京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会、滋賀県、財団法人京都市国際交流協会、立命館大学

< 沖縄サイト >

【共催】第 63 回日米学生会議沖縄サポート委員会

【後援】沖縄県、名護市、宜野湾市、琉球大学、名桜大学、沖縄国際大学、沖縄尚学高等学校

【協力】財団法人沖縄観光コンベンションビューロー

【賛助】大湾 朝明、奥 キヌ子、嘉数 啓、川満 敏、篠原 初枝、尚 弘子、洲鎌 孝、平良 誠、千葉 裕子、野口 安計、南風盛 綾、原田 彰宏、比嘉 幹郎、福谷 尚久、宮里 一馬、森本 大、財団法人沖縄県国際交流・人材育成財団、財団法人名護市観光協会、財団法人りゅうぎん国際化振興財団、沖縄県金融協会、特定医療法人沖縄徳洲会、医療法人恵山会、名護市商工会、株式会社ウィルコム沖縄、大城花屋葬儀社、株式会社沖設備、株式会社沖電工、沖縄ガス株式会社、沖縄コカ・コーラボトリング株式会社、沖縄ツーリスト株式会社、沖縄電力株式会社、株式会社 沖縄ファミリーマート、沖縄プラント工業株式会社、沖縄ヤマト運輸株式会社、オリオンビール株式会社、空港ビルディン

グ株式会社、株式会社公益社、株式会社国際リゾート研究所、シンバホールディングス株式会社、全保連株式会社、有限会社東洋商会、有限会社今帰仁酒造、西日本電信電話株式会社、日通エアカーゴサービス株式会社、株式会社北部観光バス、ホテル山田荘、三菱商事株式会社、株式会社ゆがふホールディングス、琉球海運株式会社、琉球セメント株式会社、琉海リース株式会社、株式会社りゅうせき、株式会社レキオ・セキュリティサービス、有限会社ロイヤルフーヅ

＜ご協力いただいた方々＞

【広報活動】

亀田 尚己　同志社大学 商学部・商学研究科 教授
竹花 安子　立命館大学 国際部 衣笠国際教育課課長補佐
五所 恵実子　東京大学 理学部国際交流室 講師
西元 宏治　専修大学 法学部 准教授
井伊 雅子　一橋大学 国際・公共政策大学院 教授
神崎 高明　関西学院大学 経済学部 教授
亀田 尚己　同志社大学 商学部・商学研究科 教授
浅原 純　同志社大学 グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室
楠 綾子　関西学院大学 国際学部 准教授
服部 直子　立命館大学 国際部 海外留学課
竹花 安子　立命館大学 国際部 衣笠国際教育課
小山 昌久　立命館大学 国際関係学部 教授
河野 至恩　上智大学 国際教養学部 国際教養学科 教授
保坂 亜矢子　上智大学 国際教養学部 事務室
渡辺 成美　筑波大学 国際部国際企画課 国際企画係
倉田 裕子　明治大学 国際連携部 国際連携事務室
油原 ゆう子　新潟大学 研究支援部 国際課 課長
込山 敦　新潟県立大学 国際交流センター・政策研究センター担当
村山 裕美子　株式会社ブルーバンブー
廣瀬 顕　株式会社ブルーバンブー
畑谷 友香　株式会社ブルーバンブー
吉岡 賢司　メイクセンス
池嶋 葉子　共同 PR
佐藤 龍子　にいがたインターネットテレビ
加賀美 英志　琉球大学総務部総務企画課広報・情報室
幸野 友子　琉球大学元学術国際部国際課国際教育担当
宮里 直也　沖縄タイムス社文化事業局事業部
大城 美樹雄　名桜大学 国際学群 講師
佐藤 学　沖縄国際大学 法学部 教授
澤田 哲生　東京工業大学 原子炉工学研究所 助教授
久保井亮一　大阪大学 サンフランシスコ教育研究センター センター長
弘津 禎彦　大阪大学 グローニンゲン教育研究センター センター長
藤田 清士　大阪大学 工学研究科国際交流室
若松 智明　早稲田大学 総長室 経営企画課
太谷 俊昭　早稲田大学 総長室 副部長 経営企画課 調査役
柴山 太　関西学院大学 総合政策学部 教授
吉田 智子　成蹊学園 国際教育センター 国際課
アンドラディ 久美　横浜国立大学 経営学部国際経営学科 講師
慶應義塾大学日吉学生部国際担当の方々

【選考活動】

浅原 純　同志社大学 大学院アメリカ研究科・アメリカ研究所 係長
金谷 憲　東京学芸大学教授
田辺 和子　日本女子大学教授
阿部 圭子　共立女子大学教授
竹本 秀人　国際ウェールズ環境総研代表
寶槻 徹　株式会社 ワイズポケット会長
株式会社イーデュケーション代表取締役
森田 正英　日米学生会議同窓会

和田 昭穂　三菱 UFJ リース株式会社 常務執行役員
金井 隆　株式会社 三菱東京 UFJ 銀行 企画部主計室調査役
西田 尚弘　日米学生会議同窓会
大間知 隆二郎　石油天然ガス金属鉱物資源機構
石井 誠二　日米学生会議同窓会

【春合宿】
山口 寛明　日米学生会議同窓会
綾部 功　東海大学 専任准教授
Tang Bing　慶應義塾大学大学院

【防衛大学校研修】
五百旗頭 真　防衛大学校 学校長
先崎 忠良　防衛大学校 総務部総務課社会連携推進室 広報専門官

【東日本大震災・原子力勉強会】
鈴木 悠平　Last One Mile Project 主催者
高野 恭平　日米学生会議同窓会
第 62 回日米学生会議参加者

【広島研修】
アレックス・メヒア　国連訓練調査研究所 (UNITAR) 広島事務所長
水本 和実　広島市立大学広島平和研究所副所長
沖田 なつき　広島平和記念資料館 啓発担当
田城 明　株式会社中国新聞社 ヒロシマ平和メディアセンター長 特別編集委員
澤田 美和子　公益財団法人広島平和文化センター
梶本 淑子　公益財団法人広島平和文化センター 被爆体験証言者
小田 和明　広島学院高校 英語科教諭
高見 知伸　広島女学院中学高等学校 英語科教諭
新宮 清香　日米学生会議同窓会

【交通・通信】
張 文　全日本空輸株式会社 東京支店法人販売室 第二法人販売部 第四販売グループ
水沼 大輔　株式会社 JTB 法人東京 第四事業部 営業第一課
吉田 和明　京王観光株式会社 東京南支店 / イベント・コンベンション担当 主任
辻 可織　イー・アクセス株式会社 総務本部 広報・CSR 室副室長
八木 里薫　イー・アクセス株式会社 総務本部 広報・CSR 室 CSR・コンプライアンス G

【新潟サイト】
渡辺 敏彦　新潟日米協会 会長 / 新潟総合学園 副理事長
関根 仲春　新潟日米協会理事 / NEW STEP PARTNERS Inc. 代表
鈴木 あい　新潟総合学園 法人本部 事務局 総務課秘書係
竹内 幸美　竹内病院院長
永島 忠美　衆議院議員
桐生 裕子　新潟県 知事政策局国際課 課長
山口 良信　新潟県 知事政策局国際課 課長
柴田 豊　新潟県 知事政策局国際課 企画調整グループ 政策企画員
渋谷 有子　新潟県 知事政策局国際課
小池 貴之　新潟県 総務管理部文書私学課 副参事
儀同 政宏　新潟県 県民生活・環境部震災復興支援課 課長補佐
本田 一丸　新潟県 県民生活・環境部震災復興支援課企画調整グループ政策企画員
藤塚 孝祐　新潟県 県民生活・環境部震災復興支援課企画調整グループ主任
飯吉 栄輔　新潟県 防災局原子力安全対策課原子力安全対策係主査
小林 伸一　新潟市 経済・国際部国際課 課長補佐
ミギンティー 敬子　新潟市 経済・国際部国際課 主査
山宮 直子　新潟市 経済・国際部国際課 副主査

吉田 正雄　長岡市 市民協働部国際交流課 課長
山田 哲也　長岡市 市民協働部国際交流課
阿部 雅之　長岡市 市民協働部国際交流課
油原 ゆう子　新潟大学 国際課 課長
宮 正晴　新潟大学 国際課 国際企画係 係長
田村 友美　新潟大学 国際課 特任専門職員
遠藤 綾子　新潟大学 国際課
岩田 尚志　新潟大学 国際課
込山 敦　新潟県立大学 国際交流センター 国際交流部長
若月 章　新潟県立大学 国際地域学部 国際交流センター長
加藤 雅啓　上越教育大学教授
瀧本 一幸　上越教育大学 学務部研究連携室 室長補佐
鈴木 佳秀　敬和学園大学 学長
伊藤 文吉　財団法人北方文化博物館 館長
山本 善政　株式会社ハードオフコーポレーション 代表取締役会長兼社長
高野 敏郎　ザ・フレンドシップ・フォース・オブ・新潟 理事
永井 健司　永井電気株式会社 相談役
真島 明子　マシマ・インターナショナル株式会社 代表取締役
与田 一憲　一般財団法人 食の新潟国際賞財団 総合ディレクター
高橋 道映　新潟日報社 代表取締役社長
鶴間 尚　新潟日報社 経営管理本部社長室 副主管秘書部長
家合 敬子　新潟日報社 経営管理本部秘書部 次長
三木 ゆかり　新潟日報社 編集局報道部 記者
野島 常雄　新潟放送 取締役報道・政策担当報道制作局長
熊倉 雄三　新潟放送 営業取締役 営業・事業担当営業局長
新保 真徳　新潟放送 アナウンサー
西巻 康之　新潟テレビ21 報道制作局報道制作センター 課長
佐藤 龍子　NPO 法人 にいがたデジタルコンテンツ推進協議会
山田 昭浩　東京電力株式会社柏崎刈羽原子力発電所サービスホールグループ
新野 良子　株式会社新野屋 専務取締役
稲垣 文彦　社団法人社中越防災安全推進機構 理事・復興デザインセンター長
河内 毅　社団法人中越防災安全推進機構 地域防災力センターチーフコーディネーター
濱坂 都　特定非営利活動法人ジェン 広報マネジャー
鈴木 龍一　学校法人新潟総合学院 STEP 管理事業部 部長
中村 昌子　菱風荘
小林 博隆　ビュー福島潟 新潟市北区地域課
倉島 百合子　福島潟野鳥の会 会長

【京都 / 滋賀サイト】

太田 昇　京都府 副知事
黒瀬 敏文　京都府総務部 部長
小林 貴子　京都府知事直轄組織国際課
前川 二郎　京都府教育庁管理部
奥本 尚美　京都府教育庁指導部社会教育課
髙村 恭子　京都市総合企画局国際推進室
中永 健史　京都市教育委員会総務部 部長
酒崎 伸明　京都市教育委員会事務局指導部学校指導課
末永 祐介　京都市教育委員会事務局指導部学校指導課
山本 悦子　京都市教育委員会事務局指導部学校指導課
小澤 高志　滋賀県観光交流局国際室 室長
宮村 佐衣子　滋賀県観光交流局国際室
西村 宗也　京都日米協会 副会長
深川 修二　大阪日米協会 前事務局長
五歩一 文子　大阪日米協会 ( サントリーホールディングス株式会社大阪秘書室 )
児玉 克也　三重大学人文学部教授・副学長 / 国際平和研究学会事務局長
川戸 良幸　琵琶湖汽船株式会社常務取締役
上田 洋平　滋賀県立大学非常勤講師

トーマス・バラトール　国際湖沼環境委員会研究員
村上 悟　NPO 碧い琵琶湖 代表
菊井 了　近江八幡琵琶湖よし笛アンサンブル代表
近藤 さち子　近江八幡琵琶湖よし笛アンサンブル
堤 雅子　株式会社アベリス代表取締役
下田 知美　株式会社リフレ代表取締役
山本 修巳　環境経営効率研究室主宰
井上 昌一　株式会社井上代表取締役
山田 昇　株式会社龍村美術織物参与
粟津 久雄　株式会社龍村美術織物総務部 部長
岩本 武　株式会社龍村美術織物総務部 課長
宝本 清菜　松栄堂社長室
小倉 庸敬　株式会社淀川製作所代表取締役
吉田 明弘　京都市立日吉ケ丘高等学校 教頭
小林 龍一　京都市立日吉ケ丘高等学校 教諭
吉田 功　京都市立紫野高等学校 教頭
木下 由加里　京都市立紫野高等学校 教諭
竹本 秀人　日米学生会議同窓会関西幹事　国際ウェールズ環境総研代表
宝槻 徹　株式会社ワイズポケット会長　株式会社イーデュケーション代表取締役
竹花 安子　立命館大学国際部海外留学課課長補佐
服部 直子　立命館大学国際部海外留学課
亀田 尚己　同志社大学商学部・商学研究科教授
浅原 純　同志社大学グローバル・スタディーズ研究科アメリカ研究所事務室

【沖縄サイト】
■沖縄サポート委員会
(名誉顧問)
稲嶺 惠一　元沖縄県知事
(実行委員長)
比嘉 幹郎　沖縄アメリカ協会 ガリオア・フルブライト沖縄同窓会会長
大城 肇　琉球大学 副学長
大城 美樹雄　名桜大学 国際学群 講師
奥 キヌ子　株式会社レキオファーマ 代表取締役
城所 望　日米学生会議同窓会
佐藤 学　沖縄国際大学 法学部 教授
新城 博　株式会社トリム 代表取締役
洲鎌 孝　万国医療津梁創出事業 プロジェクトマネージャー
平良 誠　日米学生会議同窓会
野口 安計　株式会社時事通信社 那覇支局長
平田 久雄　有限会社ディーランド 代表取締役
宮里 一馬　日米学生会議同窓会
吉川 博也　沖縄大学 名誉教授

■協力者
仲井眞 弘多　沖縄県知事
上原 良幸　沖縄県副知事
照喜名 一　沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課 課長
嘉数 晃　沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課 主幹
山城 拓也　沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課 主任
古波蔵 修平　財団法人沖縄コンベンションビューロー 観光・コンベンション推進部 コンベンション振興チーム コーディネーター
山城 太一　財団法人沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
川人 博　弁護士
長野 悠人　外務省北米局日米地位協定室
浦崎 綾　在日米海兵隊基地 在沖縄米海兵隊バトラー基地司令部 外交政策部 渉外官
ロバート・エルドリッヂ　在沖米海兵隊外交政策部次長
稲嶺 進　名護市 市長
親川 敬　名護市 副市長
仲里 幸一郎　名護市企画総務部総務課秘書係 係長

| | |
|---|---|
| 比嘉 恵一 | 名護市教育委員会 教育長 |
| 瀬名波 榮喜 | 名桜大学長 |
| 嘉数 啓 | 名桜大学 理事長 |
| 与那覇 恵子 | 名桜大学 国際学群 教授 |
| 仲地 清 | 名桜大学 国際学群 教授 |
| 名城 政次郎 | 学校法人 尚学学園 理事長 |
| 名城 政一郎 | 学校法人 尚学学園 副理事長 |
| 名城 おりえ | 学校法人 尚学学園 異文化交流プログラム室 主任 |
| 与座 宏章 | 学校法人 尚学学園 沖縄尚学高等学校 教頭 |
| 鎮目 耕平 | 学校法人 尚学学園 沖縄尚学高等学校 広報部 |
| 山内 繁雄 | 宜野湾市基地政策部 部長 |
| 新里 優 | 宜野湾市基地政策部 基地渉外課 課長 |
| 宮良 ルリ | 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団 |
| 山内 榮 | 琉球大学 非常勤講師 |
| 高良 鉄美 | 琉球大学法科大学院院長 憲法学教授 |
| 西川 征夫 | ヘリ基地建設阻止協議会 ( 命を守る会 ) 代表 |
| 知念 春美 | 宜野湾市立普天間第二小学校 校長 |
| 島尻 安伊子 | 参議院議員 |
| 下地 邦敏 | 沖縄市立美里小学校 校長 |
| 下地 輝美 | 西原町立坂田小学校 校長 |
| 外間 政吉 | 財団法人 YFU(Youth For Understanding) 日本国際交流財団 沖縄地域代議員会議長 |
| 山城 健太 | 琉球朝日放送株式会社 報道制作局 報道部 |
| 屋良 朝博 | 株式会社沖縄タイムス社 編集局 社会部 部長 |
| 金城 珠代 | 株式会社沖縄タイムス社 編集局 社会部 記者 |
| 長浜 真吾 | 株式会社沖縄タイムス社 北部支社 編集部長 |
| 金城 潤 | 株式会社琉球新報社 北部支社 報道部長 |
| 氏家 清志 | 株式会社琉球新報社 編集局 社会部記者 |

【東京サイト】

| | |
|---|---|
| ジョイ・ミチコ・サクライ | 米国大使館 広報・文化交流部 プログラム企画室長 |
| レイチェル・ブルーネット・チェン | 米国大使館 政治部・安全保障政策課 課長補佐 |
| コナード・ハミルトン | 米国大使館 経済部 二等書記官 |
| 大谷 桂子 | 米国大使館 教育人物交流室 |
| ペリー・チェン | 米国大使館 領事館部門海外勤務職員 |
| 伊藤 定良 | 青山学院大学 学長 |
| 仙波 憲一 | 青山学院大学 国際政治経済学部長 |
| 原口 知子 | 青山学院大学 総務部 総務・安全対策課 |
| 山本 東生 | 日米学生会議同窓会 |
| 田中 均 | 株式会社日本総合研究所 国際戦略研究所 理事長 |
| エリック D. ティリー | 陸軍省在日米軍基地管理本部 キャンプ座間 司令官 |
| 清家 篤 | 慶應義塾大学 塾長 |
| 孫崎 享 | 元防衛大学校 教授 |
| 中山 俊宏 | 青山学院大学 国際政治経済学部 教授 |

【日米学生会議同窓会協力者】（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 中瀬 正一 | 大間知 隆二郎 | 降旗 健人 |
| 橋本 徹 | 福谷 尚久 | 冨川 秀二 |
| 橘・フクシマ・咲江 | | 大髙 巽 |
| 西田 尚弘 | 大塚 雄三 | 原田 彰宏 |
| 中山 智夫 | 城所 望 | 乗竹 亮治 |
| 竹内 幸美 | 樋口 宏 | 上田 来 |
| 竹本 秀人 | 森田 正英 | 伊関 之雄 |

金井 隆　森本 大　竹内 奈緒
阿部 聡　松尾 恵輔　神馬 光滋
阿部 圭子　木ノ上 高章　石井 誠二
市川 比呂也　平良 誠　眞田 雄太
山本 東生　高畑 乃枝　武田 興欣
寶槻 徹　高井 裕之　田中 豪
天野 俊一　須藤 俊男　新宮 清香
岸田 守　梅崎 渉　松本 秀也
田辺 和子　金谷 憲　廣田 隆介
平竹 雅人　鄭 平文　川口 耕一郎
市川 裕康　趙 潤華　大谷 翔
山田 勝　茂木 健一郎　野津 美由紀
宮里 一馬　篠原 初枝　高野 恭平
加藤 雅啓　井伊 雅子　Brad Hall
加納 康宗　盛島 正人　Zak Elliot
和田 昭穂　比嘉 慎一郎　Rebecca Norton
原 由起子　児玉 克也　Hannah Lemmer
吉原 健吾　千葉 裕子　Cullen Hartley
金 大鐘　谷口 貴大
第 62 回日米学生会議参加者

【各分科会活動事前活動】

■安全保障と日米

孫崎 享　元防衛大学校教授
中西 寛　京都大学 法学部 教授
村田 晃嗣　同志社大学 法学部 教授
佐々木 幸枝　日本モンサント株式会社 広報部 部長
上川 治　APEC ビジネス諮問委員会 (ABAC) 日本支援協議会 事務局長
木南 莉莉　新潟大学 農学部 教授
佐藤 学　沖縄国際大学 法学部 教授
エリック D. ティリー　陸軍省在日米軍基地管理本部キャンプ座間 陸軍大佐・司令官

■変わりゆく社会とメディア

後藤 謙次　政治ジャーナリスト
山内 豊彦　元株式会社共同通信社社長
隅井 孝雄　京都ノートルダム女子大学 客員教授
町田 寿二　京都三条ラジオ カフェ 理事・放送局長
松岡 千鶴　京都三条ラジオカフェ 理事・ゼネラルプロデューサー

■グローバル化と世界システム

伊豫谷 登士翁　一橋大学 名誉教授
白石 さや　東京大学大学院教育学研究科 教授
竹中 平蔵　慶應義塾大学グローバルセキュリティー研究所 所長
中村 俊彦　公益財団法人環日本海経済研究所 企画・広報部長
畑 正高　松榮堂 代表取締役社長
船橋 知之　松榮堂 企画広報部
石部 大史　クールジャパン・プロジェクト 代表
丹羽 妙　クールジャパン・プロジェクト ファシリテーター
嘉数 啓　名桜大学 理事長
エリック D. ティリー　陸軍省在日米軍基地管理本部キャンプ座間 陸軍大佐・司令官

■文化と環境問題　～解決への第一歩～

砂川 寛幸　Hiro's Enterprises 代表者
仲村 宗起　株式会社海洋生物増殖研究センター 代表取締役

■歴史認識問題と国際関係

孫崎 享　元防衛大学校教授
中瀬 正一　日米学生会議同窓会 副会長
吉澤 文寿　新潟国際情報大学 教授
鳥山 淳　沖縄国際大学 准教授

■科学・技術の発展と倫理の再考

鈴木 達次郎　内閣府原子力委員会委員長代理
櫛島 次郎　東京財団研究員
山田 治之　新潟県防災局原子力安全対策課 課長

伊藤 幸司　新潟県防災局原子力安全対策課 原子力安全対策係 係長
加藤 和人　京都大学人文科学研究所文化研究創成部門准教授

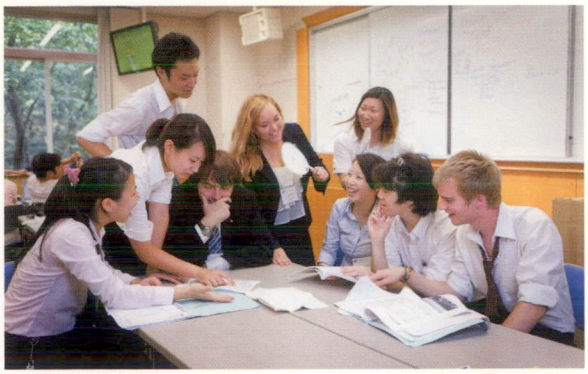
■差別から考える平等
渡辺 豊　新潟大学大学院実務法学研究科准教授
三浦 淳　新潟大学人文学部人文学科教授
喜納 育江　琉球大学国際沖縄研究所教授
平野 俊一　keivi 店長

【賛助団体・企業、賛助者】
独立行政法人 国際交流基金
財団法人 双日国際交流財団
財団法人 平和中島財団
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団
社団法人 東京倶楽部
社団法人 日米協会
京都日米協会
大阪日米協会

伊藤忠商事株式会社
協和発酵キリン株式会社
住友商事株式会社
エクソンモービル有限会社
株式会社 メイク・センスプラス
高井 裕之
石井 誠二
市川 比呂也
オタフクソース株式会社
株式会社スミフル
イー・アクセス株式会社

アサヒビール株式会社
株式会社オリエンタルランド
キッコーマン株式会社
株式会社三和
新日本製鐵株式会社
セコム株式会社
株式会社セブン & アイ・ホールディングス
禅林寺
大成建設株式会社
株式会社竹中工務店
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
トヨタ自動車株式会社
中辻産業株式会社
日産自動車株式会社
日本アイ・ビー・エム株式会社
日本政策投資銀行
日本生命保険相互会社
野村ホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士ゼロックス株式会社
富士通株式会社
三井不動産株式会社
三井物産株式会社
三菱地所株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱東京 UFJ 銀行
三菱 UFJ リース株式会社
メリックス株式会社
岡本 実
橘・フクシマ・咲江
堤 清二
冨川 秀二
南原 晃
西田 尚弘
橋本 徹
平竹 雅人
山田 勝
和田 昭穂

ビュー福島潟での議論の様子



ファイナルフォーラム前の分科会の様子

新潟下駄総踊り観賞後、踊り子の方々と

タレントショー後の大合唱

# Japan-America Student Conference
# Since 1934

主　　催：　財団法人国際教育振興会

企画・運営：　第 63 回日米学生会議実行委員会